

昭和48年度県営圃場整備事業地域

# 埋蔵文化財発掘調査報告

度会郡玉城町	仲垣内遺跡
	月よべ遺跡
	赤垣内遺跡
	小ばし遺跡
伊勢市上地町	野垣内遺跡
上野市上ノ庄	山ノ川遺跡
上野市猪田	波岸台遺跡

1979.12

三重県教育委員会

# 例 言

1. 本書は、昭和48年度県営圃場整備事業地内の埋蔵文化財調査の結果と昭和47年度県営圃場整備事業地内の埋蔵文化財調査のうち、上野市山ノ川遺跡及び波岸台遺跡の調査結果をまとめたものである。
2. 調査のうち、試掘・遺跡範囲の確認調査は三重県農林水産部の関係各耕地事務所が県文化財調査員等の立合いのもとに実施した。
3. 昭和48年県営圃場整備事業にともなう各遺跡の発掘調査と昭和47年度調査実施の山ノ川遺跡の出土品整理は、三重県と三重県文化財連盟との委託契約のもとに、三重県教育委員会文化課係員が当たった。

4. 本書に用いた遺構標示の略記号は次による。

S B ; 竪穴住居址	S E ; 井戸址
掘立柱建物址	S K ; 土坑
S D ; 溝址	S X ; 方形周溝址・その他

5. 仲垣内遺跡他4遺跡の遺跡地形図の原図は、農林省・三重県「宮川用水改良事業地区平面図」（1：3000 昭和31年11月）、山の川遺跡の遺跡地形図は、上野市「上野市都市計画」（1：2500 昭和46年3月）による。また各遺跡の発掘区の位置図の原図は、各事業地区の現況計画平面図（1：1000）による。なお、遺構実測図等の方位は磁北を用いた。

6. 本書の作成の分担はつぎによる。また本文中の県文化財調査員等の所属は、調査当時のものである。

前言・仲垣内遺跡・赤垣内遺跡 小玉道明

月よべ遺跡 小玉道明 長谷川博

小ばし遺跡・野垣内遺跡 下村登良男

山ノ川遺跡・波岸台遺跡 谷本鋭次

7. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

# 目 次

前 言	-----	1
度会郡玉城町仲垣内遺跡	-----	9
度会郡玉城町月よべ遺跡	-----	21
度会郡玉城町赤垣内遺跡	-----	31
度会郡玉城町小ばし遺跡	-----	51
伊勢市上地町野垣内遺跡	-----	61
上野市上ノ庄山ノ川遺跡	-----	119
上野市猪田 波岸台遺跡	-----	129

# 挿 図 目 次 (左は図面 右は写真)

## (前 言)

### 1 遺跡の位置

#### (仲垣内遺跡)

### 3 遺跡地形図

### 4 遺構実測図

### 5 S B 9 実測図

### 11 出土遺物実測図

### 2 遺跡の遠景

### 6 発掘区全景

### 7・8 S B 10

### 9 S B 9

### 10 S B 13

### 12 出土遺物

## (月よべ遺跡)

### 14 発掘区の位置

### 15 遺構実測図

### 18 土器実測図

### 13 遺跡の遠景

### 16・17 発掘区全景

### 19 弥生土器

## (赤垣内遺跡)

### 21 発掘区の位置

### 24 遺構実測図

### 25 竪穴住居址・掘立柱建物址実測 図

### 32 石器・土錘実測図・土器拓影

### 33 土器実測図

### 35 土器実測図

### 37 時期別遺構配置図

### 20 遺跡の遠景

### 22 発掘区の全景

### 23 発掘区の近景

### 26 発掘区西部

### 27 S B 5・6・7

### 28 発掘区東部

### 29 S B 8・9

### 30 S B 1・2

### 31 S B 5・7・14

### 34 土器・石器・土錘

### 36 出土遺物

## (小ばし遺跡)

### 39 発掘区の位置

### 40 遺構実測図

### 41 S E 4 実測図

### 45 土器実測図

### 47 土製支脚実測図

### 38 遺跡の遠景

### 42 発掘区全景

### 43・44 S E 4

### 46 出土土器

### 48 土製支脚



(野垣内遺跡)

- |                               |                        |
|-------------------------------|------------------------|
| 49 遺跡地形と発掘区の位置                | 50 遺跡の遠景               |
| 51 遺構実測図                      | 52・53 発掘区近景            |
| 60 竪穴住居址実測図                   | 54 16～27区全景            |
| 61 竪穴住居址実測図                   | 55 24～16区全景            |
| 62 竪穴住居址実測図                   | 56 26～32区全景            |
| 74 弥生土器実測図                    | 57 33～17区全景            |
| 75 弥生土器実測図                    | 58 40～33区全景            |
| 76 弥生土器実測図                    | 59 39～47区全景            |
| 77 弥生土器実測図                    | 63 S B 1・2・8・37～39     |
| 78 弥生土器実測図                    | 64 S B 1・7・8・36・39     |
| 79 弥生土器実測図                    | 65 S B 5～7・34・35       |
| 91 平安時代土器実測図                  | 66 S B 31・32           |
| 92 平安時代土器実測図                  | 67 S X 19              |
| 93 鎌倉時代土器実測図                  | 68 S X 23、S K 21・24・26 |
| 94 鎌倉時代土器・石器・鉄器<br>土錘実測図、宋銭拓影 | 69 S B 16・17           |
|                               | 70 S B 15・16           |
|                               | 71 発掘区東端部              |
|                               | 72 S B 20・28           |
|                               | 73 S B 28              |
|                               | 80 S B 2 土器出土状況        |
|                               | 81 S B 43土器出土状況        |
|                               | 82 S X 19土器出土状況        |
|                               | 83 S X 22土器出土状況        |
|                               | 84 S X 23土器出土状況        |
|                               | 85 S X 19周溝断面          |
|                               | 86 弥生土器                |
|                               | 87 弥生土器・石器             |
|                               | 88・89・90弥生土器           |
|                               | 95 S B 13土器出土状況        |
|                               | 96 S D 12土器出土状況        |
|                               | 97 S K 25埋土断面          |
|                               | 98 土師器・山茶椀             |
|                               | 99 土師器・山茶椀・白磁・土錘・鉄器    |

(山ノ川遺跡)

- |         |        |     |       |
|---------|--------|-----|-------|
| 100     | 遺跡の位置  | 101 | 遺跡の遠景 |
| 102     | 遺跡地形図  | 106 | 弥生土器  |
| 103     | 発掘区の位置 | 107 | 弥生土器  |
| 104・105 | 土器実測図  |     |       |

(波岸台遺跡)

- |     |        |     |     |
|-----|--------|-----|-----|
| 108 | 遺跡の遠景  | 111 | 土 器 |
| 109 | 発掘区の位置 |     |     |
| 110 | 土器実測図  |     |     |

# 前 言

## I 遺跡分布調査

この数年来、三重県農林水産部による県営圃場整備事業の実施にともない、現状保存の困難になった遺跡について、それぞれ事前の発掘調査がすすめられてきた。しかしその際にそれらの遺跡を全面発掘するのではなく、発掘調査を必要とする箇所は、鈴鹿市上箕田遺跡（昭和43年度・45年度）のように、新設の排水路工事等により掘り下げられることにより遺跡の消滅する部分<sup>(1)</sup>だけにとどめてきた。また遺跡範囲内における地盤の切り下げを行なう「表土あつかい」による工法<sup>(2)</sup>については、四日市市西坂部町落河原遺跡のように可能な限り避けるか、もしくは他地域から<sup>(3)</sup>耕土を搬入して覆土するか、あるいは、一志郡三雲村中ノ庄遺跡（昭和46年度）のように、「畑寄せ」によってそのまま畑地にすることによりできるだけ保存される範囲を広げるとか、場合によっては、阿山郡大山田村大字中村辻堂古墳（昭和47年度）のように、「地区除外」<sup>(4)</sup>するなどの、工法及び部分的な設計を変更することにより、発掘調査を必要とする範囲を最少限にするようにつとめてきた。こうした方針は、三重県農林水産部耕地課と三重県教育委員会文化課との了解事項として双方において確認されてきたものである。

昭和48年度の県営圃場整備事業の実施にあたって、年度当初の昭和48年5月15日、県農林水産部長から県教育委員会委員長宛に、「県営圃場整備事業地区内の埋蔵文化財について」として、事業実施予定地区の埋蔵文化財の保護と事業実施の円滑を期するための予備調査の依頼をうけた。これにもとづき、各事業地区の遺跡の有無と現況について踏査をすることに至った。

この遺跡分布調査は、昭和48年度の圃場整備事業実施予定地区に関する各教育事務所が主体となり、7月上旬から9月上旬にかけて各耕地事務所の事業地区毎に、県文化財調査員に依頼してすすめられた。当然のことながら調査地域の大半を占める水田は、遺跡分布調査着手時において作付けされた水稻がすでに成長していて、立入りも不可能に近く、主として畑地についての踏査にとどまった。

調査の結果、これまでの遺跡分布調査により周知となっている桑名郡多度町大字御衣野の星鳥遺跡他数件以外に、新に多数の古墳時代後期以降の遺物散布地が知られた。これらは各時代の土器片の散布密度に差がみとめられる程度で、詳細な状況は不明のものばかりである。こうした結果は各教育事務所を通して県文化課において集約し、昭和48年9月22日、「県営圃場整備事業地区内の埋蔵文化財の分布調査結果について」として県教育長から県農林水産部長宛に回答するとともに、(1)埋蔵文化財をできるかぎり現状のまま保存するよう考慮すること、(2)土器・石器等の文化財が散布する箇所については、試掘調査を実施し、埋蔵される遺構の有無を確認することを依頼した。

事業地区別遺跡分布調査概況

事務所		事業地区	面積(ha)	調査員	遺跡	概況	調査日
教育	耕地						
北勢市	桑名	多度	52.4	伊東春夫	多度町御衣野、星取遺跡	土師器・山茶碗等破片散布	7月8日
	四日市	菰野	59.5	片岡雅章	(菰野町吉沢)	——	7月12・15日
		泉	99.9	森逸郎	高角町西瀬古・東瀬古	須恵器片少量散布	7月18日
					北野町 江村町 (上海老町・下海老町)	吉沢塚の塚(径2m、高1m) 土師器・常滑等破片少量散布 なし	7月14日 " 7月15日
鈴鹿	47.2	——	(箕田町)	——			
中津勢		安濃川左岸	35.8	——	(安濃町)	——	
		三雲南部	101.8	岩田直衛	三雲村上之庄、文珠遺跡	土器片散布	
			101.7		"、辻世古中遺跡 " 小金、大蓮寺跡 松阪市美濃田	" 土師器片散布 土器片散布	
嬉野	72.2	岩田直衛	嬉野町須賀、松葉遺跡 " " " "	土師片散布 古墳状のものあり、土師片散布 古墳状のものあり			
松阪	松	下御糸	190.0	世古且守	明和町中村	土師器片・土錘多数散布	
					" 内座 " 養川 " 北藤原 " 川尻	土師器片多数散布 土師器片散布 " "	
松阪		多気	26.0	奥義次	多気町東池上字池尻 " " 字坂倉	土師器・須恵器片多数散布 土師器片少量散布	
		伊勢	外城田	130.1	奥義次	多気町森荘字川浦	石簇・フレイク・土器片多数散布
" 笠木字ユヅチ 玉城町東原	土師器・土錘少量散布 チャートフレイク微量散布						
" 矢野字小ばし " 野篠字赤垣内 " " 字伸垣内	土師器片微量散布 フレイク・土師器・須恵器片少量散布 フレイク・土師器・弥生土器片散布						
南勢志摩		玉城第2期	93.0	西村忠之	伊勢市上地町字野垣内 " " 字豆塚 " 中久保・湯田町 ( " 六軒屋・十軒屋)	土師器片・須恵器片・山茶碗片多量散布 土師器細片微少散布 土師器片数片散布 "	7月28・31日 " " "
		御菌	40.0	西村忠之	御菌町高向・上長屋	土師器細片・土錘1個	7月26・27日
		上野西部	144.0	森川桜男 西嶋 覚	上野市東出 " 百田 " "	ゴロ塚(径7m、高1.5m) 中村遺跡隣接地 弥生土器・土師器片散布	7月8日 " "

上野	上	上野南部	34.5	森川桜男 西嶋 寛	上野市摺見	横穴式石室の石材集積 石神塚古墳・將軍塚古墳 土師器・須恵器・瓦器片少量散布	7月8日 " "
		名張北部	55.3	水口昌也	名張市中村 (名張市小波田)	須恵器片 ——	7月8日
	大山田	124.3	森川桜男 北川乾一 岡本武和	(大山田村甲野・平田・出後)	——	7月10・14・15日	

## II 試掘調査

試掘調査の実施については、昭和48年10月、県文化課、県耕地課及び各耕地事務所担当係による全体打ち合せ会を開催し、それぞれ「調査計画書」にしたがって行なうこととした<sup>(5)</sup>。とくにこの調査は、関係者の現地立合いにより、工事計画との整合を主眼に試掘個所をきめ、試掘作業は各地区担当の三重県文化財調査員、あるいは関係市町教育委員会文化財担当係の指導により行なった。この際の試掘作業員の配置には、地元土地改良区および関係地元区長各位の協力を受けた。

多度地区の多度町大字御衣野、星鳥遺跡については、桑名高校教諭伊東春夫氏の指導により、昭和48年10月11日から11月4日の間において試掘調査が実施された。東西約90m、東北約30mの範囲の水田に9か所の試掘坑を設定して行なわれた。試掘坑のうちには厚さ30cm～40cmの山茶碗片を主とした包含層も認められたが、遺物がまとまって出土する所はなく、本調査に至らなかった。またこの試掘調査によって出土した、山茶碗・土師器皿・同襷・常滑焼甕の破片は一括して、遺跡の隣接地の草薙神社において保管された。

県地区の四日市市江村町・北野町にわたる竹谷川右岸の畑地部分においては、少量の極めて薄い土師器片・山茶碗片が散見されたため、三重小学校教諭森逸郎氏の指導により、12月1日～3日に試掘調査が実施された。調査の結果は赤土の地山面に黒色土が覆われているだけで遺構・遺物ともにみとめられなかった。この試掘調査の実施方法については、県耕地課、四日市耕地事務所・地元改良区、県文化課との協議により、三重県知事と三重県文化財連盟会長との委託契約によって実施することになったものである。

また県地区の遺跡分布調査の際には認められなかったが、四日市市寺方町字井沢の水田における「表土扱い」の工事中に、11月上旬、新に遺跡が発見された。その範囲は、圃場整備事業の水田の新しい一区画にあたる30m×100mで、表土の除去された地山面に土坑、溝址が露出し、時期の判別しがたい土師器片が出土したのである。その保護について、県文化課、県耕地課、四日市耕地事務所、北勢教育事務所、四日市市教育委員会社会教育課、地元土地改良区において協議した結果、当初はさらに地盤を切り下げる計画のため遺跡の現状保存が困難で本調査の実施が必

仲垣内・月よべ・赤垣内・小ばし各遺跡試掘坑の概況

遺跡	地点	深さ cm	遺構	出土品	遺跡	地点	深さ cm	遺構	出土品
仲垣	1	30	——	——	赤垣内	1	40	——	土師器
	2	20	——	——		2	30	——	土師器
	3	30	——	土師器		3	70	——	石包丁・土師器・須恵器
	4	40	柱 穴	土師器・山茶碗		4	20	——	
内	5	70	——	土 錘	小ばし	1	50	——	土師器・山茶碗
	6	70	——	——		2	50	——	” ・ ”
	7	30	竪穴住居址	土器片		3	50	——	” ・ ”
月よべ	1	40	方形周溝	土師器	(註) 深さは、地表から地山面まで。				

要とされたが、再度検討され、当初計画より覆土を厚く盛り、仕上り地盤を高くすることにより調査を実施せずに保存されることになった。

三雲南部地区及び嬉野地区の遺跡及び古墳状のものについては、11月上旬に津高校教諭岩田直衛氏、下御糸地区の遺物散布地については、10月下旬に松阪市大河内小学校教諭世古且守氏の指導により、それぞれ試掘調査が実施された。これらはいずれも地表においてはかなりの土器片の散布の認められるものであったが、試掘調査によれば、遺物包含層も遺構も認められなかった。

多気地区については、多気町教育委員会小林克巳氏の指導により10月29日・30日に試掘調査が実施された。多気町大字東池上、池の尻遺跡については少量の土器片が出土しただけであったが、同坂倉遺跡においては、室町時代の土師器片、山茶碗片が出土し、溝址、小穴も検出され、本調査の必要が認められた。松阪耕地事務所及び地元土地改良区等との協議により、昭和49年度において本調査を実施することになった。

外城田地区においては、多気町大字森荘、川浦遺跡は柿園であって、地区除外の方向で遺跡の現状保存が検討されることになり、試掘調査対象地からはずすに至った。またその他の遺物散布地については、県文化課及び玉城町教育委員会係員の立合いのもとに、地西土地改良区職員等により試掘調査が実施された。そのうちでも特に玉城町大字矢野の小ばし遺跡、大字野篠の赤垣内遺跡、同月よべ遺跡、同仲垣内遺跡は、伊勢市厚生中学校教頭西村忠之氏の指導により、11月5日、6日に試掘調査が行なわれ、それぞれ各遺跡ともかなりの量の遺物が出土したため本調査するに至った。

玉城第2期地区については、伊勢市上地町字野垣内及び豆塚を前記西村忠之氏の指導により、10月23日、24日に試掘調査が行なわれた。試掘箇所は、遺物散布地をほぼ南北に横断することになる幹線排水路計画敷約450 m と、これにほぼ直交する小排小路計画敷約200 m について20 m 間隔で1 m × 2 m の試掘坑を33か所設定し、さらに工事による削平の予想される箇所に試掘坑を2か所設定した。その結果、幹線排水路計画地でも南半の試掘坑のほとんどから弥生時代後期土器片を主とした遺物が出土し、さらには柱穴及び炉址等の遺構が検出され、削平予定地の試掘坑か

### 野垣内遺跡試掘坑の概況

地点	深さ cm	遺 構	出 土 品	地点	深さ cm	遺 跡	出 土 品
6	25	——	——	96	30	——	——
11	40	柱穴2	弥生土器・土師器・緑釉陶器・山茶椀	101	30	——	——
16	50	丸	弥生土器・土師器・山茶椀	106	30	——	——
21	100	柱穴1	弥生土器・須恵器・土師器・山茶椀	111	30	——	——
26	50	——	弥生土器	B	50	——	土師器
31	40	——	石器・土師器	C	90	溝 址	土師器・山茶椀
36	50	炉 址	弥生土器	D	110	——	土師器
41	40	石 組	土師器	E	130	——	弥生土器
46	50	——	弥生土器	F	120	——	石器・弥生土器
51	40	——	弥生土器	G	70	——	山茶椀
56	50	——	——	H	20	——	——
61	60	——	——	I	10	——	——
66	50	——	——	J	20	——	——
71	30	——	——	K	30	溝 址	土師器・須恵器
76	30	——	——	L	20	——	土師器
81	30	——	——	X	50	石 組	宋銭6・土師器
86	30	——	——	Y	40	土 壇	白磁・弥生土器・土師器・山茶椀
91	40	——	土師器	(註)アラビア数字；幹線排水路 ローマ字；支線排水路 X・Y； その他			

らは宋銭及び完型の宋磁椀が出土するなど、本調査の必要が明らかになった。

御園地区は、事業地域の未決定、上野西部・同南部地区は事業実施の繰越しにより、試掘調査は実施されなかった。

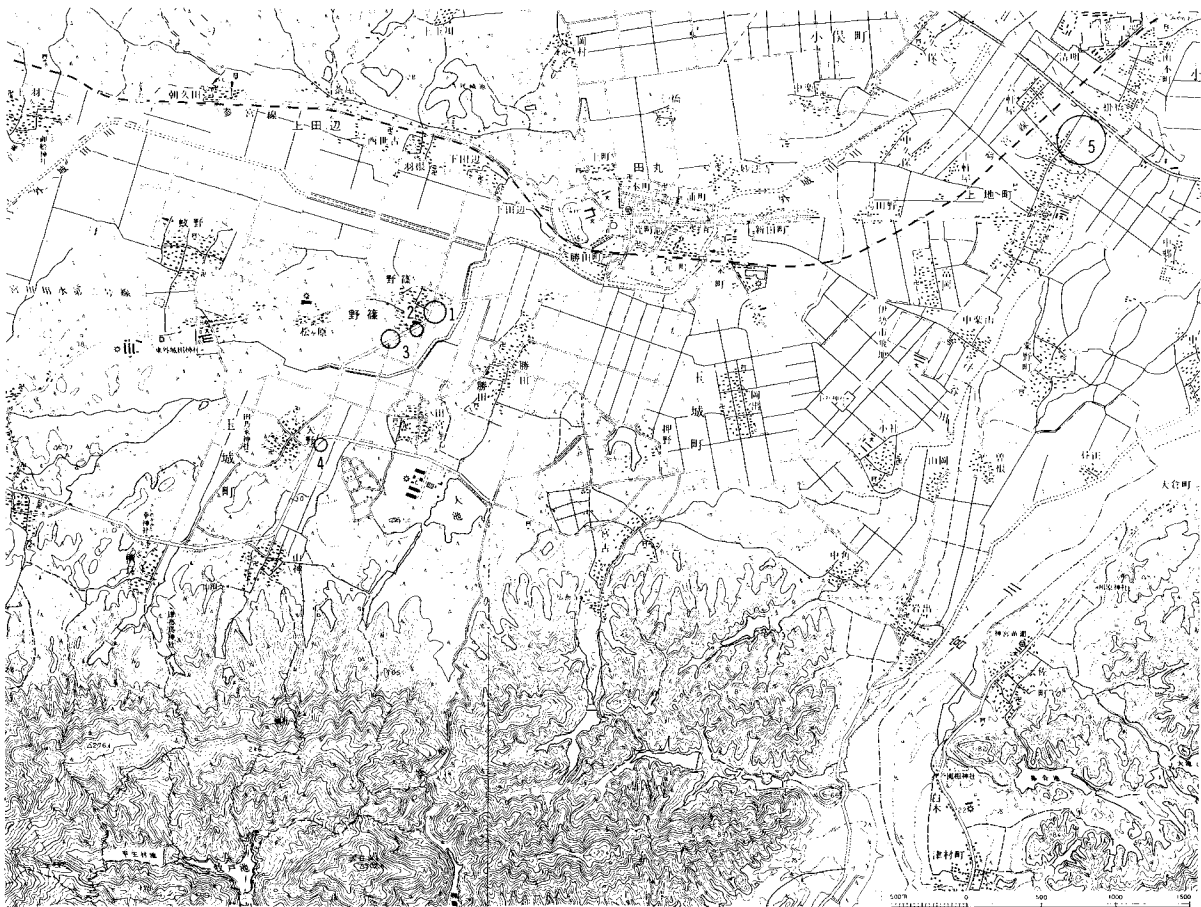
## II 本調査の実施

試掘調査を実施した27件の遺跡のうち、本調査は遺構・遺物とともに確認され、しかも地盤の切り下げ及び排水路の新設等の工事計画の変更の困難な外城田地区及び玉城第2期地区の4か所の遺跡について実施した。調査の経費負担方法については、県耕地課と県文化課において協議した結果、県農林水産部が負担することになり、さらに三重県知事と三重県文化財連盟会長とにおける委託契約によって実施することにして、12月9日契約を締結した。そのため発掘調査は三重県文化財連盟を調査主体とし、県文化課係員を調査担当者に、県文化財調査員を調査員にあててすすめることになった。この現地発掘調査はもっとも発掘を必要とする面積が広く、しかも工事着手の急がれた伊勢市上地町野垣内遺跡を12月25日から実施し、続いて度会郡玉城町野篠、仲垣内遺跡・月よべ遺跡・赤垣内遺跡、同町矢野、小ばし遺跡を、昭和49年1月11日から2月21日ま

で実施した。

このうち野垣内遺跡の発掘調査においては、幹線排水路計画地のうちから予想外に遺構及び遺物が多く検出され、調査当初計画地の北側へ幅10m、長さ30mについて追加調査し、1月19日に発掘作業を終了した。また仲垣内遺跡については、狭い範囲の本調査ではあったが、かなり密度の高い遺構が地表下20cmから30cmの浅い所に埋没していることが判明した。そのためもし圃場整備工事が当初計画通り実施されれば、未調査地域に埋没の予想される遺構の破壊をもたらすことになる。したがってそれらについて事前調査が必要となり、相当期間を要することになるので、関係者において再度検討し、極力表土の移動をさける「山なり整地」をすることにより、遺跡の保護につとめることになった。

調査の実施に際しては、三重県農林水産部伊勢耕地事務所、宮川左岸第二土地改良区、城西土地改良区の全面的な協力をはじめ、伊勢市教育委員会、玉城町教育委員会、伊勢市上地地区、玉城町野篠・矢野地区各位の参加を得た。また明和町教育委員会青木進氏には、ひとかどならぬご援助を得た。それぞれ記して謝意を表したい。なお調査担当者及び参加者の所属は、調査当時のものである。



1 遺跡の位置（国土地理院「国東山」「伊勢」1：2.5万）  
1.仲垣内遺跡 2.月よべ遺跡 3.赤垣内遺跡 4.小ばし遺跡 5.野垣内遺跡



## 発掘調査参加者一覧表

遺跡名	調査期間	調査担当者	調査参加者
仲垣内 月よべ 赤垣内	49. 1. 11 ~49. 2. 21	三重県教育委員会 文化課 小玉道明	三重大学歴史研究会原始古代史部会 長谷川博・松岡均・村田照久・倉田直純・ 芦部公一 県立松阪商業高校教諭奥義次・玉城町教育委員会岩崎澄雄・同辻村修一
小ばし	49. 2. 4 ~49. 2. 12	三重県教育委員会 文化課 下村登良男	三重大学歴史研究会 長谷川博、玉城町教育委員会辻村修一
野垣内	48. 12. 25 ~49. 1. 19	三重県教育委員会 文化課 下村登良男	伊勢市厚生中学校教頭 西村忠之・同教諭 加藤茂、度会町内城田中学校教諭 中西健

## Ⅳ 山ノ川遺跡・波岸台遺跡の調査

上野市下ノ庄、山の川遺跡は従来まったく知られていなかった遺跡である。昭和47年度当初の県営圃場整備事業に伴う事前の埋蔵文化財の確認において、水田中に少量の土師器片の散布を見たのみであった。このため、工事中の発見の可能性も考えられたために、一応、工事立会を行なうことで、農林水産部と話し合いがっていた。

そこで、遺跡であろうと当初予想していた個所について工事立会を実施したが、遺物の出土は全く見られなかった。ところが、昭和48年1月、上野市教育委員会から、工事現場において土器片が多数出土しているとの連絡をうけた。そこで、県および市教育委員会、上野耕地事務所との三者で現場を確認したところ、現場は山の川の改修工事に伴って、仮排水路を重機によって掘削した個所で、当初遺跡と予想していた場所から約500 m 程上流であり、周辺には多数の弥生土器片が散乱していた。耕地事務所と協議をしたところ、計画水路部分について急拠発掘調査を実施することとなった。そして、遺跡を河川の名称にちなみ、「山の川遺跡」と呼ぶこととした。

一方、波岸台遺跡は事前の分布調査によって土師器片の散布が認められ、遺跡と判明した個所である。当初の圃場整備計画では削平されることになっており、計画の実施に先立ち発掘調査を行わなくてはならない状況であった。そこで、まず遺跡の状況を把握するため、試掘調査を実施することとした。試掘調査は昭和47年12月、2 m 四方のグリッドを11か所設定して行なった。その結果、波岸台遺跡は約3000㎡の範囲におよぶものであることが判明した。そこで、再び上野耕地事務所と協議を重ね、当初の計画を変更し、この遺跡の部分は削平することをやめ、現状保存されることとなった。これら両遺跡の発掘調査は三重県教育委員会が主体となり、森川桜男、西島覚両氏の全面的な協力を得て実施した。調査に際しては上野市教育委員会、上野耕地事務所には種々ご配慮を頂いた。記して謝意を表したい。

## 註

- (1) 仲見秀雄・直田幸成・大場範久『上箕田 — 弥生遺跡第2次調査報告』 鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会 1970 谷本鋭次『上箕田遺跡調査報告』 三重県教育委員会 1971
- (2) 谷本鋭次『四日市市西坂部町・落河原遺跡』『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1973
- (3) 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1973
- (4) 森川桜男他『辻堂古墳発掘調査報告』 大山田村教育委員会 1973
- (5) 県営圃場整備事業地区埋蔵文化財調査計画書

### 1. 目的

県営圃場整備事業により、現状変更をうける埋蔵文化財について、事前に予備発掘調査を行ない、その規模性格等を明らかにし、文化財保護の徹底をはかる。

### 2. 調査主体、調査担当者

関係教育事務所、各県文化財調査員

### 3. 調査の方法

- (1)遺跡分布調査により判明した遺跡について、別紙付図の地点を発掘する。
- (2)発掘個所は、次の地点を行なう。
  - ①用排水路、新設農道
  - ②表土を30cm<sup>\*</sup>以上移動する場合、削平する個所（※約30cm前後とする）
- (3)発掘坑は原則として、20m間隔、1か所が2m×4mとし、地山まで掘り下げる。とくに掘り方の断面は、ていねいに削り、土層の観察を十分に行なうこと。
- (4)出土品は発掘坑毎に収納すること。

### 4. 調査結果の処理

- (1)調査担当者は、別紙（省略）の項目にしたがい調査結果をまとめる。
- (2)本調査の要、不要は、教育事務所、調査担当者（文化財調査員）、県文化課、耕地課、耕地事務所等の現地立会により決める。

### 5. 調査費等

調査費は県農林水産部の負担とし、作業員の配置についても考慮すること。

### 6. その他（省略）

# 度会郡玉城町仲垣内遺跡

## I 位 置

仲垣内遺跡は外城田川とその支流の三郷川にはさまれて、東西につづく蚊野丘陵地の東端の畑地にある。行政的には度会郡玉城町大字野篠字仲垣内に属している。遺跡のあるこの丘陵東端部は標高約28mで比較的なだらかな起伏をしめし、東側と南側の縁辺部は小崖状をなし、それぞれ水田面との比高は約5mである。遺跡所在地の南麓は、三郷川の谷底平地となって、南西方向の矢野あるいは積良へ細長く水田が入りこんでいる。北側は本流の外城田川のかなり広い氾濫平地が東西に続いている。調査着手時においては、町道と東側及び南側の水田との間の北東から南西に細長い巾80m前後、長さ約350mの畑地の全域に、各時代の土器片が散在し、相当広範囲な遺跡が想定された。今回、合わせて調査した南西150mほど離れた月よべ遺跡もこの仲垣内遺跡とともに一体となった遺跡と思われる。

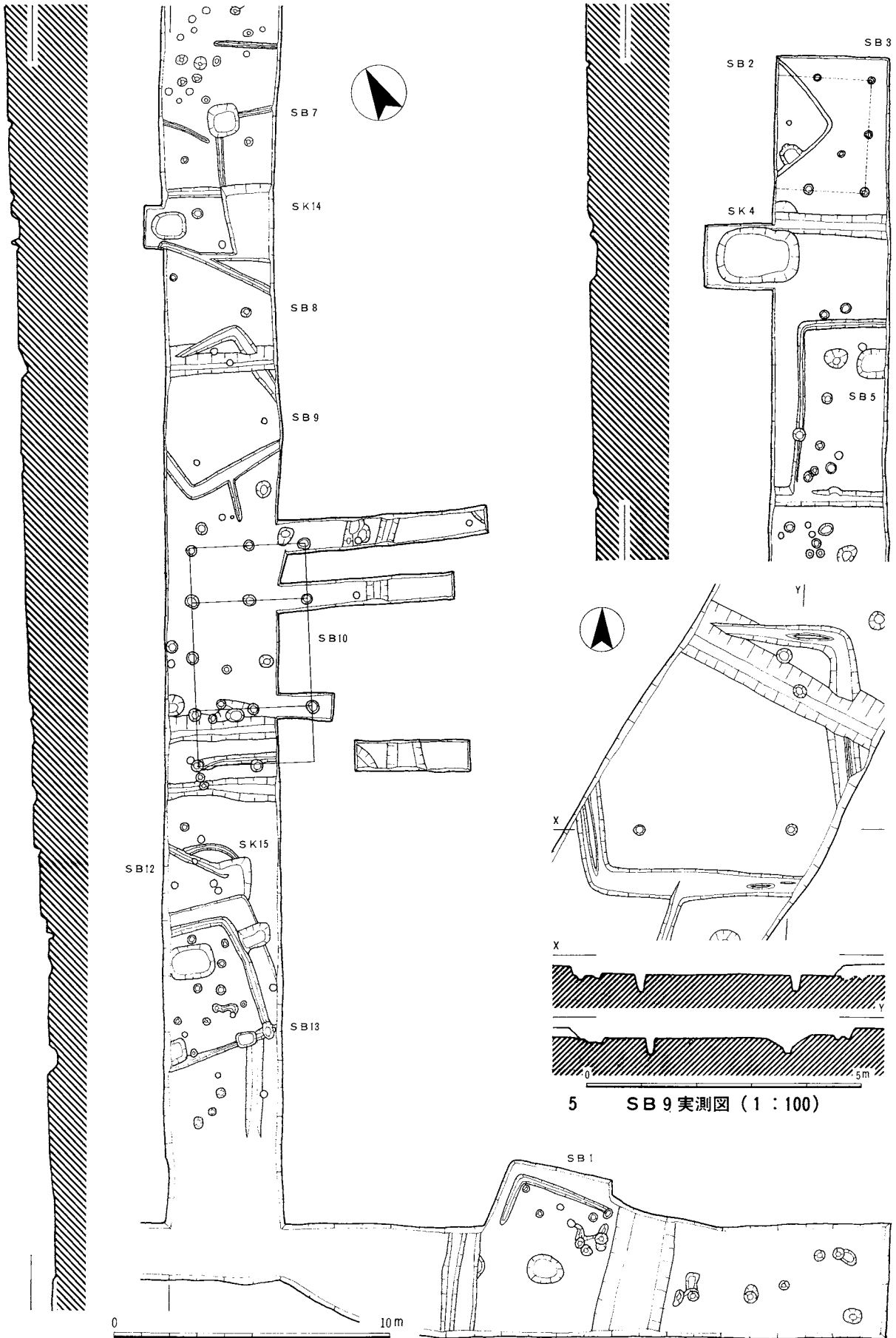
この遺跡の知られたのは比較的新しく、昭和30年代の町道改良工事の時、道路側溝の掘り下げにより弥生土器が出土したこと、あるいは、遺跡の南麓の通称「堂前」の水田の床下げによって土師器が多数発見されたことなどによってである。またさらには、今回の圃場整備事業を原因とした昭和48年11月の試掘調査によって多数の土師器片が発見され、遺跡であることがはっきりしたのである。

## II 遺 構

調査は、遺跡の北半において計画された東西方向の排水路部分については巾2m、長さ30m、及び巾4m、長さ22mの範囲を、また南北方向の排水路と農道部分については巾4m、長さ64m







4

遺構実測図 (1 : 200)

5 SB9 実測図 (1 : 100)

の範囲について行ない、多数の遺構と遺物を検出した。東西方向の排水路部分でも西半では、地山面までがかなり深く60cm～1 mに及んだ。遺物包含層は厚さ40cmほどであるが、出土した大半の土器は小片で、弥生時代以降各時代のものが混在していた。

とくに多数の遺構が検出されたのは南北方向の排水路及び農道となる部分で、地表下約15cm～20cmの浅い所で固い地山面となり、竪穴住居址、掘立柱建物址、土壇などが検出された。これらは北から南へゆるやかに傾斜する所にあり、その高低差は2 mほどとなっている。

## 1. 弥生時代の遺構

### (1) 竪穴住居址

**SB 1** 発掘区の南端において地表下10cmに検出された方形の竪穴住居址。全体に傾斜地につくられたため、床面の大半が流出したのか、周溝も北東辺と北隅だけがみとめられ、全体の規模も不明。北隅の径70cm、深さ30cmの小穴が支柱穴の一つと思われる。出土品は弥生土器の細片だけで、時期も明確でない。

**SB 2** 発掘区のもっとも北端において地表下20cm前後に埋まっていた。すでに上面が畑耕作による削平あるいは流出したのか、竪穴住居としての掘り方もなく、住居の内側と外側とがほとんど平坦で、周溝による区画と、床面上の黒褐色のうすい遺物包含層によって住居と確認したもの。西半は未掘。南辺には径60cm×80cm、深さ40cmの平面が方形にちかい貯蔵穴がある。その内部と周囲から壺1個体分の破片が出土した。

**SB 9** ほぼ全体の形状のわかる方形のもの。竪穴の深さは、斜面の上方にあたる北東部では約10cm～15cmほどであるが、南西部では住居の内外は全く平坦。周溝は巾40cm～50cm、深さ5cmほどで、他の竪穴住居に比べ広いが、数個所においては、二重になっていて、ほとんど重複した建替えを思わせる。支柱穴は北西隅にあたるものは未掘であるが、他は径20cm前後、深さ40cm前後のものである。炉址は不明。

### (2) 土壇

**SK 4** 発掘区の北端にあり、弥生時代前期の壺、甕片が出土していて、この仲垣内遺跡ではもっと古い時期の遺構である。径2 m×3.2 m、深さ30cmの平面が隅丸の長方形にちかい。底面はほとんど平坦。

## 2. 古墳時代の遺構

### (1) 竪穴住居址

**SB 5** 古墳時代後期の土師器が、山茶碗など他の時期の土器と混在していて、この時期の



6

発掘区全景（北から）



7

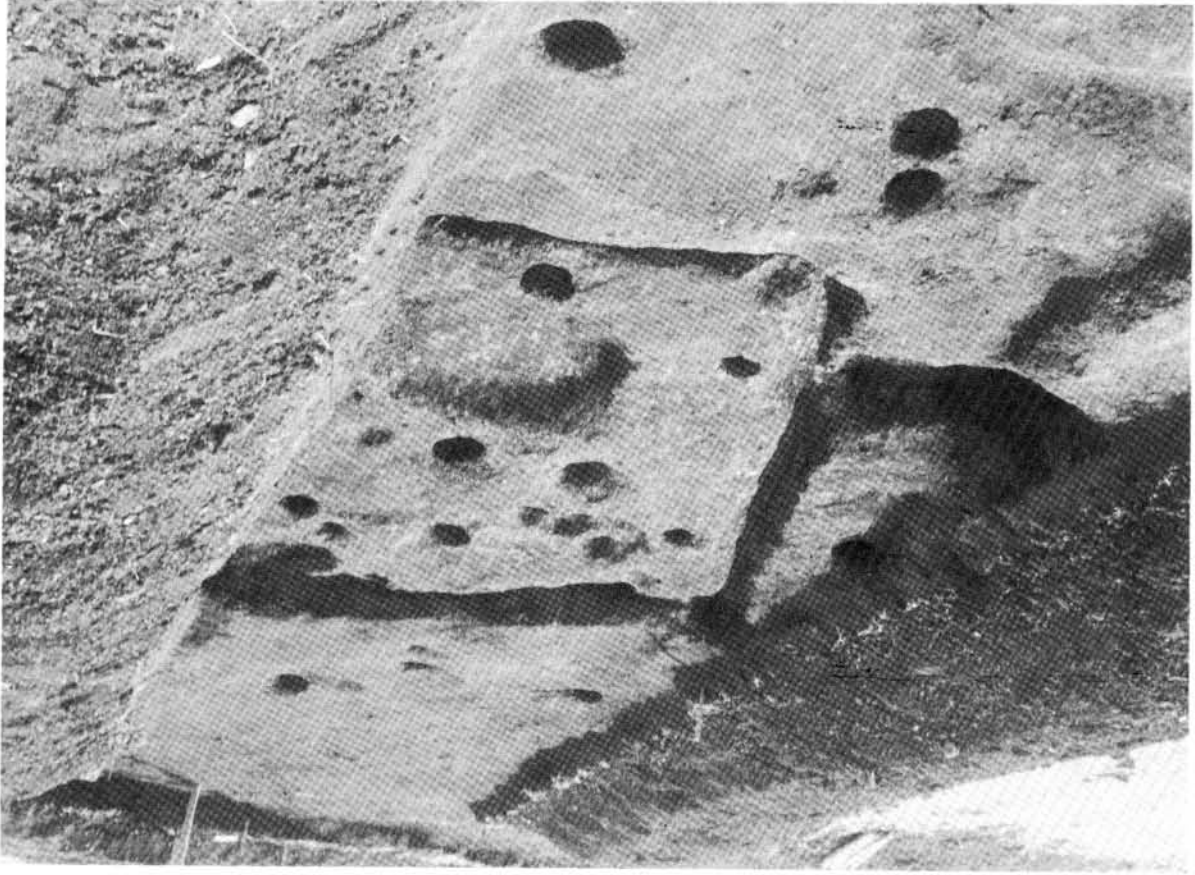
S B10（北から）



8

S B10（南から）







住居址とは断定しがたいものである。竪穴の掘り方としては、深さ20cmほどある。南辺は畑の境溝と重複していて不明。

**S B 8** 北東辺の周溝と支柱穴の内の北側2個が検出された。南半は弥生時代後期のS B 9竪穴住居址と重複していて、明確に検出されなかった。竪穴としての掘り方は深さ15cmほどで浅く、周溝は巾25cm、深さ6cm前後である。支柱穴は径30cm、深さ40cmほどのものである。北東辺の中央にはかまど址と思われる焼土面がわずかにのこっていた。

**S B 12・13** 発掘区でも傾斜地の下方にあたる南端近くにおいて、ほとんど重複してつくられている。それぞれ竪穴内の埋土の状況からは、S B 13竪穴住居を、地山の同質の赤褐色の粘質土で埋めこみ、S B 12竪穴住居の床面をつくっていることがみとめられた。S B 12竪穴住居は、掘り方が15cm～20cmほどあるが、周溝はつくられていない。S B 13竪穴住居では周溝が巾25cm前後、深さ20cm前後で、かなり深く掘りこまれている。竪穴内の北寄りには巾1.2m、長さ1.7m、深さ20cmの、また南西寄りには貯蔵穴を思わせる巾1.9m、長さ1.7m以上、深さ30cmの土壇がある。それぞれ土器片が少量出土している。また床面上には小穴がいくつか検出されたが、そのうち、S B 13竪穴住居の東辺内側沿いの径20cm前後、深さ50cmのものは、その位置からS B 12竪穴住居の支柱穴と思われる。S B 13竪穴住居の支柱穴は明らかでない。

### 3. 平安時代の遺構

#### (1) 掘立柱建物址

**S B 3** 桁行1間、梁行2間分が検出された。東側では妻の部分が検出されているので、3×2間の東西棟と思われるが西半は未掘。柱掘り方は径30cm前後、深さ40cm前後で、あまり大型ではないが、比較的深い。柱間は桁行、梁行とも2m程で、完数尺にすれば7尺等間のものといえる。東入側柱穴内には土師器片が多数埋まっていた。

竪穴住居址・掘立柱建物址の規模（ ）は推定

名 称	規 模(m)		深 さ(cm)	南 北 軸
	東 西	南 北		
S B 1	—	—	—	N 40° W
S B 2	—	—	—	N 11° W
S B 9	4.6 ~ 5.2	4.4 ~ 4.8	10 ~ 15	N 2° W
S B 5	—	(6.5)	20	N 40° E
S B 8	—	(5.0)	15	N 37° W
S B 12	—		15 ~ 20	N 8° E
S B 13	—	(4.8)		N 8° E
S B 3	(6.0)	4.0	/	N 57° W
S B 10	4.2	9.6		N 62° W

**S B 10** 桁行、梁行ともに2間の平面方形の身舎に北と南に1間分の廂をそなえたもの。柱間は桁行が2.1mで7尺、梁行が身舎、廂とも1.9mで6尺が考えられる。柱掘り方は身舎、廂とも径40cm～50cm、深さ35cm～40cmでほとんど同じである。

### III 遺 物

弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代の各時代の土器が出土している。それぞれ遺構に埋っていたものの他、耕土下のうすい遺物包含層に混在していたものが多い。土器の遺存状態は悪く、器表が全く剥落するものが大半をしめる。

#### 1. 弥生時代の土器

1-5 SK 3 土壇に埋まっていた前期終末と考えられる壺、蓋、甕の破片である。いずれも器表は赤褐色をしめし、胎土には砂粒を多く含んでいる。器表は剥落しているものが多いが、比較的へら研磨などにより、ていねいに仕上げられている。

6-8はSB 1 竪穴住居出土の壺の破片でSB 9 竪穴住居出土の9-10とともに後期のものである。壺6は口縁部の端面には3条の沈線、内面に2列のへら描き文をつけている。肩部に櫛描きの横線文と波状文をつけた胴部の破片も出土している。高杯10は脚部の破片で櫛描きの沈線と千鳥足風に一段3方ずつ二段の円孔をつけている。

#### 2. 古墳時代の土器

##### (1) 土師器

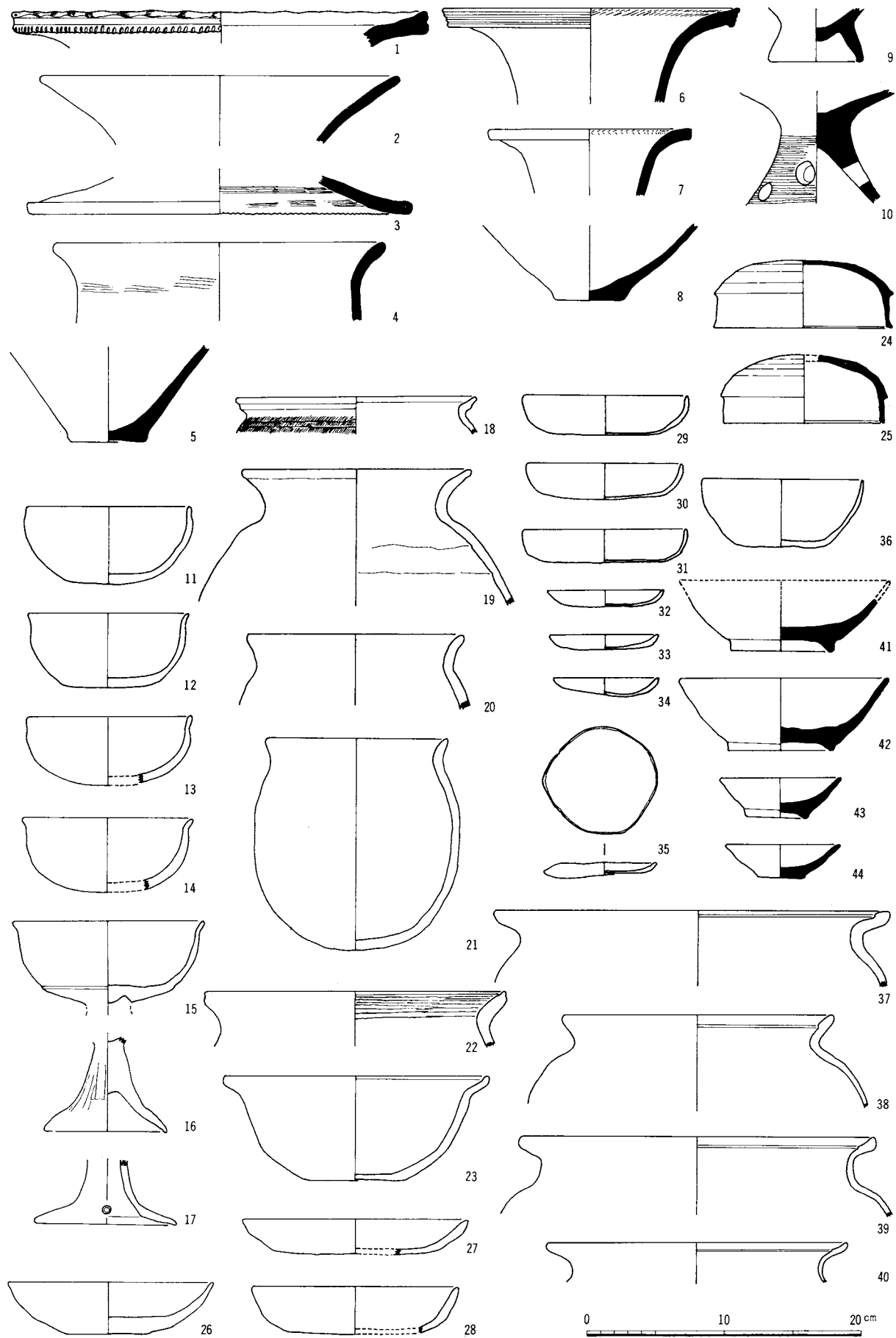
須恵器を伴出しないSB 8 竪穴住居出土の椀11・13、甕18-19と、須恵器杯24-25とともにSB 13 竪穴住居出土の椀14、高杯15-17、甕21、その他から出土した甕20・22、鉢23がある。

**椀 (11-14)** 径12cm前後、高さ5.5cm前後で、口縁部が小さく外反したもの。器表はほとんど剥落していて調整は不明だが、赤褐色の胎土は砂粒をほとんど含んでいない。

**高杯 (15-17)** 15は椀状の深い杯部で、底部と体部とのさかいは段をしめす。脚部の形状は不明。16・17は脚部である。16は杯部との接合部分が極めて厚く、この時期に一般的にみられるものとは異なる。柱状部はたてにへら研磨されて、不揃いな面をなす。17は脚端部のみであるが、器壁は薄

遺構別実測遺物対照表

遺 構	遺 物 番 号
弥生時代	SB 2 6-8
	SB 9 9・10
	SK 4 1-5
古墳時代	SB 5 2
	SB 8 11・13・18・19
	SB 13 14-17・21・24・25
平安	SB 10 26・27・37
	SK 14 28
鎌倉	SK 15 29-35・38-40・3・44
その他	12・20・23・36・41・42



11

出土遺物実測図 (1 : 4)

く、一方に小さな円孔をそなえている。いずれも胎土には砂粒がふくまれていない。

**甕 (18-22)** 18はS字状口縁をなし、台付のものである。肩部のハケ目はこまかい。19-20はくの字に外反した口縁部のもの。全体の形状は不明。19の内面には輪積痕がみられる。21は径13.5cm、高さ15cmの丸底で、口頸部の短いもの。器表の調整は粗雑で、凹凸をのこす。22は端部が小さくひき出されて立ちあがるもので、頸部の器壁は厚い。口縁の内面は横にあらひハケ目。

**鉢 (23)** 径19.5cm、高さ7.5cmの平底のもの。端部がひきだされてわずかに立ちあがる。器表が全く剥落して調整不明。

## (2)須恵器

**杯 (24-25)** 肩で鋭い稜線をめぐらし体部が垂直の蓋。端部は小さな面をなし、わずかに凹線状をなす。天井部はていねいにへら削りされる。これと対になる身の破片、頸部の太い甕の口縁部片なども出土している。

## 3. 平安時代の土器

### (1)土師器

**皿A (26)** 径15cm、高さ3.8cmの糸切り底のもの。内外ともよく調整され、胎土に砂粒をふくまないものである。

**皿B (27-28)** 径15cm~16.5cm、高さ2.5cm~3.5cmの底部の広いもの。口縁部だけていね



いに横なで仕上げされ、他の部分は凹凸をのこしたままである。

鍋(37) 口縁部が内側で段をなし肥厚したもの。口縁部は横なで仕上げされているが、肩部以下は凹凸をのこす。肩部にはススが付着したままである。

#### (2)山茶碗・山皿

山茶碗(41-42) 41は口縁部を欠くが、内面はあつく灰釉がみられる。底部下面の糸切りは41・42ともほとんど消されている。

山皿(43-44) 高台付の43と、底部がやや厚くつくり出された44がある。いずれもていねいに水引きされている。

### 4. 鎌倉時代の土器

#### (1)土師器

皿(29-31) 径11.5cm~12cm、高さ2.5cm~2.8cmの底面が広く、器壁の全く薄くつくられたもの。口縁部のゆがみもひどく器表の凹凸のひどいもの。黄白色のものが多く胎土にはほとんど砂粒をふくまない。小皿とともにS B 11・12竪穴住居址の埋土上層から大量にまとまって出土している。

小皿(32-35) 径8cm前後、高さ1.2cm前後のもの。皿と同様、器壁はきわめて薄く、口縁部、体部ともゆがみがひどい。数10枚がまとまって出土している。32-35は、口縁部の一方がややせばまり、片口風になっている。

鍋(38-40) 口縁部が内側で段をなして、肥厚するもので、38のようにくの字にまがる鍋Aと、39のように頸部がたちあがる鍋Bに大別される。それぞれ胎土に砂粒を多くふくむ。39-40は口縁部までススがよく付着している。

## IV 結 語

仲垣内遺跡は、弥生時代前期、同後期、古墳時代後期、平安時代後期等の各時期に断続的に営まれた集落址である。遺跡の範囲としては約25,000㎡が考えられるが、その範囲内における各時期毎の占地は明らかでない。

弥生時代前期では、小土坑1基で、壺、甕などの土器片の出土にとどまる。これまでの調査では、南伊勢の主要河川である榑田川流域以南での同時期の遺跡として、多気郡明和町・金剛坂遺跡、同大字上村・神前山1号墳所在地、同郡多気町・河田古墳群所在地、伊勢市磯町・大藪遺跡などが知られ、それぞれ少量の土器片が採取されている<sup>(1)</sup>。いずれもその出土範囲はせまく、小規

模な居住地の形成されていたことをあらわし、土器形式からは弥生時代前期でも新段階に位置づけられている。この仲垣内遺跡もそうした時期の小居住地であったということができるとともに、この外城田川流域では最も早い時期に稲作農業をはじめた地といえる。立地としては沖積地に接した低丘陵地にあって、県内の他の遺跡と同様である。

弥生時代後期では、3棟の竪穴住居址が検出されている。ほぼ形状のわかるのはSB9住居址だけであるが、一辺5m以下の小形のもので竪穴としての掘り方も浅い。4本の隅柱を主柱とし、SB1・2では北辺の壁面に接して貯蔵穴と思われる小土壇をともなう。集落としての規模は明らかでないが、遺跡の西側を縦断する町道の工事の際にも同時代の土器が出土していて、かなりの規模が考えられる。出土品は土器片にとどまり、石器類はない。西隣の赤垣内遺跡では数点の石器が発見されていて、この仲垣内遺跡でも石器の使用されていたことは考えられるが、極めて少量であったにちがいない。

東方約3km～4.5kmの宮川西岸の台地上には、度会郡玉城町の小社遺跡、伊勢市上地町の中楽山遺跡、同、野垣内遺跡などいずれも範囲が数万㎡の弥生時代遺跡がある<sup>(2)</sup>。これらからはかなり密度高く住居址等の遺構が検出され、墳墓としての方形周溝址も検出されている。大規模な農業村落が形成されていたことをあらわしている。同じ宮川下流でもこれらの遺跡とは相対する東岸にこうした大規模な遺跡が知られていないことは極めて対照的である。仲垣内遺跡は外城田川流域にあたり、流域は異にするが、宮川北岸地域では、もっとも西部に位置し、この地域での拠点的な集落ともいえる。西隣りに月よべ遺跡とした方形周溝址群とともに、さらに西隣の赤垣内遺跡をふくめて、これら同時代の有機的な遺跡であるとして、そうしたことが考えられる。

古墳時代後期では3棟の竪穴住居址がある。規模としては、弥生時代後期のものと同様、一辺5m前後のもので、竪穴としての掘り方も浅い。SB8では北辺の壁面寄りにかまど址をともなっていて、この時代の住居の特徴をそなえる。出土土器からは5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。

平安時代後期では、掘立柱建物址2棟がある。それぞれの建物の棟方向はほとんど同じであるが、西に偏っている。SB10建物址は南北に長いもので、方形の身舎に北と南に廂をつけたものとしたが、身舎、廂とも柱間も柱穴の大きさも同じで、更に未発掘の両側へもつづいて、総柱の倉庫と考えられなくもない。西方の赤垣内遺跡の同時期の掘立柱建物群とともに、この時代の集落を構成する一部と考えられる。

#### 註

- (1) 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告』I 多気町教育委員会 1974  
山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』 明和町教育委員会 1971  
下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告』 明和町教育委員会 1973  
吉水康夫「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1973
- (2) 下村登良男「中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1973

# 度会郡玉城町月よべ遺跡

## I 位 置

月よべ遺跡は、北東約150mの仲垣内遺跡、南西約200mの赤垣内遺跡とともに、蚊野丘陵地の東端のゆるやかな起伏を示す所にある。行政的には度会郡玉城町大字野篠字月よべに属し、現在の野篠の集落の東隣りにあたる畑地である。標高は約28m前後で、南側は三郷川に沿った谷底平地の水田に直面し、その比高は約4m程となっている。今回の発掘地は丁度、東、南、西の各方向に対してゆるやかに傾斜しはじめる中央の高みにあたる。南側の水田に続く縁辺部は小崖状をなし、北東側の中垣内遺跡との間は浅い低みになっており、南西側の赤垣内遺跡との間も南の水田からつづく広い低みがある。一方、西側は平坦地をひかえてしだいに傾斜を増しながら標高40m前後の丘陵の頂部に続いている。このように丘陵地の縁辺部ではあるが、この遺跡は周囲のゆるやかな起伏を示す地において、わずかながらも高まりを示す地につくられていることがわかる。

周囲の畑地には小片ではあるが、土師器・須恵器・山茶碗の散布が少量見られ、とくに発掘地の北側をわずかに切り通してつくられた町道の法面にも断面がU字状の溝址が観察され、遺跡としてはなお広い範囲を占めることが考えられる。

## II 遺 構

今回の調査は東西約24m、南北約16mの狭い範囲にとどまったが、弥生時代の方形周溝址3基、鎌倉時代以降の井戸址2基等が検出された。これらの遺構は発掘当初の地表下20cm～40cmの地山



面から検出されたが、ゆるやかな斜面の下方にあたる南側ではこの地山面とともにすでに自然流出されたのか、あまり明確ではなかった。地山面は厚さ25cm前後の黒色土に覆われ、その浅い位置から弥生時代から室町時代の土器片が見られ、遺構の多くは黒色土中から掘りこまれたものとも考えられた。

方形周溝址3基は狭い発掘区の全域に検出され、井戸址2基は発掘区の北端において、約10mほど離れて北西-南西方向に並んでいる。この他、径50cm前後、深さ30cm前後の小穴が各所にみられたがこれらの時期は明らでなく、また掘立柱建物址の一部を思わせる配置を示すものもあるが、確認するに至らなかった。

## 1. 弥生時代の遺構

**S X 1** 発掘区の南半中央を占めるものである。東、北、西の三辺は確認されたが、南辺は丁度、現在の畑地界の溝と重複し、しかも地山面が北辺より40cm近く低くなっていてすでに流出、あるいは攪乱されてしまったのか認められなかった。したがって周溝として全周するものかどうか明らかでない。西辺は1.5m×3.0m前後、深さ25cm前後の浅い土壇状のものと重複し、また南西隅からSE4井戸に続く巾1.5m~2.0m、深さ20cm前後の溝址状のものと重複している。しかし遺物もほとんどそれらからは出土せず、時期は明らかでない。また、北辺の南側はわずかに





方形周溝址の規模（規模は溝址の心々距離）

名称	規		模 (m)		溝 址 (cm)		南 北 軸	出土遺物
	東	西	南	北	巾	深 さ		
S X 1	7.5	—	—	—	80~120	10~120	N 2° E	1 - 4
S X 2	—	—	—	—	80~120	15~30	N 5° W	5
S X 3	9.8	—	—	—	100~120	30~40	N 12° E	—

低くなっているが、埋土は耕作土と類似していて、後世の削平によるものと思われる。周溝内からは遺物は出土していない。なお S X 2・3 も同様であるが、それぞれ内側の平坦面には封土の築成及び墓壇は認められなかった。

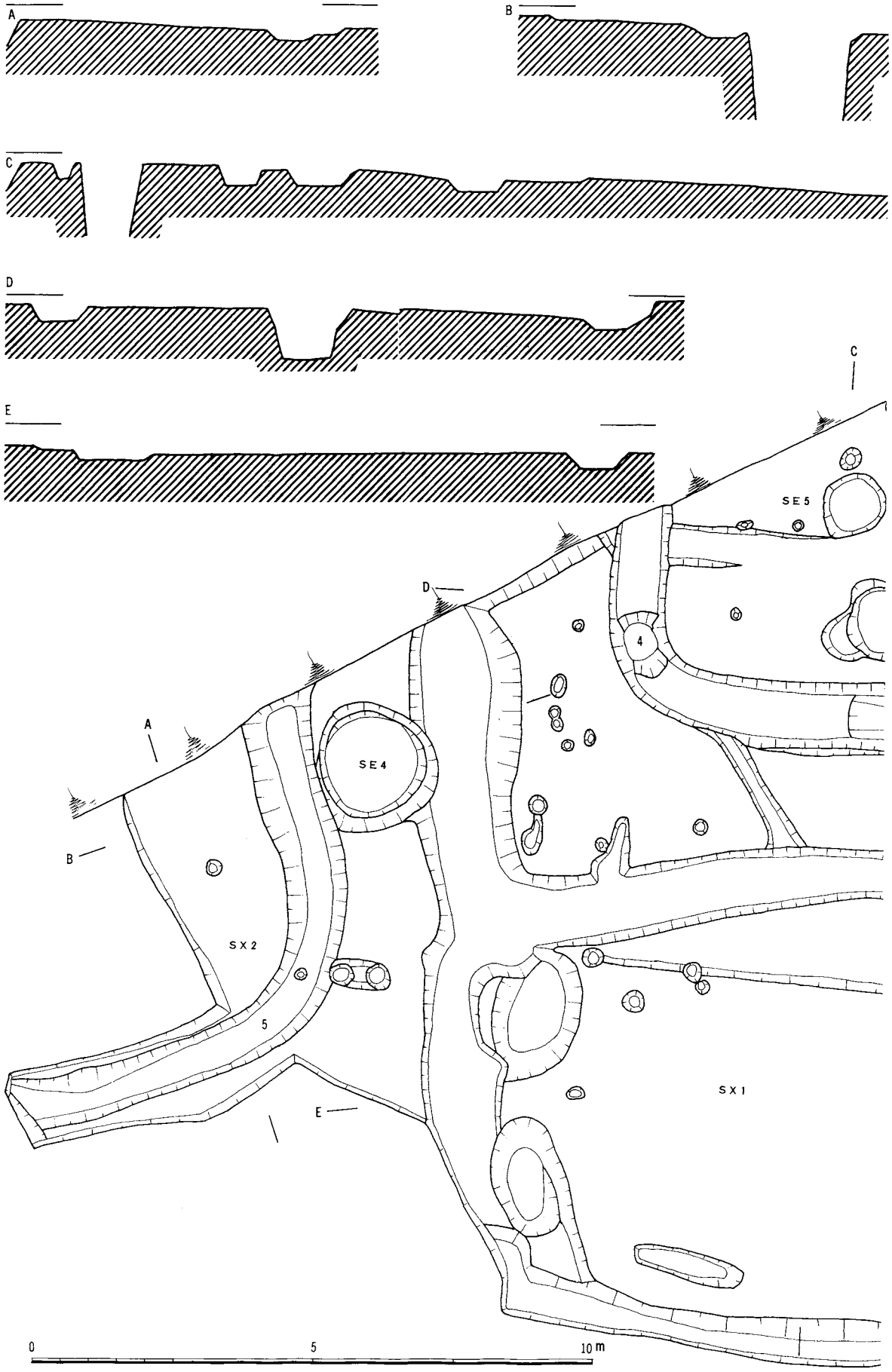
**S X 2** 発掘区の西端において東辺と南辺が検出されたものである。北側は町道によって削平され、西側は畑地が一段と低くなっていて西辺の残存は考えられず、全体の規模は明らかでない。底面の北端と西端との高低差は殆んど認められなかったが、北端においては現在の一段低い町道の法面に対して掘り抜かれておらず、東辺は北端において途切れるものと思われる。周溝の南東隅からほぼ完型の高杯 1 個が出土している。

**S X 3** 発掘区の北東部のもので、北半は町道によって削平され、東辺と西辺の一部及び南辺が検出された。東辺の北端は風倒木によると思われる平面が半月型の土壇状のものによって攪乱されている。西辺と南辺の深さはほとんどの部分が 30cm 前後であるが、南西隅は長さ 1.5m にわたり、また東端は長さ 3.5m の部分が深さ 45cm 前後で、わずかではあるが深くなっている。また北端と南端の底面の高低差が 40cm ほどあり、地山の傾にしたがって周溝の掘りぬかれたことが認められる。南西隅は 3m 程が掘りぬかれないうまになっている。なお西辺の北端から東側にある S E 5 井戸へ巾 70cm ほどの浅い溝が続くが、これは埋土が耕作土状のもので後世のものである。遺物は南辺の東端からほぼ完型の壺 3 個、南西隅からも完型に近い壺 1 個が出土している。また、周溝に囲まれた内側の平坦地からは、高杯、甕等の破片が出土した。

## 2. 鎌倉時代の遺構

**S E 4** S X 2 方形周溝址の東辺と重複したものである。平面円形の素掘りのものであるが底面まで掘っていない。直径は掘り方天端では 2.4m 前後であるが、それより 1.5m 下ではせばまって 1.7m 程となる。底へ向って少しずつ小さくなるものであろうか。遺物は土師器の細片の他は、ほとんど出土していない。

**S E 5** S X 3 の周溝の内側の平坦面に掘られている。掘り方天端では径 1.3m の平面が不定形であるが、やや方形に近い素掘りのものである。この井戸址も 1.5m 程まで掘り下げたにとどまり、底面は不明である。遺物は出土していないが、埋土が S E 4 とほとんど同質で、同時代のものと思われるが確かでない。



### 3. その他

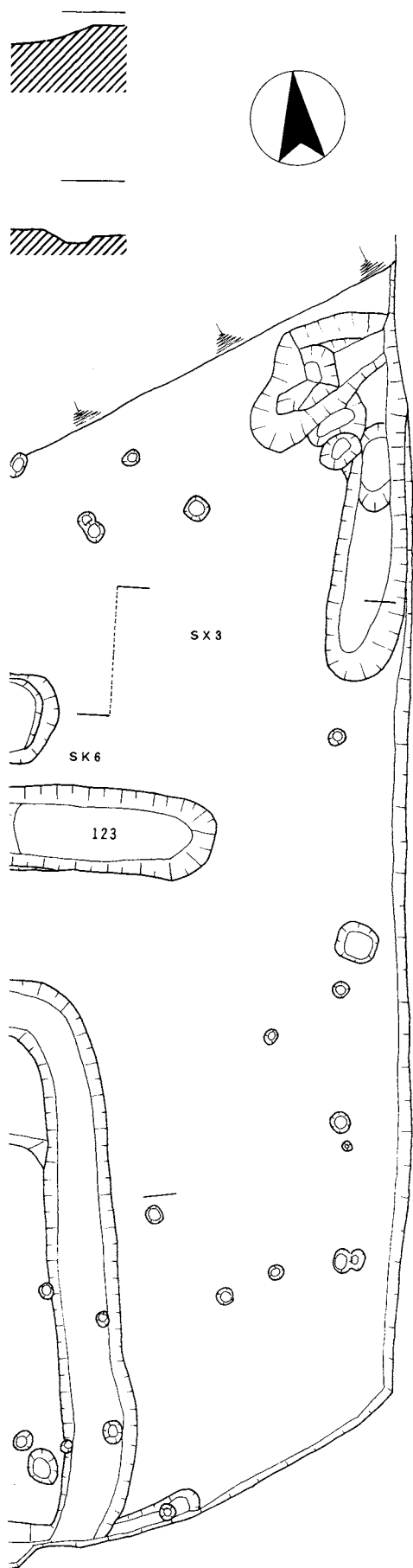
**SK 6** SE5井戸址の南側にある径1.5m、深さ80cm程の平面が方形に近いものである。埋土は地山の粘質赤褐色土との混在したものが下半分にあり、その上に黒色土が厚さ20cm程層をなし、さらに上半分は地山と同質のものであった。遺物もなく時期は明らかでない。

## III 遺物

出土した遺物は、SX2・3出土の弥生土器をはじめ、SX3方形周溝址の内側の平坦面の黒色土中から出土した各種の弥生土器片及び鎌倉・室町時代の山茶椀・土師器皿・同鍋等の破片がある。出土量は極めて少なく、また小片が多い。

### 1. 弥生時代の土器

**壺 (1~4)** すべてSX2方形周溝址の溝内から出土したもので、1~3はその南辺の溝址の東端部において一括で、4は、南西隅から1点だけで出土したものである。1は、口縁部が欠損した現存高27.5cm、胴部最大径31.2cmの頸部が細く、胴部のよく張った平底のものである。頸部から胴部の上半部に全面施文されている。上方から4段と6段目は簾状文、5段目は櫛描き横線文、7、8、9段目は櫛描き波状文が施されている。部分的には上下の段が重複しているが、14条を単位とした同一の櫛歯によるものと考えられる。



(算用数字1~5は、土器実測図遺物番号)

胴部下半は横方向にこまかくへら研磨されているが、器表は平滑にされず、こまかい小穴状のものが残る。器表は黄褐色を呈し、部分的に風化し剥落しているところもある。また胴部の中程と底部近くに黒斑がある。内面はよくなで調整され、器壁は5mm前後でやや薄い。なお底部中央は厚さ2.5cm程で、よく肥厚している。

2も口縁部が欠損していて、現存高18cm、同部最大径19.5cmの胴張りの強い平底の小型のものである。頸部から胴部上半は全面に施文されている。上から孤状の圧痕文、楕描き横線文、孤状圧痕文、楕描き簾状文などで、その継ぎでは施文の末端が右から下方に曲がり、施文方向として



16

発掘区全景（南から）



17

発掘区全景（北から）

右廻りであることを示す。櫛歯の単位は明確ではないが8条前後のもので、最下段の横線文はそれを重複させ、巾広い文様帯となっている。胴部下半は横方向にへら研磨されているが、1と同様よく平滑にされず、小穴状の凹凸が各所に残る。器表は風化し剥落しているところが多い。黄褐色の器表の所々には黒斑がある。内面はなで調整される。胎土には1と同様に細砂粒を含む。

3は、口径15cm、高27.6cmのよく外反した口縁部に胴張りのある平底のもの。器表は黄褐色で、剥落がひどく、調整、施文ともによく判別しがたいところもあるが、口頸から肩部はたてにこまかいハケ目、胴部から底部はたてにあらひハケ目で調整される。肩部には上下方向に11条単位の櫛描き波状文が3列施されている。内面はナデ調整されているがていねいでなく凹凸がのこる。胴部中ほどには黒斑があり、また内面は黒色を呈する。底部下面には木葉痕がある。胎土には砂粒をふくむ。

4は、口径15.5cm、高31.5cmの外傾した比較的短い口縁部に、胴部が球形に近い張りを示す平底のものである。器表は黄褐色で、剥落がひどく調整が明確でないが、頸部と胴部下半はたて方向にへら削りされている。頸部の内側にはシボリ目がのこり、内面はナデ調整されるが凹凸がある。器表の各所に黒斑がある。胎土には細砂粒をふくむ。

**高杯 (5・6)** 5は、S X 3の南東隅の溝内から出土したもの。径13.3cm、高さ12.3cmの外傾した体部の鉢型の杯部に比較的短い脚部をもつ。器表は黄褐色で、剥落がひどく、調整は明らかでない。杯部内面下半と脚部内面は黒色である。胎土に細砂粒をふくむ。

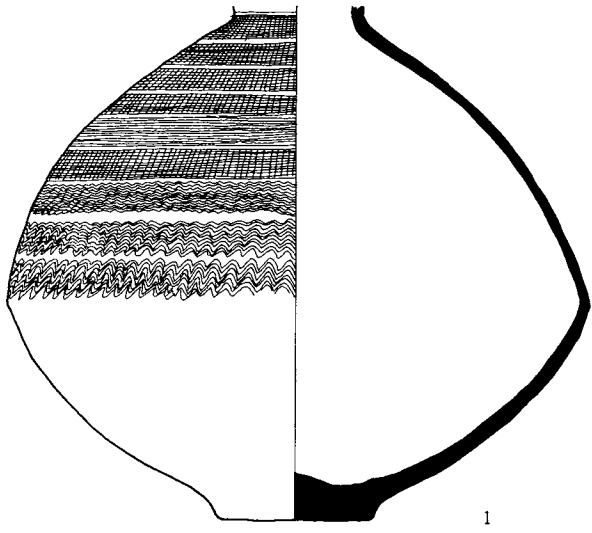
6は、脚部の破片でS X 2方形周溝址の内側平坦部から出土。器表は杯部との接合部ではたてにハケ目調整、それより下方はへら研磨されている。内面上方にはシボリ目がのこり、下半はたて方向にハケ目調整される。器表は赤褐色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まない。

**甕 (7、9、10)** いずれも断片で全体の形状は明らかでない。S X 2方形周溝址の内側平坦面から出土。7は、径42.5cmの大形のもの。下方に小さく折返えされた口縁部の端面には刻目をほどこし、器表は斜めに、口縁部内面は横にいハケ目調整される。9は、径27.5cmの小形のもの。小さく立ち上る端面には櫛歯刺突文をめぐらす。10は、9のような口縁部をもつ甕の脚部であろう。器表は全体にナデ調整されている。

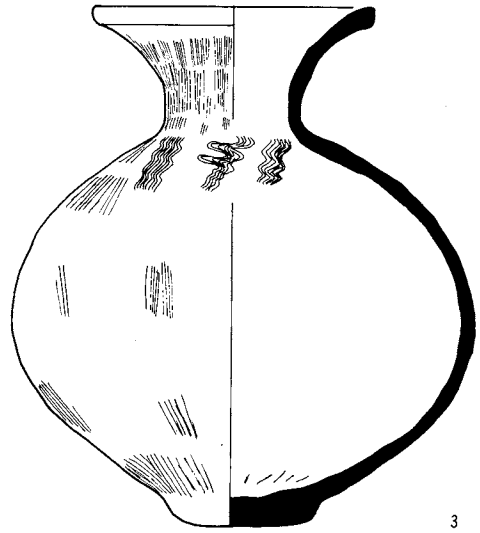
**鉢 (8)** 甕7と色調、胎土、調整が同巧の径40.3cmの大形のもの。端面には刻目がほどこされていない。ハケ目調整以外の部分はナデ調整されるがていねいではない。

## 2. 鎌倉時代の土器

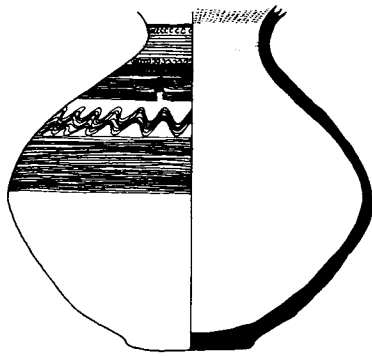
**山茶椀 (11)** 口径16.5cm、高さ5.8cmの比較的器壁が薄くひきだされ、高台付のもの。口縁部外面には一部自然釉がみられる。底部下面には糸切り痕があり、高台はていねいにつけられている。その下端部には靱痕はない。この時代の土器としてはこの他、土師器小皿、靱痕のある低い高台底の山茶椀などの破片が出土している。



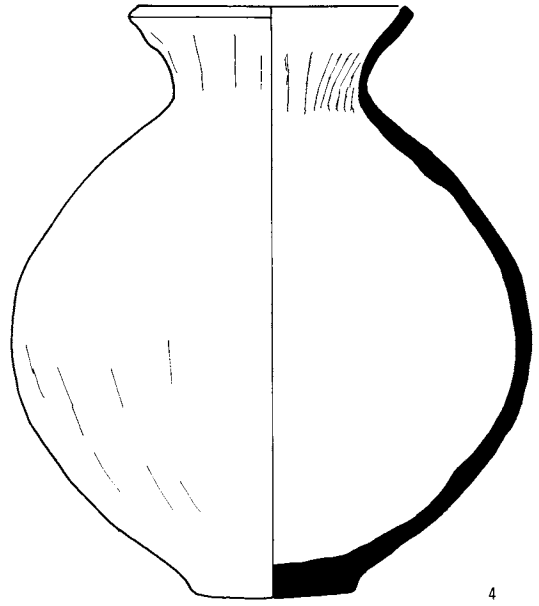
1



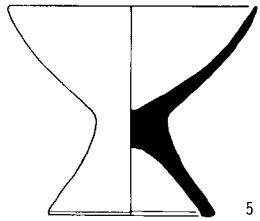
3



2



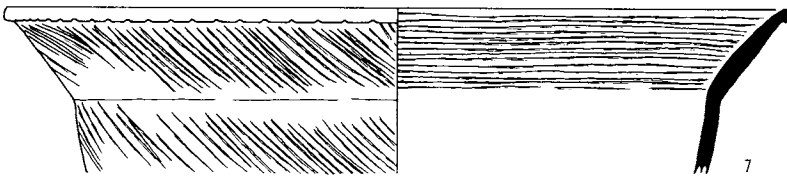
4



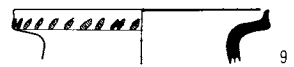
5



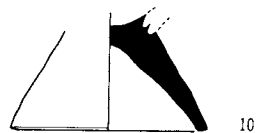
6



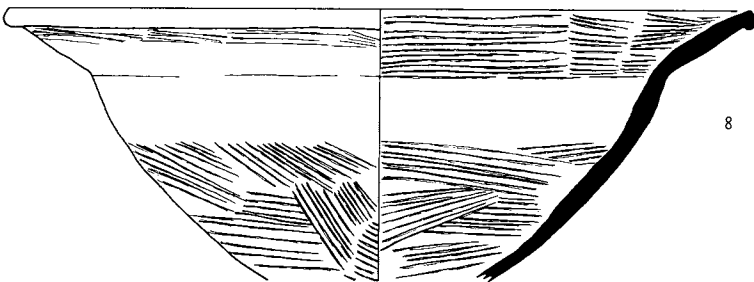
7



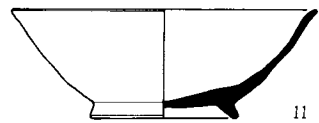
9



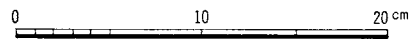
10



8



11



18

土器実測図 (1 : 4)



19

弥生土器 (1 : 3 右下 1 : 2)

## IV 結 語

月よべ遺跡は、弥生時代では方形周溝を主体とした墓域、鎌倉時代では建物址は確認されなかったが井戸があって、集落の一部であったと考えられる。

方形周溝址は、全体の形状は既設道路による削平などにより明らかでないが、それぞれが接近しているとはいえ、重複あるいは一辺の溝を共有するといったことはなく、独立しているものである。S X 3 方形周溝址が南東隅に周溝の掘り残し部分があるように、他のS X 1・2 方形周溝址も一隅が掘り残されているものと思われる。これは県内の他の遺跡の方形周溝址と同様な形状である。周溝に囲まれた内側においては、封土の築成及び墓壇は検出されなかったが、溝内に完型に近い土器が埋置されていて、方形周溝墓とみなすことのできるものである。

S X 3 方形周溝址出土の土器は、胴部上半を櫛描簾状文・横線文・波状文等による装飾のあるものと、無文のものがある。装飾のあるもので挿図18の1・2は、口縁部が欠損して全体の形状が明らかでないが、畿内第Ⅳ様式の特徴を十分そなえるものである。その他同図3の土器は、伊勢市大藪遺跡S X 1 出土の壺とよく類似した櫛描きの施文であり、同図4は多気郡明和町金剛坂遺跡S X 36 出土の壺と形が全く類似している。これらは、それぞれ畿内第Ⅴ様式に比定されているものである。したがって一括で同一溝内から出土したこれらの土器を、新しい要素を重視すれば、弥生時代後期も初頭に位置づけることができよう。またこれらの土器には底部穿孔はみられず、そのことも先の大藪遺跡・金剛坂遺跡の土器ともよく共通している。

S X 2 方形周溝址出土の土器は挿図18の5の高杯1点だけである。これも畿内第Ⅴ様式に比定されるものであり、一方、S X 1 方形周溝址は土器が出土していないために時期が決め難い。しかし方形周溝址個々の形状からみて、同時期に築造されたものとするれば、それぞれの古新は明らかでないにしても、相前後して築造されたものと考えられる。

どのような歴史的事情においてこれらの方形周溝墓が築造されたのか明確に指摘できないが、この月よべ遺跡が距離的、地形的には両隣りの仲垣内遺跡・赤垣内遺跡と一体化しているものであることは十分想定されることから、一集落内の墓域に相当するものと考えられる。その場合、月よべ遺跡の発掘区の北側の町道法面に露出した溝址断面を方形周溝址の一部に見なすことができ、なお数基の築造を考えてことである。遺跡の規模が外城田川流域においては、かなりのものであり、この地域のいわば拠点集落として位置づけることが可能であり、そうした有力集落内における周溝墓被葬者層の形式を想定したい。



# 度会郡玉城町赤垣内遺跡

## I 位 置

赤垣内遺跡は、北東へ約500mほどはなれた月よべ遺跡、仲垣内遺跡と同様、蚊野丘陵の南麓にある。行政的には、玉城町大字野篠字赤垣内に属している。背後は標高38mのほとんど起伏の少ない丘陵地となり、南側は水田として利用されている三郷川のせまい谷底平地が西方へつづく。

遺跡は、東側と西側が南の谷低平地から入りこむ谷状の浅い凹地にはさまれ、さらにその中央部において、東西約80m、南北約30mほどが高まって水田に突き出た格好の畑地にある。標高は27m前後で、水田面との比高は3m～4mほどである。遺跡面は西から東へ傾斜していて、とくに西縁と南縁は小崖状をなしている。今回の調査は、こうした畑地のうちでも、試掘調査によって遺物が多数発見された東部について行なったが、遺跡の範囲としては今回の圃場整備事業地外の北側で、浅く切り通した町道をこえて一段高さを増す畑地帯にも広がるものと思われる。

## II 遺 構

東西約40m、南北約24mの範囲から、弥生時代後期、古墳時代後期の竪穴住居址、土壇、溝址平安時代後期の掘立柱建物址等が、所狭く重複して検出された。この他、大小の柱穴状のものが多数みとめられたが、建物としてはまとめられなかった。

これらのうち竪穴住居址は発掘区の中央に密集してみられ、掘立柱建物址は、ほぼ全域から検出された。これらのほとんどは、現地表20cm～30cmの浅い所に埋まっており、西半部では遺構が薄い表土である耕作土の下の固い通称「ガン」の第三紀層の岩盤状の地山に掘りこまれていた。

また崖に接する南側には、崖に沿って巾1m、深さ1m前後の溝状のものが重複している。出



土遺物もなく、時期も明らかでない。その埋土は比較的軟弱であった。

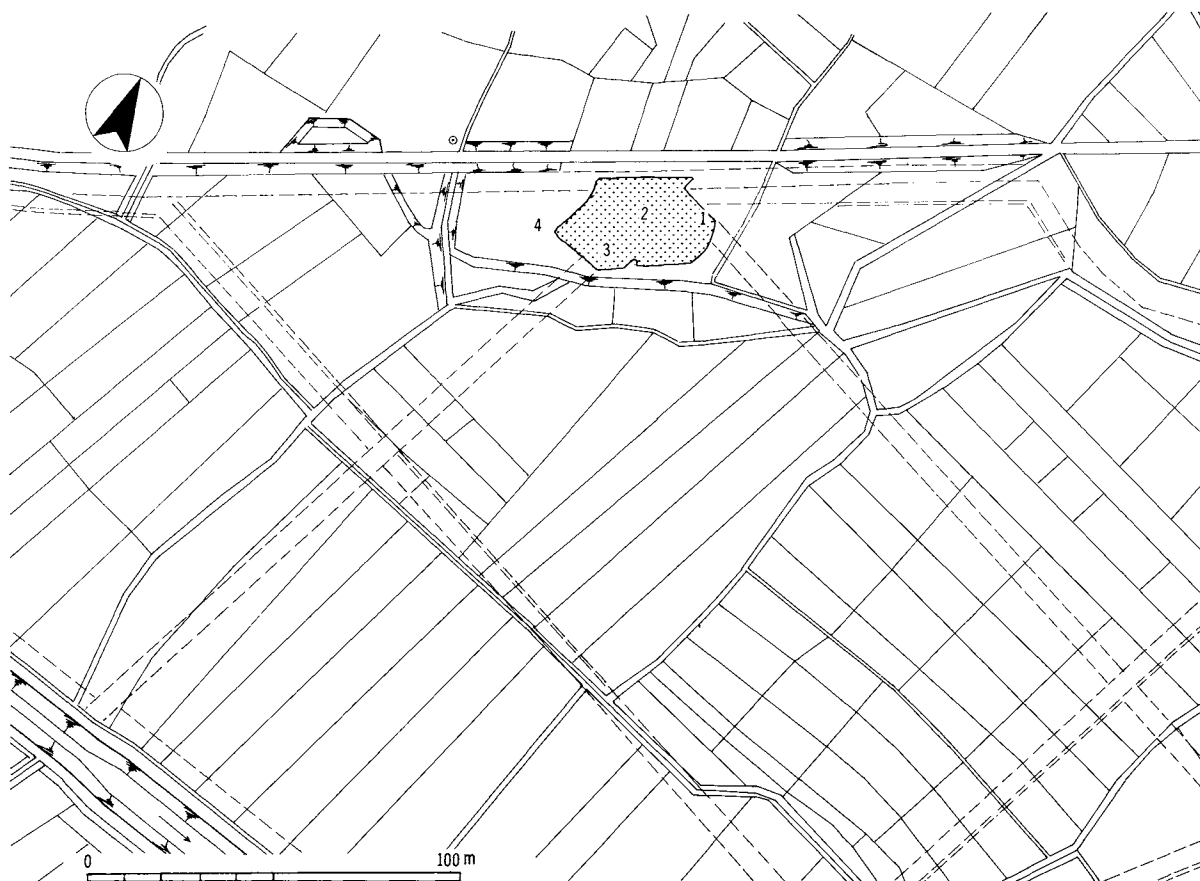
## 1. 弥生時代の遺構

### (1) 竪穴住居址

**SB1・2** 南辺の中央に径1.6m×1.3m、深さ60cmの方形にちかい貯蔵穴をそなえたもの。竪穴住居としての掘り方は、南辺と西辺でははっきりしているが、北東部では、地山も下降して流出したのか不明。周溝は巾25cm、深さ5cm～10cmで浅く、東辺では2条、西辺では3条みとめられるなど、建て替えを思わせる。主柱穴、炉址とも不明瞭。

**SB5・6・7** 発掘区の中央において南北軸もほとんど同方向で、床面の大半が重複。その前後関係を示す切り合いは確認できなかった。また出土遺物も、弥生後期土器と、古墳時代後期土器でもとくに土師器等が混在していて、時期もきめがたいものである。主柱穴、炉址とも明らかでない。また竪穴住居としての掘り方も、SB1・2竪穴住居と同様、南辺と西辺では明確であるが、北辺、東辺では、みとめられなかった。

**SB8** ほとんど同方向で古墳時代後期のSB9竪穴住居と重複している。地山面がわずかに西から東へ傾斜している場所につくられ、床面の東半は流出したのか、検出されなかった。また、南辺はSB6竪穴住居の北辺と重複しているが、その前後は不明。周溝は巾20cm前後、深さ6cm前後。主柱穴、炉址とも明らかでない。





22

発掘区の全景（東から）



23

発掘区の近景（西から）



### 竪穴住居址の規模

名 称	規 模 (cm)		深 さ (cm)	南 北 軸
	東 西	南 北		
S B 1	6.8	6.1	30	N 8° W
S B 2	5.9	5.1	30	"
S B 5	6.4	6.2	20	N 4° W
S B 6	—	—	15	N 11° W
S B 7	6.0	5.5	25	N — S
S B 8	—	5.6	10	N 4° W
S B 9	4.2	4.2	20	N 2° W
S B 10	—	3.5	10	N 16° E
S B 11	—	—	10	N 13° W

**S B 10** 他の住居址にくらべ、きわめて小形のもので、南北軸の方向もかなり異っている。東部は一段低い畑地により、すでに削平されていて、全体の規模も明らかでない。周溝は巾20cm、深さ5cm。北辺の西寄りには、巾20cm、深さ5cmほどで、3.5mほど南北につづき、北端でまがる周溝状のものが重複して検出された。北側のS B 11と同様、竪穴住居址の痕跡とも思われるが明らかでない。

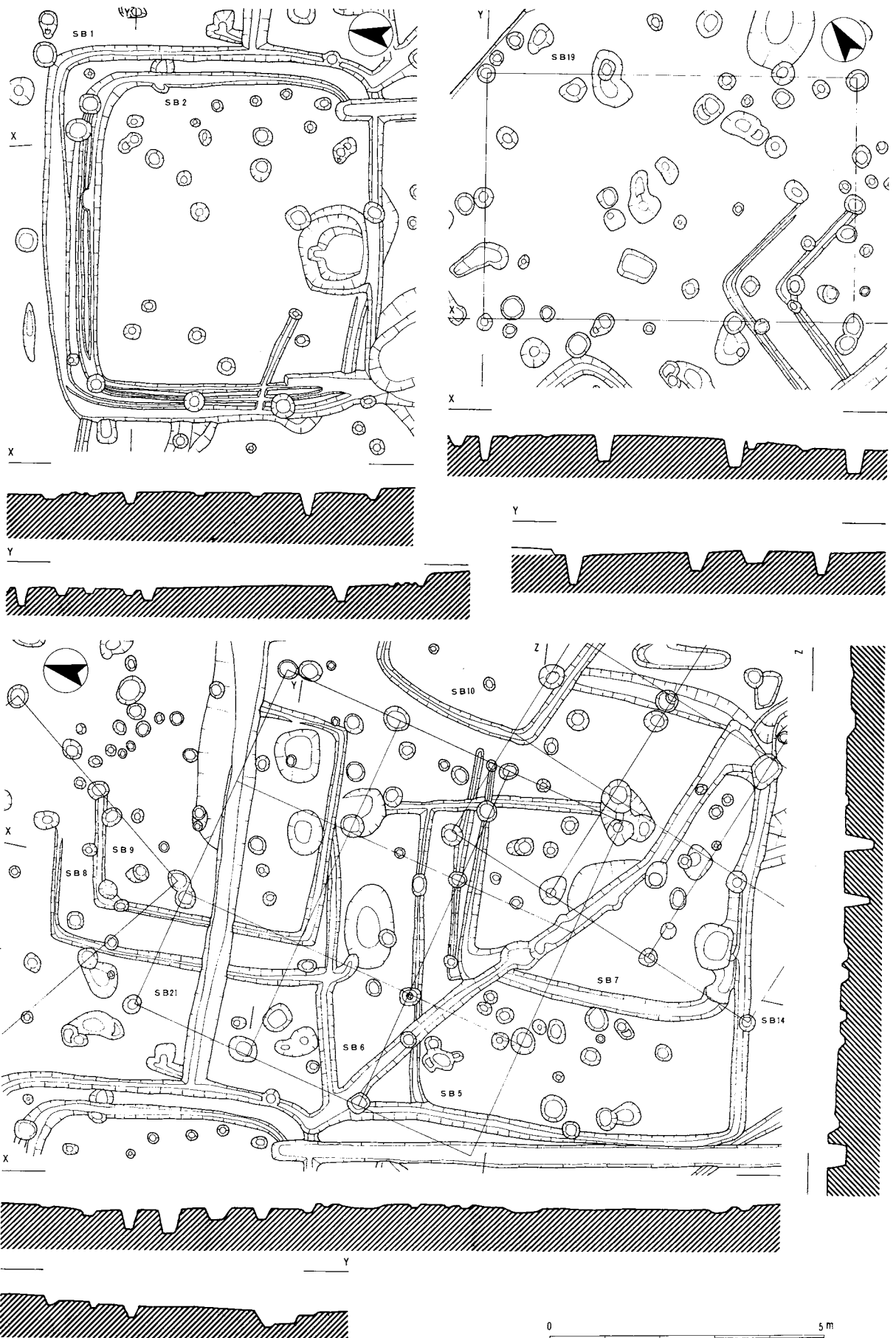
**S B 11** 発掘区の北東隅で、巾20cm、深さ5cmの周溝状のものが、ほぼ南北に2.6mほど検出された。この東側は後世の畑の境溝などで削平されていて明らかでないが、土器片（第33図3、5、7、10）などが比較的多く出土し、住居址の北辺の周溝とした。

#### (2)掘立柱建物址

**S B 24** 発掘区の南西隅から検出された3間(3.7m)×2間(3.1m)の小形のほぼ東西棟。棟方向はN 74° Eをしめす。平安時代後期のものと比べ全く小規模なもの。柱間は桁行が1.23m、梁行が1.55mで梁行が広い。柱穴掘り方は径25~30cmで小さいが、深さは60cm前後で深い。北東隅の柱穴から高杯（第33図13）が出土したこと、平安時代後期の掘立柱建物址とは形状が異なることなどから、この時代のものとした。高床式倉庫であろうか。

#### (3)溝 址

**S D 18** S B 1 竪穴住居の南東隅から、S B 5・6・7 竪穴住居の対角線上に南東側へつづく。巾は40cm、深さ10cmで、溝底も南東へ次第に傾斜している。溝の掘り方がS B 5、6、7 竪穴住居址の埋土下にみとめられ、それらより先につくられたことが知られる。



## 2. 古墳時代の遺構

### (1) 竪穴住居址

**S B 9** 一辺4.2mの方形の小形のもの。南北軸はN 2°Wでほとんど南北にちかい。弥生時代後期のS B 8 竪穴住居址と全く重複している。周溝は巾20cm前後、深さ6cm前後。竪穴としての深さは20cmほどあるが、床面は全体に西から東へ傾斜している。主柱穴、かまど址なども明らかでない。西辺の周溝中からは土師器高杯（第33図 25）が出土している。

この住居址の南側には、弥生時代後期の竪穴住居址としたS B 5・6・7・10が重複して検出されているが、このあたりの出土土器には古墳時代後期の須恵器、土師器片も混在している。したがってそれらの竪穴住居址のうちにはこの時期のものとするのできるものがあるとも考えられるが判別しがたい。

### (2) 土 壇

**S K 3** 径4 m×4.5m、深さ40cmの平面が方形に近いもの。底面は比較的平坦であるが、北隅では径1.2m×1.5mの楕円形の部分がさらに10cmほど深くなっている。また、南辺の掘り方の中央外側に接して巾1 m、深さ10cmの浅い小土壇がある。埋土中に多量の焼土粒、炭片とともに土師器甕片がふくまれていた。

**S K 13** 発掘区の北東部の径1.1m×80cm、深さ20cmの平面長方形に近い小形の浅いもの。土師器小型丸底壺（第33図16）などがうまっていた。

**S K 16** 発掘区の南西隅の1 m×1.5m、深さ40cmの南北に長い小土壇。土師器高杯（第33図28）が出土している。

**S K 26** 発掘区の南西部の径2.2m、深さ50cmのスリ鉢形のもので、南半は未掘、土師器高杯片が出土している。

この土壇の北東側から同時期のS K 3 土壇までの東西11m、南北10mの範囲は、深さ40～60cmほどで平面が不定形な凹地をなしている。部分的には径2 mほどの土壇をなし各時期の土器片がうまっていた。いくつかの土壇が重複して広い凹地状をなしたものとも思われる。

## 3. 平安時代の遺構

### (1) 掘立柱建物址

**S B 12** S B 23 掘立柱建物とともに発掘区の東端にあり、3間×3間の平面が方形に近い建物。柱間は桁行2.2m、梁行2.1mで、ほぼ等間に近い。柱掘り方はいずれも径30cm～50cm、深さ30cm前後で、あまり差はない。桁行方向も梁行方向も総柱となる、倉庫とも思われる。

**S B 14** 遺跡のうちでも南端の崖寄りにつくられた3間×3間の平面が方形に近い建物。桁





26

発掘区西部（東から）



27

SB5・6・7（東から）





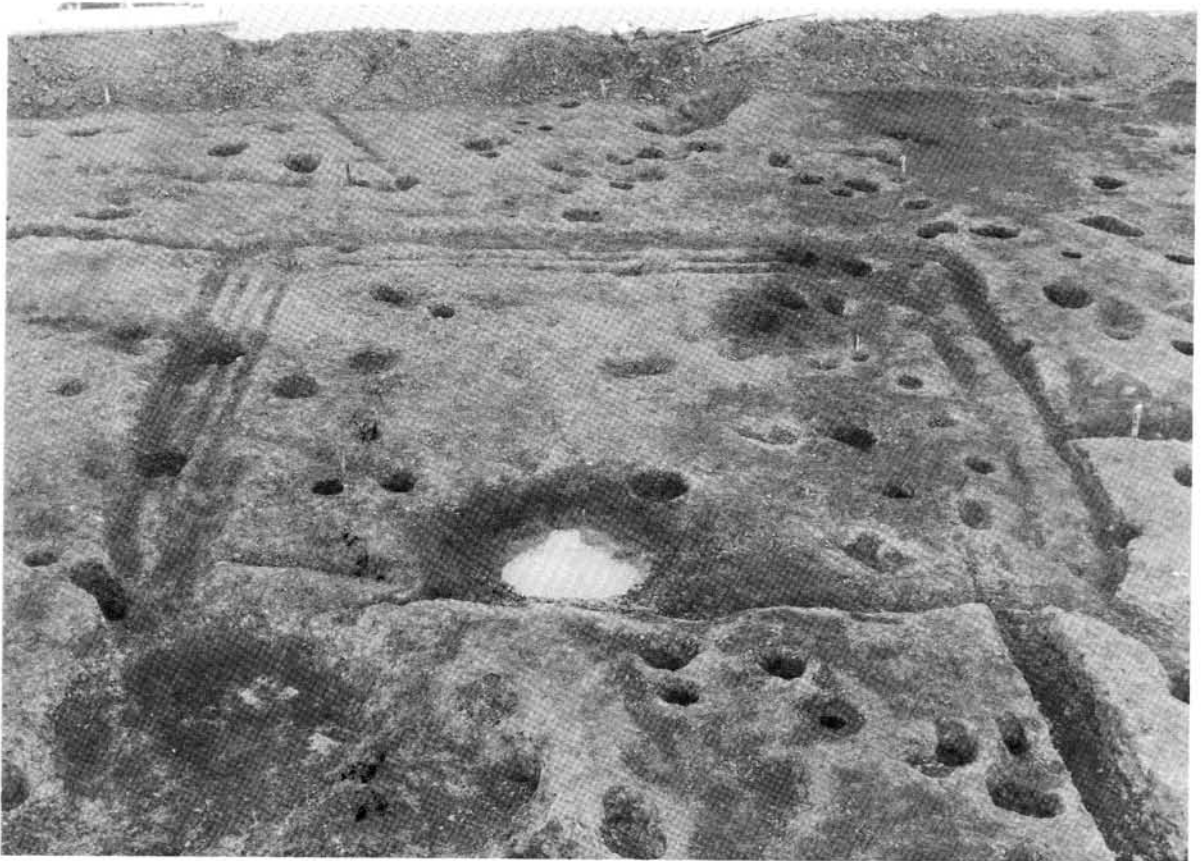
28

発掘区東部（西から）



29

SB 8・9（南から）



30

SB1・2 (南から)



31

SB5・7・14 (西から)

掘立柱建物址の規模

名 称	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟 方 向	柱間寸法 (m)		備 考
					桁 行	梁 行	
S B 12	3 × 3	6.6	6.3	N 66° W	2.2	2.1	倉庫 (カ)
S B 14	3 × 3	6.3	6.3	N 70° W	2.1	2.1	倉 庫
S B 17	3 × 2	6.3	4.2	N 59° E	2.1	2.1	
S B 19	3 × 2	6.7	4.5	N 54° W	2.23	2.25	間仕切り
S B 20	3 × 2	6.2	4.2	N 76° W	2.06	2.1	"
S B 21	3 × 3	6.7	6.8	N 79° W	2.23	2.25	倉 庫
S B 22	3 × 3	6.7	4.7	E - W	2.23	2.0 1.7	南 廂
S B 23	(3)×(2)	(6.3)	(4.2)	N 81° W	2.1	2.1	

行方向にも梁行方向にも柱穴が認められる総柱のもので、倉庫と思われる。柱間は桁行、梁行とも2.1mの等間である。柱掘り方は径40cm～50cm、深さ45cm前後。北側柱列と西側柱列の柱穴は他より小さい。

**S B 17** 3間×2間の北東一南西棟。他のものとは異なり、南面するとはいえ、南北軸は磁北に対して東にかたよっている。北側柱の中央2個は、古墳時代後期のS K 3土塚の埋土中に掘りこまれ、明確に検出されなかった。柱間はやや不揃い。

**S B 19** 3間×2間の東西棟。柱掘り方は径30cm～40cm、深さ40cm～50cm。桁行柱間の西から一間の梁行方向の中央には、径30cm、深さ40cmの小穴があって、西一間の間仕切りを思わせる。西隅においてはS B 20掘立柱建物と重複しているが、前後は明らかでない。また南側柱の周囲のいくつかの小穴内からは、完型の土師器皿(43-46)が出土している。

**S B 20** 北西隅は未掘であるが、3間×2間の東西棟と思われる。柱掘り方は径40cm前後、深さ25cm前後で浅いものが多い。桁行柱間の東から一間の梁行方向の中央には、径20cm、深さ30cmほどの小穴があり、東側の一間の間切りを思わせる。

**S B 21** 発掘区の中央の3間×3間の平面方形のもの。北東隅と北側柱列の柱穴の一つが、S B 12掘立柱建物、S B 19掘立柱建物の柱穴と接しているが、切り合い関係は明らかでない。柱掘り方は径40cm～50cm、深さは西側では25cm前後と浅いが、他は40cm前後と深い。桁行方向も梁行方向も総柱の倉庫と思われる。

**S B 22** 発掘区の西端にある3間×2間の身舎に南廂付の東西棟。柱通りは全体にわるい。柱掘り方は径30cm前後、深さ50cmほどで、西妻入り側の柱掘り方の一つでは、径15cmほどの柱痕跡がみとめられた。柱間は桁行が2.2mであるが、梁行は身舎が2.0m、廂が1.8mである。したがって身舎の柱間が7尺、廂の柱間は6尺と思われる。

**S B 23** 発掘区の東隅の東西棟で、北半は未掘であるが、3間×2間のものと思われる。柱掘り方は径30～40cm、深さ40cm前後。

(2)土 塚

SK5 古墳時代後期の土塚の多数みられる発掘区の南西部にある。巾1.6m、長さ3.8m以上深さ30cmの長方形にちかいもの。中央は南北に畑の境溝で切り通されている。灰釉の椀、土師器小皿が出土している。

### III 出土遺物

#### 1. 弥生時代の遺物

(1)石 器

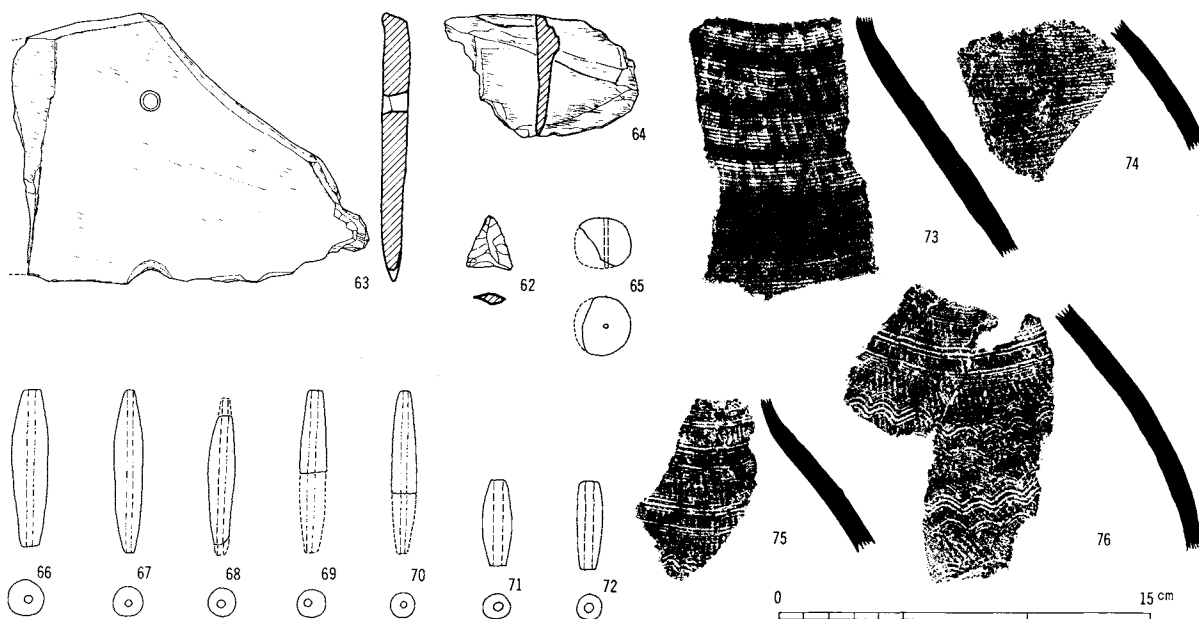
石鏃 (62) SB2 竪穴住居址の東辺の周溝から出土した無柄の平基のもの。長さ2.1cm、最大巾1.8cm、厚さ4mm。片面はよく調整されているが他の片面には剥離面をのこす。チャート製。

石包丁 (63) 発掘区の南西部の凹地から他の時代の遺物と混在していたもの。巾11cm、厚さ1cmの半欠の大形のもので、刃部のみ磨製。その断面は片刃にさかい。その他の部分は両面とも剥離されたまま。緑色片岩製。

刃器 (64) 巾4.9cm、最大の厚さ9mmの半欠の薄い打製のもの。縁部は片側だけこまかく調整され片面は剥離面をのこしている。緑色片岩製。

(2)土 錘

65-72 球形の65、細長の66-70、小形の細長の71-72などである。65はSB2 竪穴住居址から出土。それぞれ精量な胎土のもの。65以外は、時期がきめがたい。



### (3)土 器

**壺 (1-5、73-76)** それぞれ破片で全体の形状は不明。2はよく外反した口縁部で端部の内側は6本一組の櫛歯文をめぐらす。73は肩部の拓影で櫛描きの簾状文と横線文、75-76は同一個体の破片で、たてにこまかくへら研磨されたあと、横線文と波状文をめぐらしている。

**小形壺 (6)** 口縁部は欠けているが、やや上げ底の平い底部のもの。頸部はたてに肩部は横にこまかくへら研磨されている。S B 19掘立柱建物の北西外側の小穴内から出土。

**鉢 (7)** 口径15.5cm、高さ9.5cmのやや上げ底状の底部の完形のもの。短い口縁部は外反する。器表は内外とも剥落して調整は不明。胎土にはほとんど砂粒もふくまない。

**小型椀 (8)** 口径3.5cm×4cm、高さ2.6cmの超小形のもの。直口状の口縁部に丸底のもの。器表はよくへら状のもので調整されている。S B 5 竪穴住居址の南西隅から出土。

**蓋 (9)** 天井部と鈕状部のみで、全体の形状は不明。9以外に内面が黒色の口縁部の破片も出土している。

**台付甕 (10-11)** 台部だけで、口縁部の形状のわかるものは出土していない。いずれも胎土には砂粒を多くふくんでいる。

**高杯 (12-14)** 鉢状の杯部のもの。13の脚部は三方に各1個、一方に1個の二段に円孔を14の脚部は四方に各1個の円孔をもつ。13は杯部、脚部ともたてにこまかくへら研磨されている。S B 24掘立柱建物の北東隅の柱穴内から出土したものである。

## 2. 古墳時代の遺物

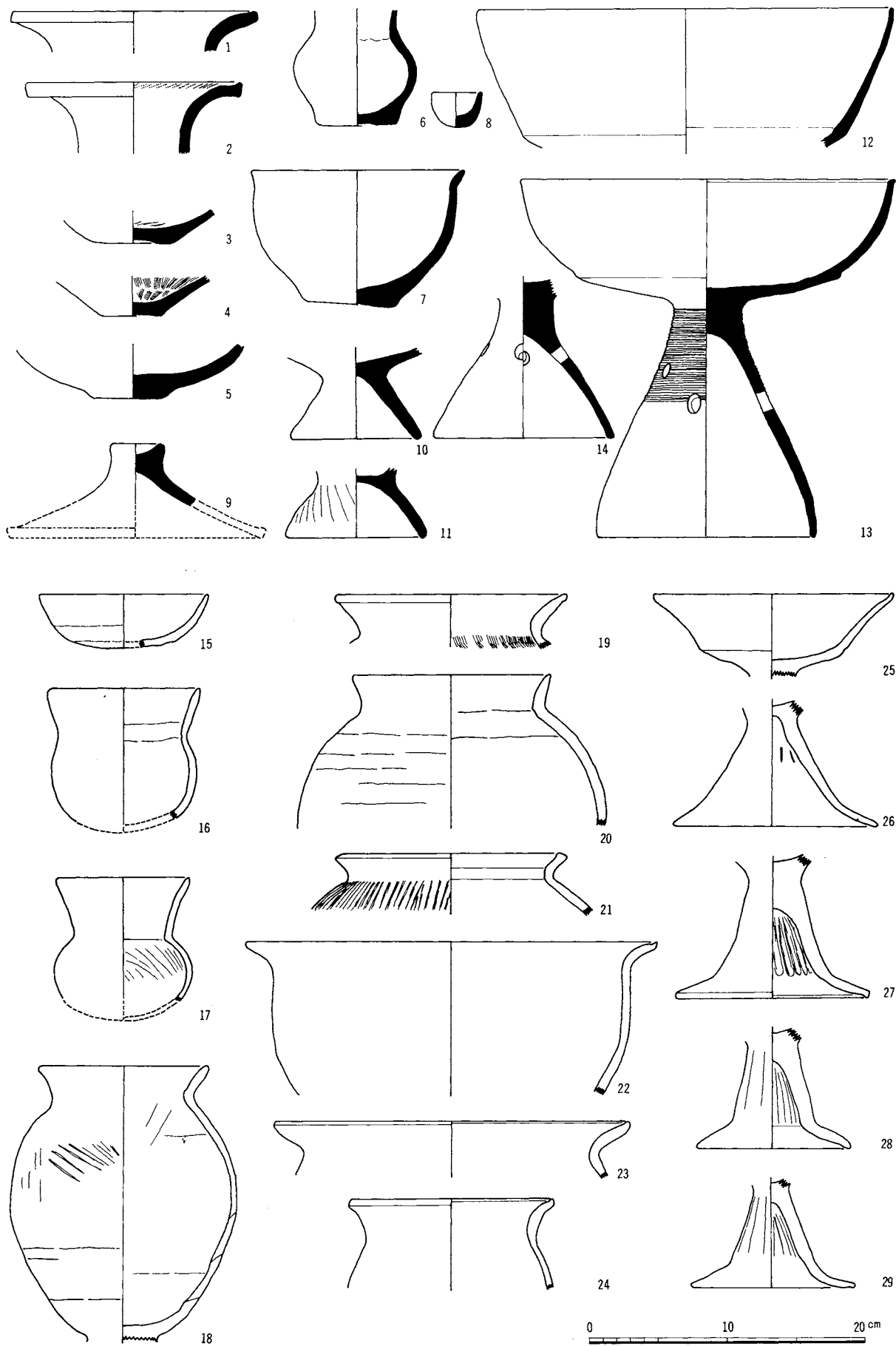
### (1)土師器

**皿 (15)** 丸味の腰部のもので、器表にはひも積み状の痕跡がある。器表は剥落して調整不明。

**小形壺 (16-17)** 底部を欠くが上半はほぼ完型のもの。直口状の比較的長い口縁部をもつ。16は口径11cmの手づくね風の粗雑なつくりのもので、S K 13土壇から出土している。17は口径10cmで、体部の内面は指頭によって調整。

**甕 (18-24)** 18以外は口縁部から肩部の破片。口縁部の形状から18-20のようにく字に外反するもの、21のように端部がわずかに肥厚して面をなし、肩部にあらいハケ目調整されるもの、22-24のように端部がわずかに立ちあがるものにわけられる。それぞれ時期も異なるであろう。18は台付のものであるが、器表の調整はわるい。21は台付のもので、須恵器杯のうちでも30-32と同時期のものであろう。22-24は、同じく須恵器杯33と同時期と考えられる。

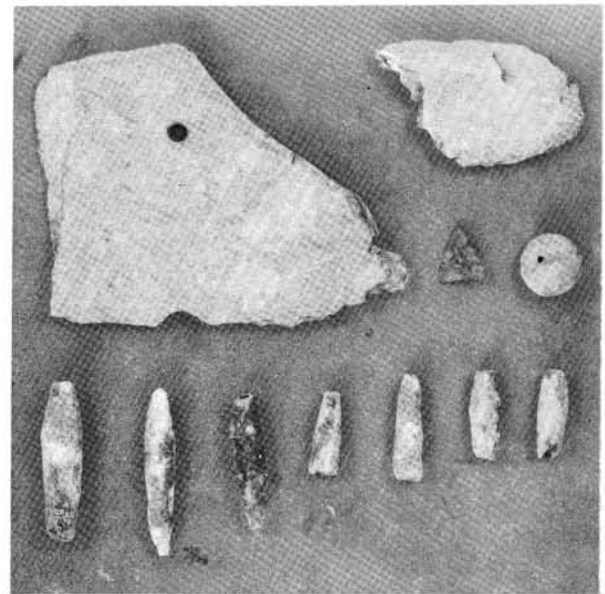
**高杯 (25-29)** 完型のものはなく、杯部、脚部だけである。26は内外ともよく調整され、上方のしぼり目もほとんど消されている。27-29は内面にしぼり目をのこし、28-29では外面はたてにへら研磨されて面をなす。



33

土器実測図 (1 : 4)





34

土器 (1 : 2) 石器・土錘 (1 : 3)

## (2)須恵器

**杯蓋 (30)** 径13.3、高さ4.5cmの天井部が平坦で広いもの。端面はわずかに凹む。天井部はへら削りされ、内面はよく水引きされる。

**杯 (31-32)** 径10.2cm~10.8cm、高さ4.7cm~5cm。蓋受けの立ちあがりは長く、その端面は細い凹線をしめす。蓋受けの部分も比較的広い。底部は鋭くへら削り仕上げされる。これらは蓋30の身にあたり、ともに古式のもの。33は、蓋受けの立ち上りの短い身で、へら切り不調整底。

**皿 (34)** 径14.5cm、高さ2.5cmの浅いもので、広い底部はへら削りされている。全体にゆがみがひどい。

**すり鉢 (35)** 直口状の口縁部で底部は不明。端部の一方に片口がつけられる。体部上方には浅い沈線が2条つけられている。

## 3. 平安時代の遺物

### (1)土師器

**椀 A (51)** 口縁部は欠けているが、径14cmほどのものであろう。底部は糸切りされる。腰部は比較的うすくひき出され、丸味をもつ。糸切り底の小皿Bの47・48と組合せになる

**椀 B (52-55)** 径16cm、高さ4.5cm~5cmで、口径に対し比較的径の小さく、うすい高台をそなえたもの。底部の器壁もうすく、下面は52ではへら削りされ53-55では糸切りされるがほとんど消されている。体部はロクロでひき出され、山茶椀の生焼け品を思わせる。胎土は精良で、砂粒も含まれていない。

**皿 A (36-39)** 径13.5cm~15cm、高さ3cm前後で底部の広いもの。端部だけが巾1cmほどでいねいに横なでされるもの。腰部から底部下面は横なでされながらも、凹凸をのこしたままで、不調整にちかい。

**皿 B (40-41)** 径14cm前後、高さ3.8cmで、底部は皿Aに比べ丸味をもつ。器表の調整は皿Aと同様、端部だけがでいねいに横なでされ、他は凹凸をのこしている。

**小皿 A (42-46)** 径9.2cm~9.8cm、高さ1.6cm~2cmの底部の丸い不安定なもの。いずれも完型である。端部だけがでいねいに横なでされているが、ゆがみがひどい。底部も指の圧えによる凹凸をのこす。46は平面が円形でなく、片方がわずかに尖り、片口状をなす。S B 19掘立柱建物の南側柱付近の小穴内から出土したことが多い。

**小皿 B (47-48)** 径8.7cm~9cm、高さ1.1cm~1.5cmの浅い扁平なもの。底部は広く厚く、糸切り底である。

**台付皿 (49-50)** 径15.7cm、高さ4.6cmほどのもので、高い高台をそなえる。端部と高台だけがでいねいに横なで仕上げされ、あとの部分は凹凸をのこす。

**蓋 (56)** 径25cm、天井部までの高さ4cmで、中央に扁平な高い鈕を付ける。鈕の中ほどには径5mmの孔が貫く。肩部には指頭による凹みがめぐっている。

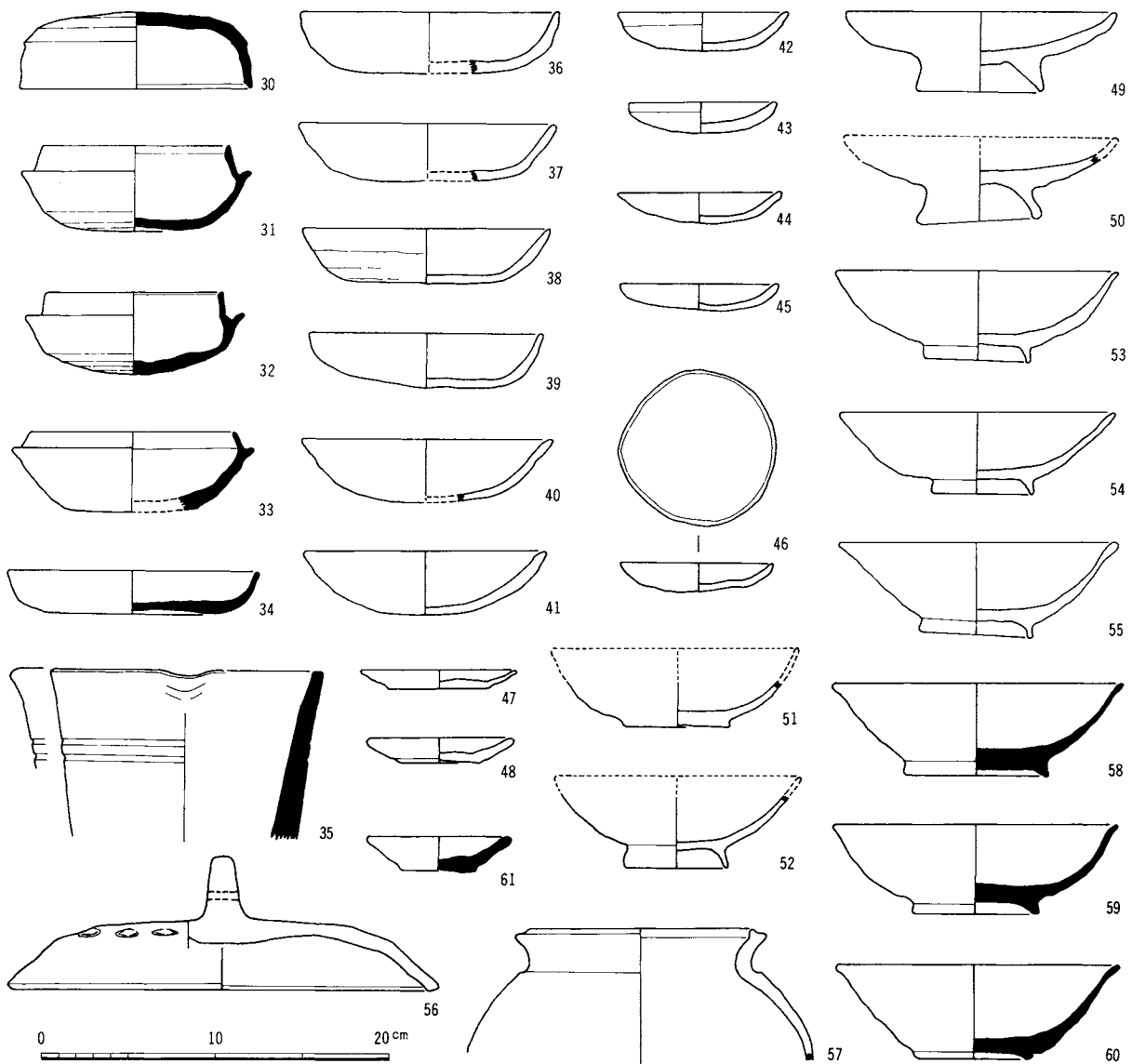


鍋 (57) 口縁部は短く、肩部に比べ器壁も厚い。端部はわずかにひき出されて小さく立ち上るのが特徴的。胎土には砂粒を多くふくむ。肩部にはススが付着したまま。

(2) 山茶椀、山皿

山茶椀 (58-60) 58-59は径16.5cm~17cm、高さ5.2cm~5.4cmで、器壁の厚い底部に薄くひき出された口縁部のもの。口縁部には褐色の自然釉がみられる。60は15.5cm、高さ5.5cmで、高台も低く、その端面には靨痕がみられる。58~59に比べ、時期の降るものである。

山皿 (61) 径7.5cm、高さ2cm。底部は高台をそなえないが、高台状に低く作り出される。

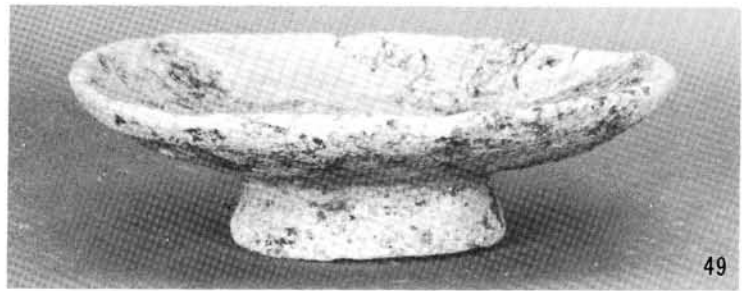


35

土器実測図 (1 : 4)



42



49



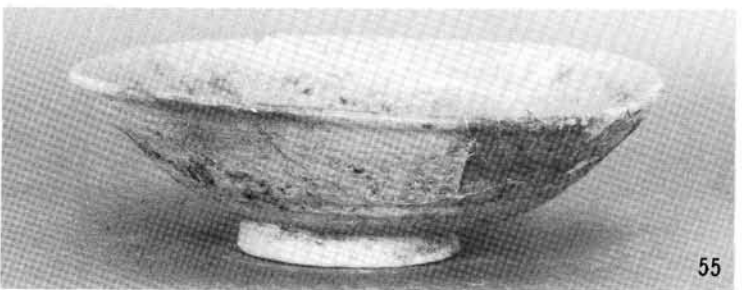
43



53



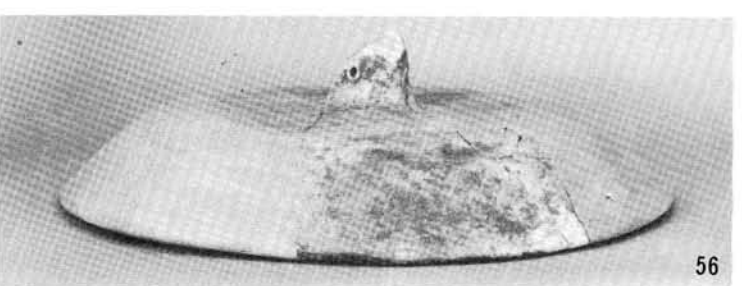
44



55



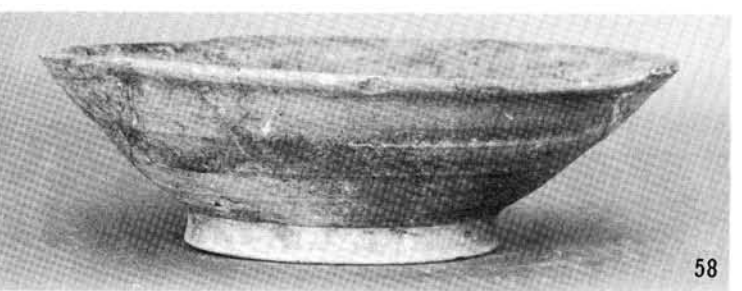
45



56



46



58



61



60

36

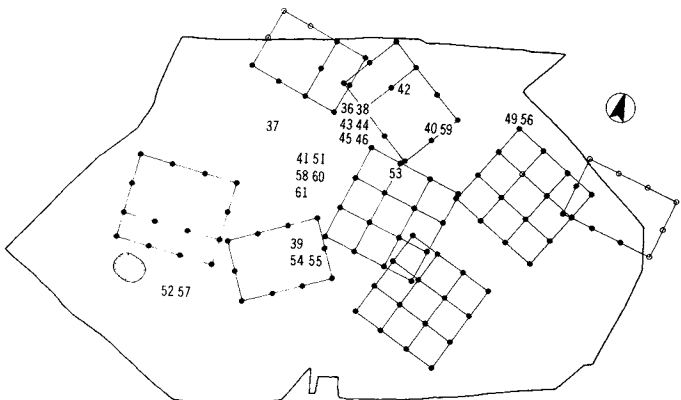
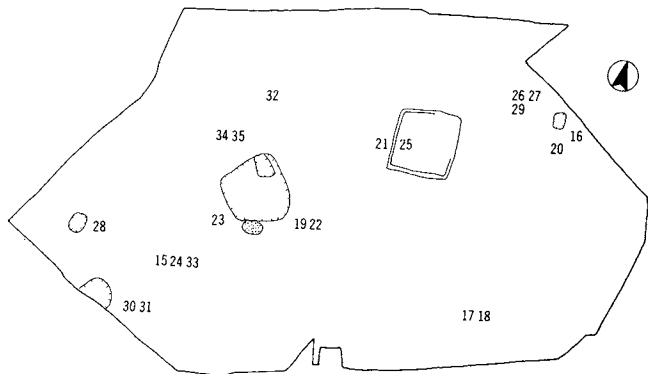
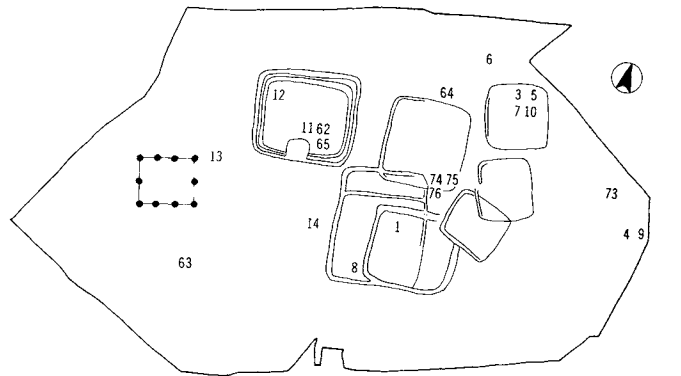
出土遺物 (1 : 2 56は1 : 3)

# IV 結 語

赤垣内遺跡は、北東にある仲垣内遺跡と同様、弥生時代にはじまり、鎌倉時代までの各時代に断続的に営まれた集落址である。地形的には仲垣内遺跡との間にある浅い凹地で区分されているが、きわめて有機的なつながりをもった遺跡と思われる。東西約80m、南北約60m程の範囲が考えられる。南側前面に水田可耕地としての広い谷間平地がひろがり、背後は低い丘陵地をひかえ集落立地としては格好な地形であるといえよう。

弥生時代後期では、建物址として7棟あるいは8棟の竪穴住居址と、高床式倉庫と考えられる掘立柱の建物址1棟がある。竪穴住居址は極めて近接するか、あるいは重複していて、同時に建てられていたものとは思われない。SB1・2とSB5・6・7はそれぞれ床面の南北軸も同方向にちかく、建てられた前後は明らかでないが、建替えによる重複と思われる、3棟ないし4棟が一つのまとまりとして考えられる。倉庫と思われるSB24が竪穴住居から離れて西側に建てられていることが注目される。この推定倉庫址は建替されていないが、3棟ないし4棟の竪穴住居とともに一つの集落が構成されていたのであろうか。全体に出土遺物は少ないのであるが、そのなかでも石器として大形の石包丁、石鏃など数点が出土している。少量とはいえ生産用具として、石器にある程度依存していたことになる。

古墳時代後期では、小形の竪穴住居址SB9の1棟が確認できた。発掘区の西部の浅い不定形な土壇群では、須恵器、土師器もかなり出土していて、同時代の



37

時期別遺構配置図

上弥生期、中古墳期、下平安期

アラビア数字は実測遺物番号

集落の一角をなしていたと思われる。出土品のなかには、5世紀末と思われる須恵器杯（第35図 30-32）などと6～7世紀にわたる須恵器杯（同図 33、34）もあって、ほぼ全時代にわたっている。しかし以後、8世紀から10世紀までの間は、遺物、遺構とも検出されず、居住地の移動、いいかえれば、他の場所への住み替えによる集落の断続的な現象が想定される。これは、東隣の仲垣内遺跡でも同様の傾向を示している。何らかの理由での集落の移動を思わせるのである。

平安時代後期では、8棟の掘立柱建物址がある。桁行3間×梁行2間の平面を基本型にするものと、桁行、梁行とも3間の平面が方形のものがある。これらの方向には統一性はなく、数度の建替えが考えられる。北東-南西方向に棟方向をおくS B 17以外は、ほぼ東西方向の棟か、北西-南東方向の棟でもわずかに西面に偏っていることが認められる。

3間×2間のものは、平面積が27㎡前後で規模としては差をあまり示さない。S B 19では桁行の柱間の西から第一間の梁行にも中央に柱穴があり、またS B 20では同じく東から第一間の梁行の中央に柱穴がある。これは西あるいは東に廂をそなえるというより、間仕切りのための柱穴とも思われる。3間×3間の平面が方形のものは、桁行方向とも梁行方向とも総柱の倉庫と思われるものである。面積は40㎡～45㎡ほどで、3間×2間の建物に南あるいは北に更に一間加えた格好のものである。これら3棟が発掘区に散在しているのではなく、ほぼ一箇所にまとまっていて同一場所における建替えの考えられるものである。

# 度会郡玉城町小ばし遺跡

## I 位 置

度会郡玉城町は北半部が東西に広がる外城田川水系の平野地帯からなるのに対して、南半部は溜池灌漑に頼る幾条もの谷底平地が丘陵の間に南北に細長く発達している。町内の遺跡（遺物散布地）の多くは弥生時代以来、このような流域平野ないしは谷底平地より一段高い丘陵上もしくは丘陵裾に形成されている。

小ばし遺跡も圃場整備事業の実施に伴って行なわれた事前の試掘調査によって確認されたそのような遺跡の一つであり、北に延びる低丘陵の東裾に形成されたものである。標高30m足らずの地であり、東にはすぐ谷底平地が続き、それとの比高差は1mにも満たない。西は町道を挟んで緩やかな斜面が続き、標高約34mの丘陵頂部には玉城町矢野の集落が営まれている。この丘陵頂部から緩斜面にかけては遺跡立地上、申し分のない地形であり、中街道北・中街道南・東浦・元屋敷・上出山といった弥生時代以降の各遺跡が確認されており、さらに矢野の集落の南、一段高い丘陵地の尾根には田乃家神社1・2号墳があって、矢野の集落が形成されている丘陵地は遺跡分布の密度の高い地域といえよう。

小ばし遺跡と谷底平地を挟んで東に相對する丘陵地にも古墳、遺跡は多く、この遺跡の隣接する谷底平地は周辺の丘陵地に多数の遺跡を抱えているのである。

## II 遺 構

検出した遺構として井戸1、溝状遺構2、土壇1、杭列がある。他に柱穴とおぼしき径30cm以



下の円形小ピットが井戸SE4の周辺に多数あったが、建物址を想定できるような規則正しい配置は見られなかった。それぞれの遺構の属する時代は明確ではないが、出土土器から判断して平安時代末から鎌倉時代に及ぶ年代幅に含まれるものであろう。たゞ杭列のみは、遺構の集中する西半部と土質が違い、軟弱であり、しかも出土土器がほとんど認められない点、他の遺構と同一時期と見なしがたい。

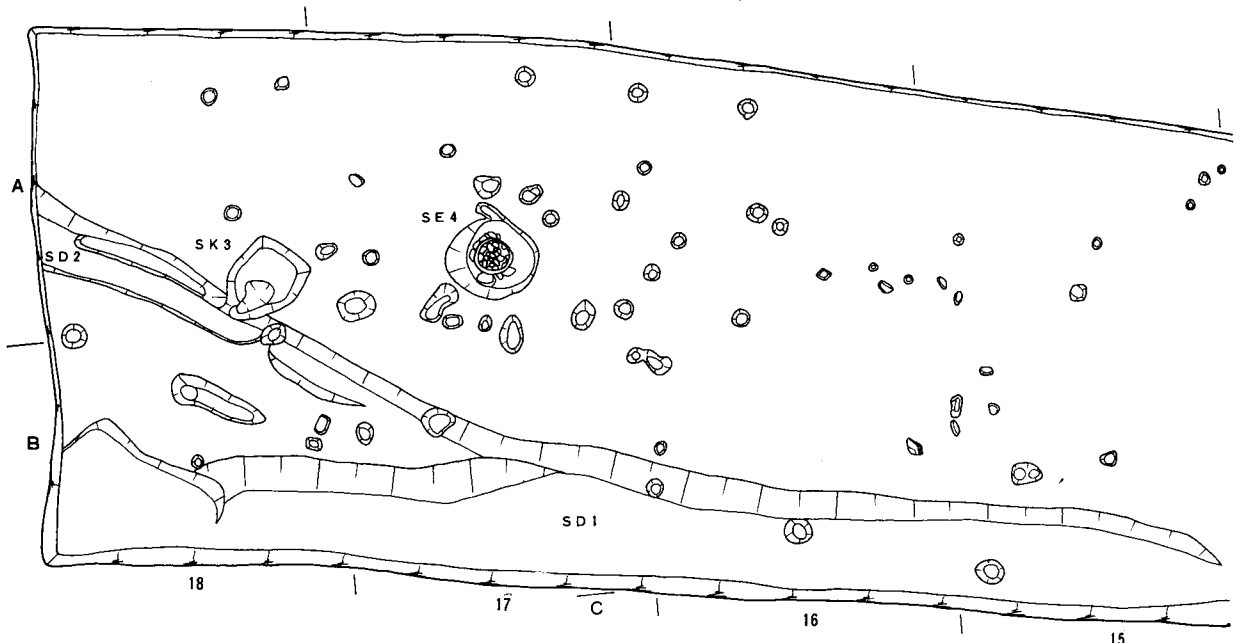
### 1. 溝状遺構

SD1 発掘区南側で検出したもので、15C区で消えている。肩から底まで10cm未満の深さであり、溝内は砂礫混りの褐色土で埋まり、その土中から須恵器、施釉陶器、山茶椀、土師器が検出された。今回の調査で出土した遺物のほとんどは、この埋土中より出土した土器類で占めら



39

発掘区の位置 (1 : 4000)



40

遺構実測図 (1 : 100)

れる。溝の南肩は発掘部分が限られているため不明であるが北肩は発掘区南側の一段低い水田と一段高い畑地であった発掘区とを画していた畦畔に並行している。案外、溝状を呈さず水田方向に傾斜する傾斜面の部分かも知れない。

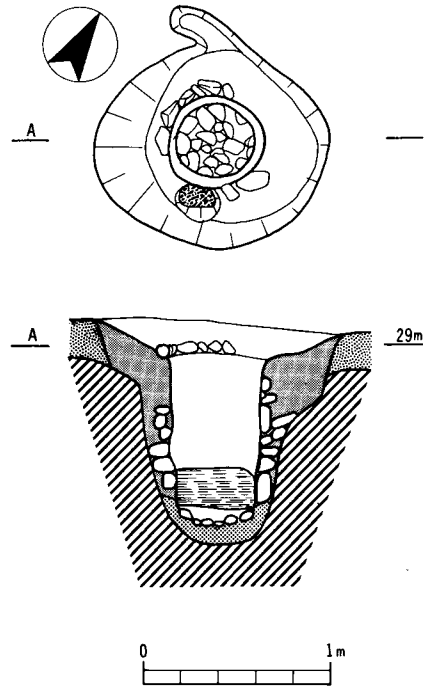
**SD 2** 18A区から18B区にかけて東西にのびる幅0.6~0.8mのもので、深さは北肩から10~20cm、南肩からでは5cm前後と浅い。そして東から西へいくに従い深くなる。

## 2. 土 塚

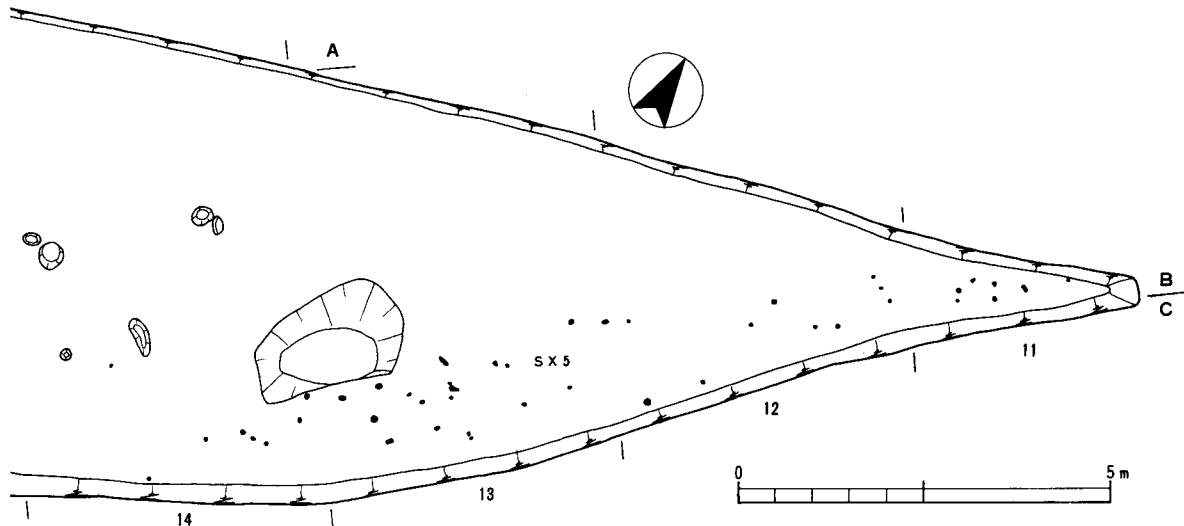
**SK 3** 1辺50~80cmの五角形状を呈する、深さ20cmの土塚で、埋土中より山茶碗が出土した。

## 3. 井 戸

**SE 4** 径50cm、深さ1.05mの円形の小井戸。固くしまった赤褐色土の地山面上に堆積する褐色土層から掘り込んでおり、掘り肩径は1.1×1.3mである。一掘りで地山面に達し、掘る幅を1.0mとせばめ、掘り下げるに従い狭くなり、底幅は60cmほどとなる。底は丸く掘りくぼめられ、湧き出る水の濾過と混濁を防ぐためであろうか、青灰色粘土を厚さ12cmほど敷き詰めたその上に長さ10cm以下の礫を並べていた。そしてその礫面上に径40cm、高さ20cm、厚さ1cmの桧製の曲物が井戸枠として残存していた。井戸枠と掘り方壁面との空隙に底と同様な礫を主に狭い面を枠に当てる形で、黄褐色土を詰めて積み重ねていた。この掘り方壁面内側の石積みは曲物の残存のない井戸上部まで続き、石積みの過程で詰めたと思われる黄褐色土が積み上げた礫を隠して、井戸壁面のように固くなり、井戸埋土はそれからはがれるようにして掘り上げられた。このような壁面の出土状況から推してもともと曲物の井戸枠は段を重ねて井戸上部まであったものが廃絶後、水のつかない井戸上半部の曲物のみ腐り、水のつかる最下段のものだけが残ったものであろう。



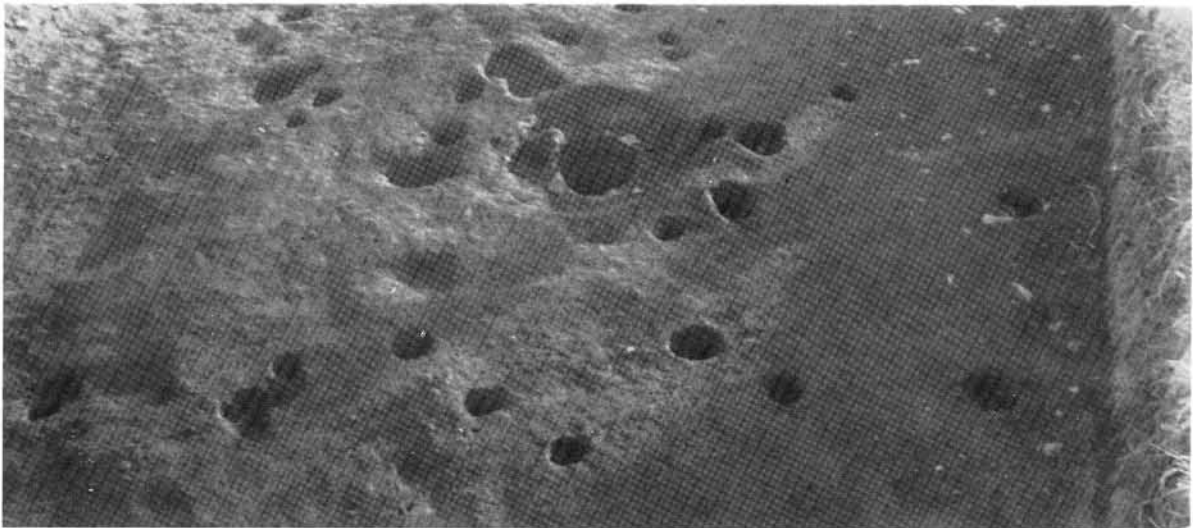
41 SE 4 実測図 (1:40)





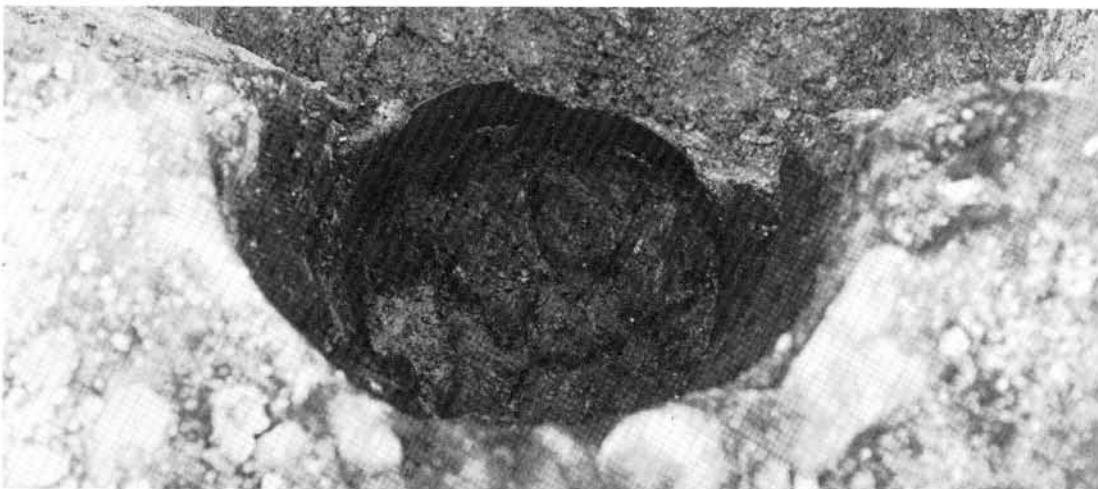
42

発掘区全景（東から）



43

S E 4 全景（東から）



44

S E 4 近景



井戸上縁の周囲には礫が敷かれていたらしく部分的に残存していた。また、褐色土掘り方から井戸上縁までの浅い土壇状の埋土中には比較的まとまった土師器の出土があった。なお、井戸上縁に接して10×20cmの広がりをもった焼土が検出されたが、井戸廃絶後のものであろうか。

#### 4. 杭 列

**S X 5** 発掘区東隅の軟弱でしかもやや傾斜する地で検出されたものである。軟弱な地盤に打ち込まれた杭は根の部分のみが残り、その並び方には一定の規則性がなく、雑然としている。残った杭根から観察すると径が5cm以下の丸杭であったようで、先端を面取りしながら削り、尖らせている。杭列部分からはほとんど遺物は出土しなかった。

### III 出 土 遺 物

須恵器、灰釉陶器、山茶椀・山皿、土師器、土製支脚といったものが整理箱（40×60×10cm）に10箱程度出土した。とくに山茶椀が多く、灰釉陶器、土師器とともに発掘区西南端の溝状遺構であるSD1に堆積した褐色砂礫土中で多数検出された。他にSE3の井戸枠として使用された曲物がある。

#### 1. 須 恵 器

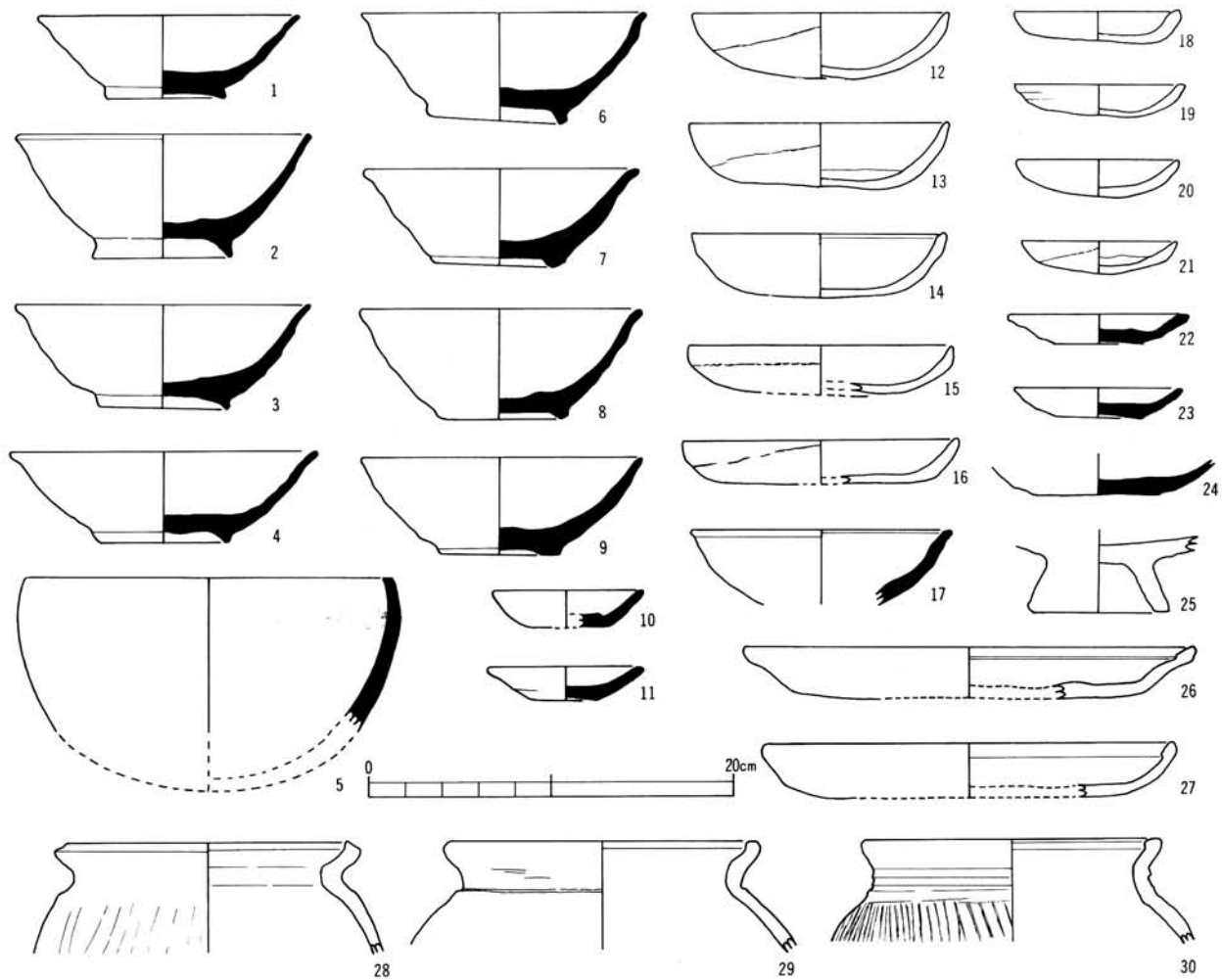
鉢一点のみで、他に検出されなかった。

**鉢（5）** 口縁部のみの破片で、底部を欠くが、形状から鉄鉢形と推定されるもの。口径20cm、推定高12cmほどで、口縁部は内彎して全体に丸味を感じさせ、ロクロによるヨコナデ調整で仕上げ、口端上面は平らに面取りされている。

#### 2. 灰釉陶器

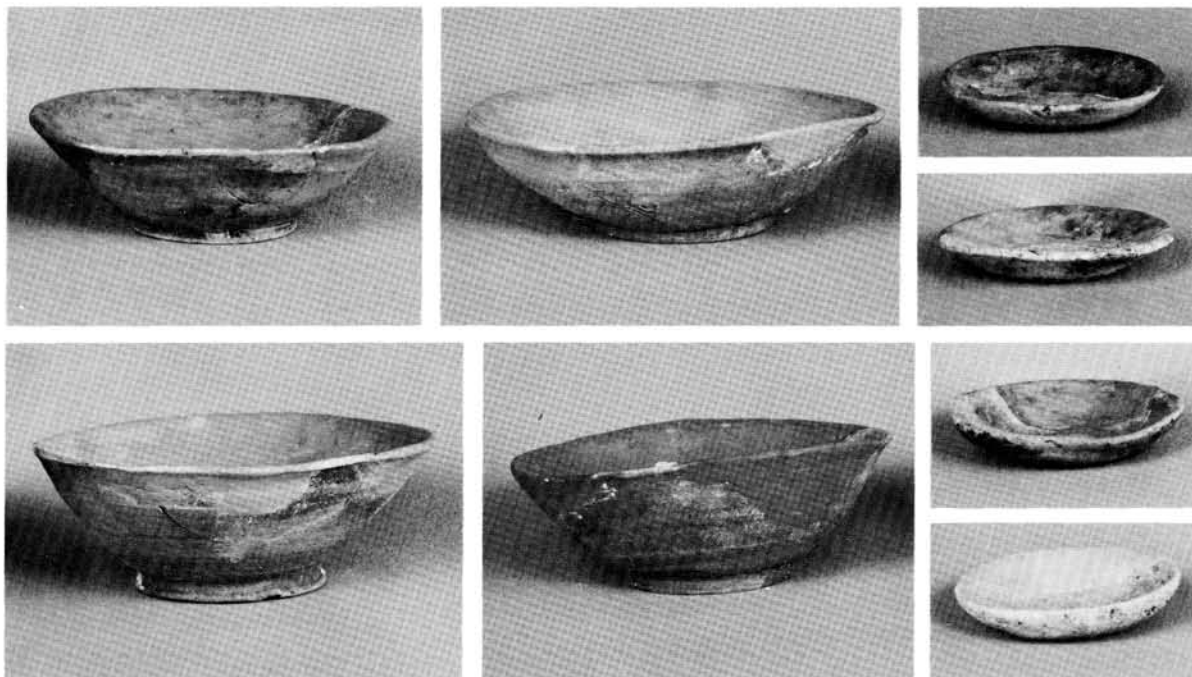
山茶椀に混じって出土しており、器種としては椀のみで点数も少ない。

**椀（1）** 口径14.5cm、器高4.5cm。口縁部は逆「八」字形に直線的に開き、口端が少し外へ反る。底に糸切り痕が残り、高台は付け高台で、断面三角形を呈し、内彎気味に立つ。釉は器体外面上半と内面全体に残り、つけがけしたものである。たゞ、底部の器壁が1.2cmと厚く、その分シャープさがなくなり、山茶椀の形態に大変類似している。



45

土器実測図 (1 : 4)



46

出土土器 (1 : 3)

### 3. 山茶椀・山皿

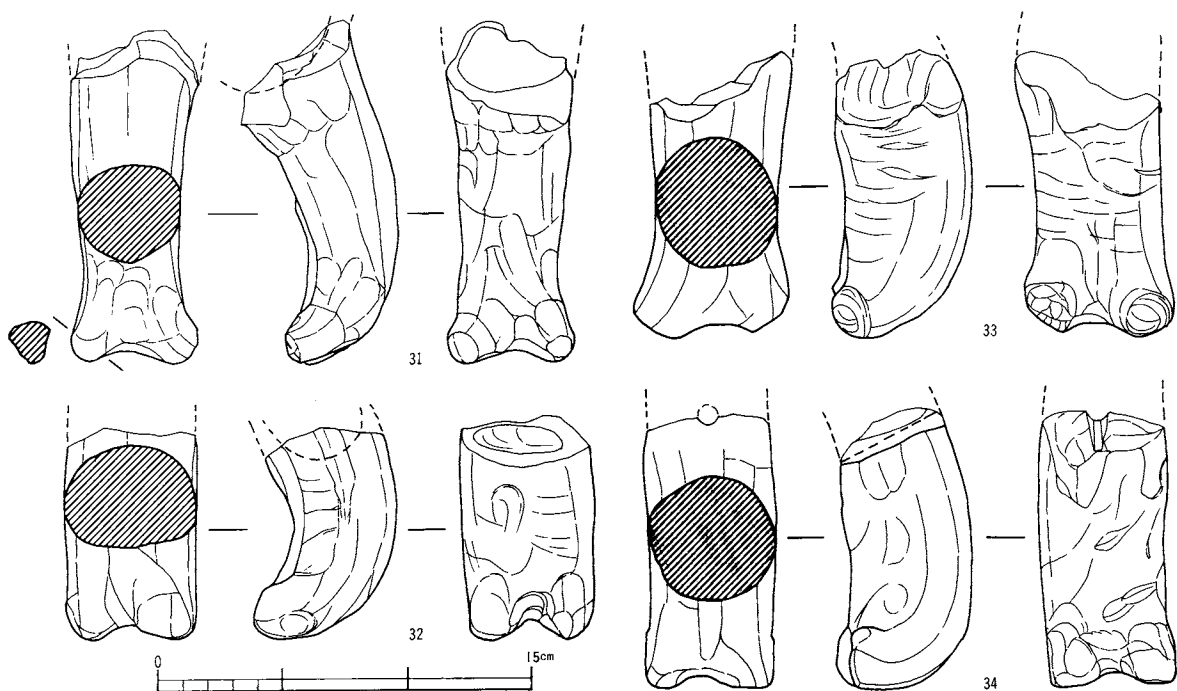
山茶椀(2~4・6~9・17・24) 口径は7が最小で15.3cm、最大の4で17cmであり、16cm前後のものが多い。器高は4が最小で5cm、最大の2で6.7cmを計り、6cmほどのものが多数を占める。器形には浅い、深いの別はあるものの概して口縁部は逆「八」字形に開き、中ほどが内彎気味で口端は丸くおさまって外へ反る形となる。なお、2のみ口端外面を焼成後に削って面をなしている。底部は糸切り痕を全て有し、器壁は1cmほどと皆厚い。高台は灰釉陶器のように断面三角形をなして踏ん張る形のもの、断面が梯形に近く、厚くて低いものともがある。後者のもの高台下面には靱圧痕のつくもの(6、7)、ヒビの多く入ったもの(8)、靱ではない圧痕の多く付くもの(9)があって、下面調整については余り注意が払われていない。なお、釉については4のみに内面に剥落の痕跡があったのみで、他のものでは確められなかった。

山皿(10・11・22・23) 口径8.5cm、器高2cm、底に糸切り痕を有し、口縁部は直線的に外へ開く。

### 4. 土師器

杯、皿、甕などが出土しており、総じてどの器種も口端部分が肥厚している。

杯(12~14) いずれも口径14cm、器高3.5cm。内面と外面口端部分はナデで仕上げているのに対して、口縁部下半から底部にかけての外面には凹凸があって、指でおさえたまゝにしている。胎土に砂粒を含み、器壁は底が薄く、上げ底気味になる場合が多い。なお、12・13の器面には粘土紐巻き上げによる成形痕跡が残る。





皿 (15・16・18～21・26・27) 口径8.5～9.5cm、器高1.8～2.0cmの小皿 (18～21)、口径14.5～15cm、器高2.4～2.8cmのもの (15・16)、推定口径23～25cm、器高3cmの大形の皿 (26・27) といった大・中・小の三種類があり、成形、調整、胎土の状態も杯と全く同様である。たゞ、大形の皿の口端部分の肥厚は、内に折り返してヨコにナデたようなもので、口縁内面の器壁に段がつく。

甕 (28～30) 推定口径16～17cm。いずれも口縁部から肩にかけての破片のみで、全形のわかるものはない。通常、肩からは荒い刷毛目を伴った調整がなされ、口縁部はヨコナデされる。たゞ、30の口縁から肩にいたる屈曲部はへらを用いて胎土を削っており、段を有する形となっている。いずれの甕も口端が内側に突出するように肥厚しており、それがこれらの甕の特色である。

なお、「八」字形に開く台脚部 (25) が出土しているが上に杯のようなものがのるのであろうか。

## 5. 土製支脚

一端がわずかに二又に分れて、横から見た形が「角形」を呈する土製品で、小林行雄氏が始めて論証された土製支脚<sup>(1)</sup>に当ると考えられるものであるが、一端にすべて剥離痕を有しており、二又に分れる一方の端を接地面と考えた。

全体の形がわかるものではなく、すべて一方の端部のなくなったもので、最も大きい31で、残存長13.5cmである。断面は円形ないし楕円形を呈し、下部先端にいくに従い細くなって、先端で広がり二又に分れるものと、上下とも変わらずに下部先端が二又に分れるものがある。二又に分れた先端部はいずれも「く」の字形に内傾しており、その先端面は焼成時の面がなくなり、接触して擦った結果によると思われるようなざらざらした素地を見せている。調整は外面を主としてタテにヘラ削りをし、内面を指でおさええており、全体として粗雑な作りのものである。火熱を受けて器面が脆くなったような状況は見られないが、部分的に煤のつくものはある。

なお、32は欠けている一端の器胎が2cmほどくぼんでおり、また34の欠損断面には径7mmの円孔がヨコに通っている。

## IV 結 語

遺跡は丘陵裾に位置し、その広がり是不明であるものの、山茶碗などの出土土器から平安時代ごろに形成されたものと推定される。

確たる遺構は井戸跡1ヶ所のみで、遺跡立地・形成時代・遺構のあり方の点で昭和50年11月に調査された松阪市小野町・小野遺跡とよく類似する。小野遺跡は丘陵裾にあって井戸跡3ヶ所が検出された平安時代末の遺跡であって、筆者はその遺跡について丘陵上に広がる遺跡（黒塚遺跡）に建物跡など、ムラを構成する主要部があって、丘陵裾に飲料水を求めて井戸跡を残したのではないかと推定したことがある<sup>(2)</sup>。本遺跡の場合も隣接して続く丘陵上に中街道北遺跡が所在しており、それと関連のある遺跡と考えられ、小野遺跡で推定したことが本遺跡の場合でもあてはまるのではなかろうか。

出土遺物の中で注目されるものは土製支脚である。先端が分れて二又になっている点は小林行雄氏が論証された「犬埴輪」形のものに上から見た形が類似し、その先端面に擦過による痕跡が認められる点から、先端面を下にして五徳のように煮沸具としての土器を支えたものと推定される<sup>(3)</sup>。ただ、土製支脚についてはかまど出現以前に西日本各地で使用され、かまど出現とともに姿を消すものであるとの理解が一般的である<sup>(4)</sup>。しかし、伊勢市、明和町などで鎌倉時代に属する鼎のような土師器三足付鍋の出土もあり、かまどを使用しない煮沸具としての土器の利用も一面ではあったことが窺い知れる<sup>(5)</sup>。平安時代末ともなれば大勢としてかまどを厨房にすえた生活を営んでいる反面、

かまどを利用しないで、土製支脚でもって煮沸容器を支えた、移動簡便な利用方法もあったと思われる。

註

- (1) 小林行雄「土製支脚」（『考古学雑誌』第31巻1号 1941）
- (2) 松阪市史編さん委員会編『松阪市史 第2巻 史料編 考古』（松阪市 1978）
- (3) 注1に同じ
- (4) 大橋信弥「支脚形土製品の系譜」（『古代研究』17 1979）
- (5) 谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告 -D地区-』（三重県教育委員会 1974）

# 伊勢市上地町野垣内遺跡

## I 位 置

南勢地方第一の大河である宮川は度会、多気両郡の山峽を蛇行してのち、度会町・玉城町と伊勢市の境界を流れるころになると川幅も増し、伊勢市南部丘陵の西裾、伊勢市街地の西方を洗う形で北東、北、北東方向へと流路を変えながら緩やかに流れている。この宮川の流れに沿って左岸に段丘が玉城町から伊勢市上地町、そして小俣町へと北々東に延びている。この段丘と宮川の間には南北5km、東西の最大幅1.5kmの細長い沖積地が形成されている。沖積地は、かつては宮川の河床ともなったところであり、段丘裾を宮川が洗っていた時代もあったのである。今は段丘直下に汁谷川という小川が一筋流れ、度会橋より1.5km下流で宮川に合流している。









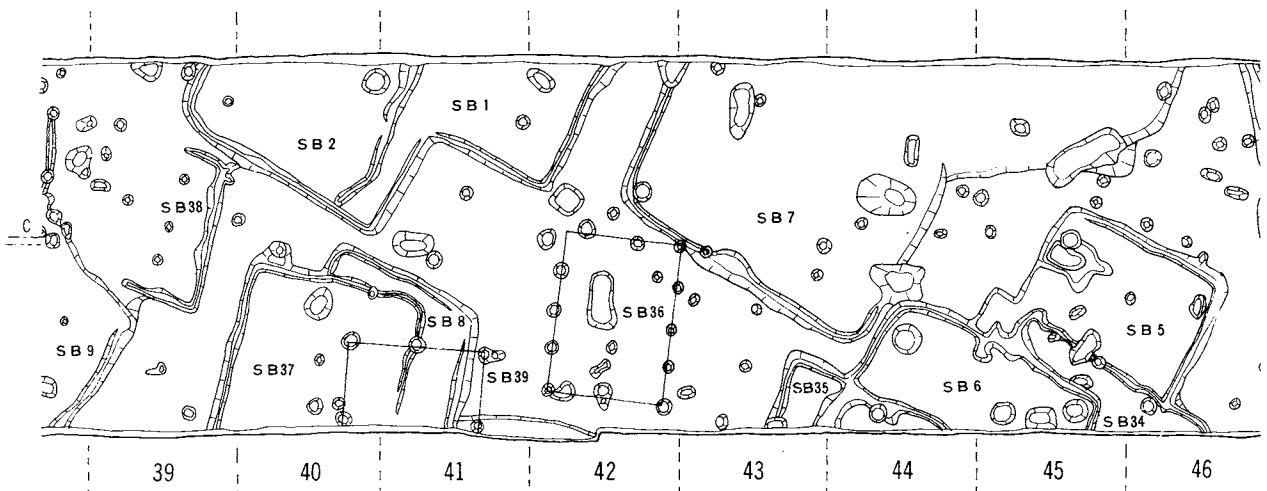
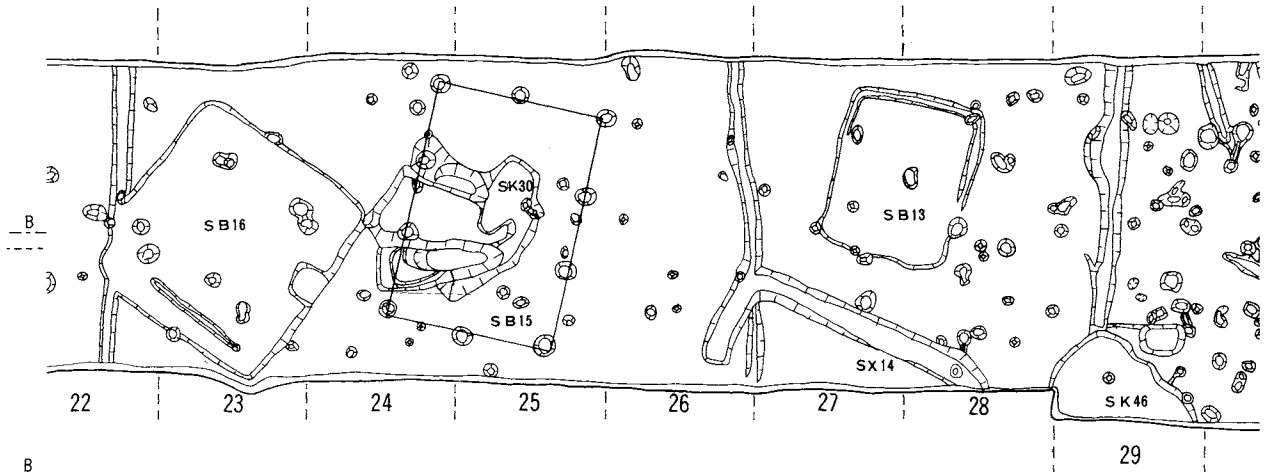
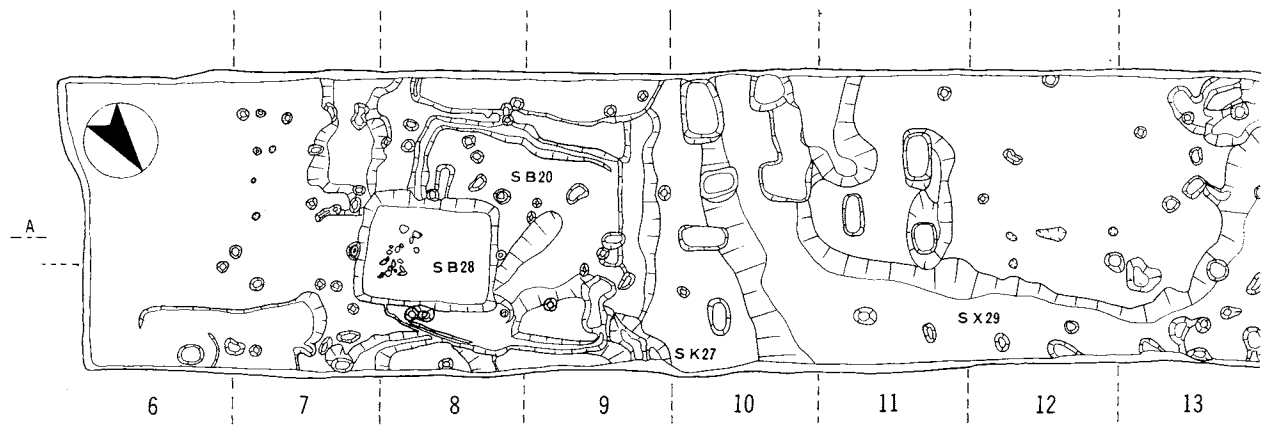
野垣内遺跡は、行政区画からいえば伊勢市上地町字野垣内に位置する遺跡である。上地町の集落と県道松阪伊勢線（旧国道23号線）、そして県道松阪伊勢線より分岐して上地町集落へ入る市道周辺とに囲まれた段丘東縁部分に広がる。正確な範囲はまだ確認していないが、圃場整備事業に伴って本調査前に実施した試掘調査の結果を参考にすれば少なくとも200m×300mの広がりをもつ大遺跡と推定され、さらに県道松阪伊勢線を越えて小俣町掛橋地区へも広がる可能性もある。遺跡地は標高13m前後、段丘裾を流れる汁谷川周辺の沖積地との比高は7mあり、水田、畑地として利用されている。この遺跡の所在する段丘の南方向の東縁部には中楽山遺跡、小社遺跡と続き一方、北には史跡離宮院跡、大藪遺跡が同様な地形の地に所在する。離宮院跡を除く他の3遺跡はいずれも弥生時代後期の宮川流域の代表的遺跡である。段丘下の沖積地には玉城町大字曾根に所在する中の切遺跡が知られるのみであり、それも山茶碗を出す遺跡であって、段丘上の遺跡に匹敵するものは知られていない。

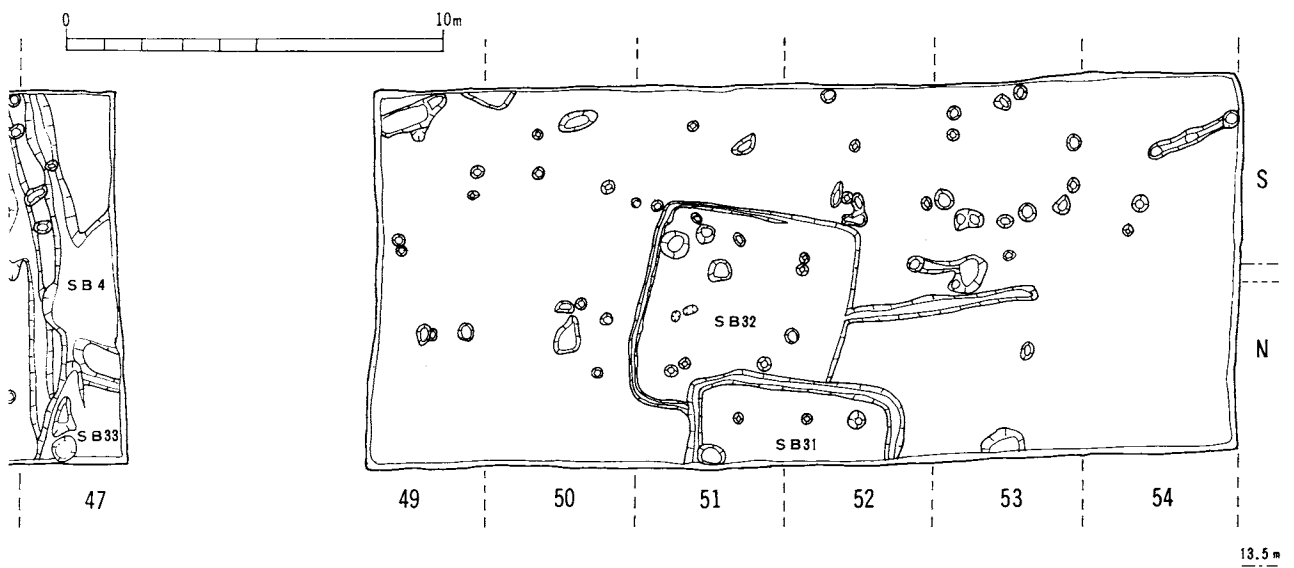
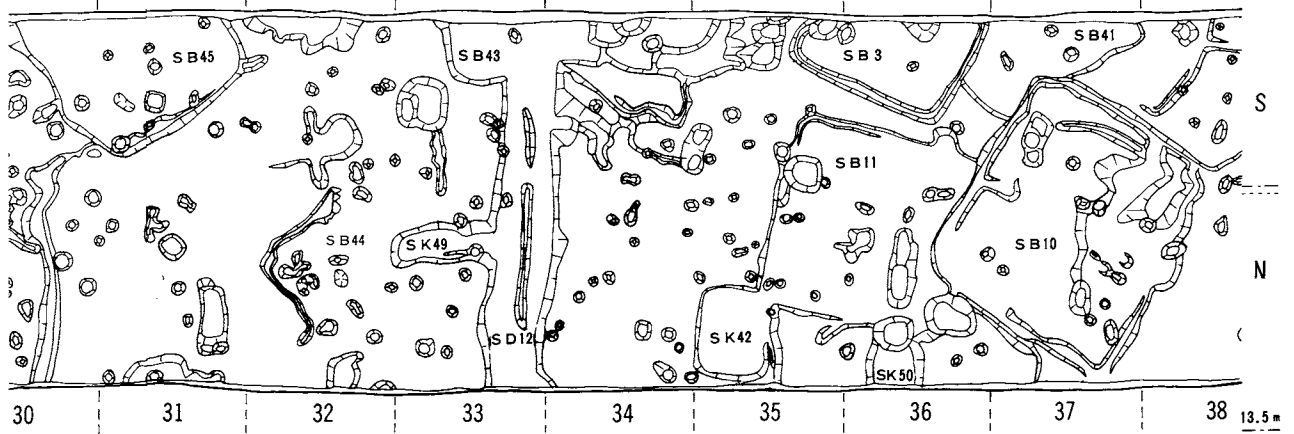
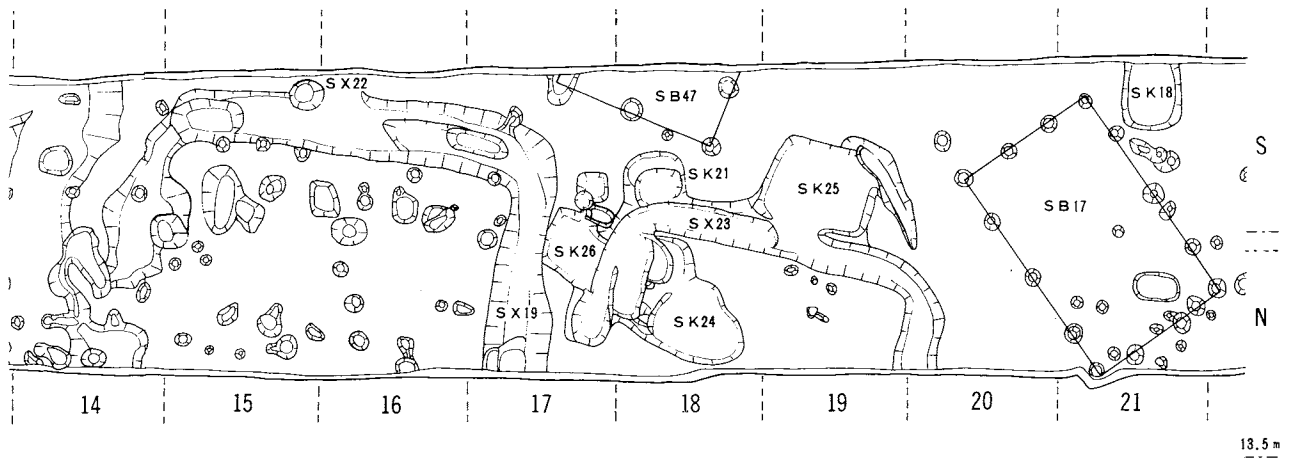
## II 遺 構

調査を実施するに当っては、試掘のときの20m間隔の区画を生かして、幹線排水路計画敷のセンターラインからほぼ北側にあたる県道伊勢松阪線（旧国道23号線）側をN区。その反対側をS区とした。東西方向については、東端にあたる台地端部の工事用センター杭を基点として、ほぼ北側へ4m間隔に区割りし、それにアラビア数字を1から順に与え、4m×5mの小区画を設定した。

遺構は黒色土の堆積層を除去してあらわれる砂礫混じりの赤褐色土の地山面において全て検出された。地山を覆う黒色土は16～21区が他地区より厚いが、概して厚さ50cmまでであった。検出された遺構は、弥生時代後期、平安時代、鎌倉時代の3時代に概括され、主要な遺構として、竪穴住居址25棟、掘立柱建物址5棟、方形周溝址4基、溝址1条、厨房址と考えられる方形竪穴址4基を数える。これら遺構の発掘区での分布を概観すると、弥生時代後期の竪穴住居址はすべて30区以西の発掘区西半部分に集中して検出され、竪穴住居址として推定したものを併せて21棟が所在する。しかし、完全な姿で検出されたものは1棟もなく、それぞれの竪穴住居址はお互いに重複していた。この竪穴住居址群中には、時代不詳の掘立柱建物址2棟、鎌倉時代の溝址1条の他、若干の土壇があるのみである。

ところが、30区以東の発掘区東半部分になると弥生時代の竪穴住居址は姿を消し、同時代の方形周溝址4基が並んで検出され、それに重複して平安時代の掘立柱建物址3棟、竪穴住居址3棟方形竪穴址4基、鎌倉時代の竪穴住居址1棟が所在する。このように、発掘区西半部分と東半部とでは遺構分布の上で歴然とした差違を見せる。







52

発掘区近景（西から）



53

発掘区近景（東から）



54

16~27区全景 (南から)



55

24~16区全景 (西から)





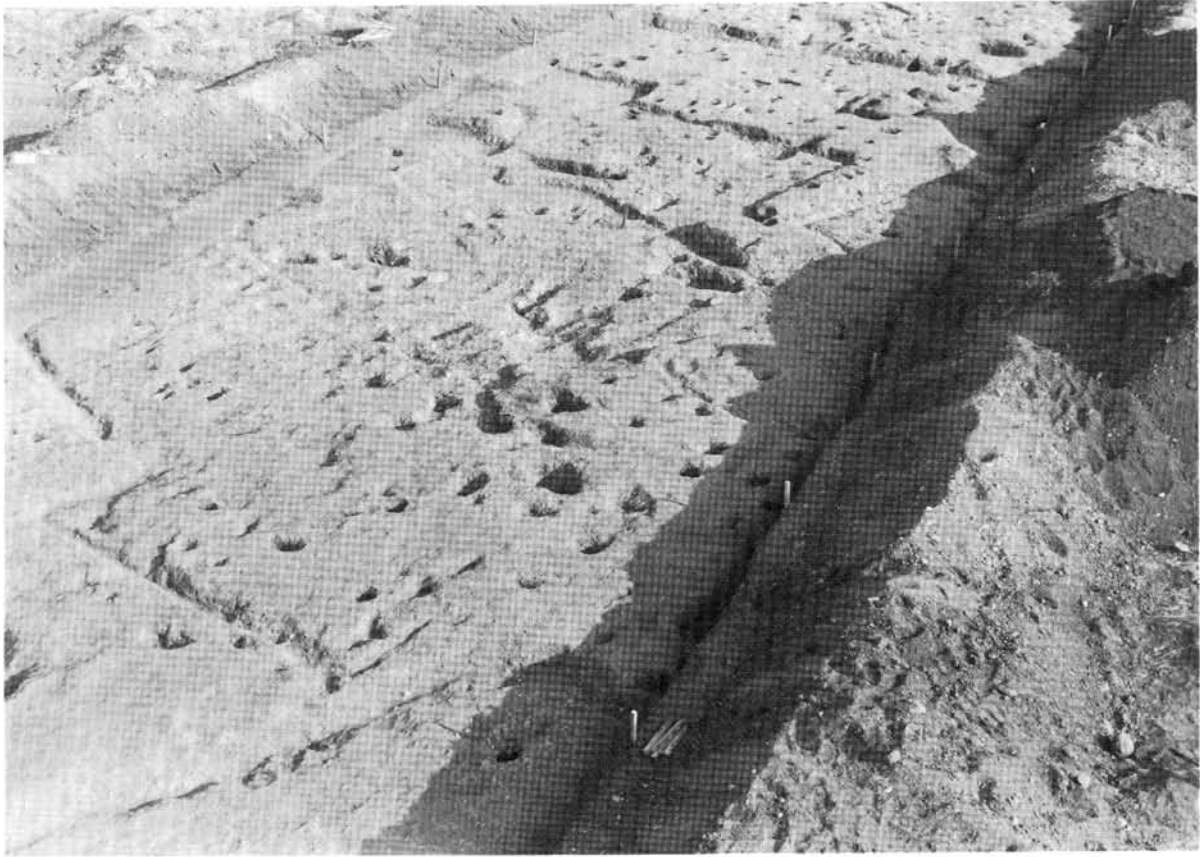
56

26~32区全景 (南から)



57

33~17区全景 (西から)



58

40~33区全景（西から）



59

39~47区全景（南から）

## 1. 弥生時代の遺構

すべて弥生時代末の欠山式土器を出す遺構で竪穴住居址21棟、方形周溝址4基、壺棺墓址1基がある。竪穴住居址は前述したように30区以西の発掘区西半部分に集中している。この西半部分は発掘区東端部分の6～13区とほぼ同じ高さで、発掘区内で最も高い位置を占め、それ故か耕土下の腐植土の層は薄く、その下に広がる礫を含む赤褐色粘質土層を竪穴住居址のベースに利用している。ベースに礫が多く顔を見せるため支柱穴が不明な場合が多く、また周溝の追求も不明確になりがちであった。

これに対して、方形周溝址—とくにS X 14、S X 19、S X 23—の所在する部分は発掘区内で最も地山面が下がる場所で、耕土下の腐植土の堆積が厚く、地山面は砂礫を比較的含まない赤褐色粘質土である。したがって遺構の検出も容易で、遺構の遺存状況も比較的良好であった。

### (1)竪穴住居址

**S B 1** S B 2と重複し、その先後関係は不明。鉤形に東と北に周壁を見せるのみであり、北壁は発掘区外に延びる。幅10cm、深さ5cm前後の周溝が壁際をめぐり、隅に径30cmほど、深さ25cmの円形ピットがあり、支柱穴の一つと考えられる。

**S B 2** 一辺5.5mの方形の竪穴住居址。東半部分を発掘したのみで周壁はS B 1のものと平行する。北壁に並行する形で床面に浅い溝状の跡が残り、その一部はS B 1の周溝の痕跡かも知れない。東南隅に径26cm、深さ30cmの円形ピットがあり、支柱穴と考えられるが、それに対応する北東隅の柱穴は検出できなかった。三方の周壁際には幅10cm前後、深さ4～13cmの周溝がめぐる。床面中央、東壁寄りに0.6m×1.2mの範囲で焼土が見られ、炉址と推定される。遺物は床面に近い腐植土中で検出され、とくに東南隅部分からは1・2・7・8の土器が重なった状態で1ヶ所から見つかった。

**S B 3** 西壁と南壁の大半は発掘区外に隠れているが、三隅が確認できる竪穴住居址。3×4.5mと南北方向が長い。周壁に沿って幅10cm、深さ7～8cmの、竪穴住居址群中もっとも明確な周溝がめぐる。支柱穴らしいピットが北東隅部分、周壁よりも1.2mほど離れてあり、径26cm、深さ40cmとS B 1、S B 2のものより確固としたピットである。南東隅にも楕円形の大きなピットがあるが20cmほどと浅い。

**S B 4** 南北に発掘区を横断する2本の浅い溝によって東隅が不明瞭になった竪穴住居址。東隅部分の一部が判明したのみで、大半は現市道下に埋没している。

**S B 5** S B 6・S B 34と重複し、おのおのの住居址の先後関係は不明。3棟の中でもS B 5は原状をよく残し、三方の周壁はしっかりしている。東壁のみ他の住居址との重複で消失。規模は南北方向で5mを測り、深さ6～7cmの周溝が二方にめぐる。支柱穴は不明、南西隅に径55cm、深さ40cmの円形ピットがあるが貯蔵穴であろうか。中央床面には2ヶ所、焼土が認められた。



**S B 6** 南北方向の一辺が6.2mの規模のもの。住居址の重複のために周壁は南西隅部分が残るのみであるが重複部分に残存する周溝によって規模及び主軸方向が判明した。南西隅に径80cm、深さ60cmの円形ピットがあり、貯蔵穴と考えられる。床面に焼土面が2ヶ所認められたが東の焼土面が位置からして、この住居址の炉址と推定される。

**S B 7** 竪穴住居址群中、最大のもので南北方向の一辺が7.7mの規模を有する。北壁は西隣りの竪穴住居址風のものと同様のためか周壁、周溝とも途中で消失する。周溝は二方の周壁際にめぐると約5cmと浅い。北東隅床面に径30cmの円形ピット3個があくが中央のものが深さ40cmとしっかりとしており、支柱穴の一つであろうか。床面中央と少し離れたところに焼土が認められた。

**S B 8** S B 37と同様、西壁と北壁とが判明したもので、西壁の長さ4.2mを測る。西壁と北壁は直交せず、少し北壁が外へ開く平面形である。

**S B 9** 北壁と西壁が残るが、S B 10と東半部分が重複し、そこをもって礫の露出が多く、周壁のなくなった部分での周溝の追求は不可能であり、ために規模を明らかにできなかった。また、S B 8同様、北壁と西壁は直交しない。

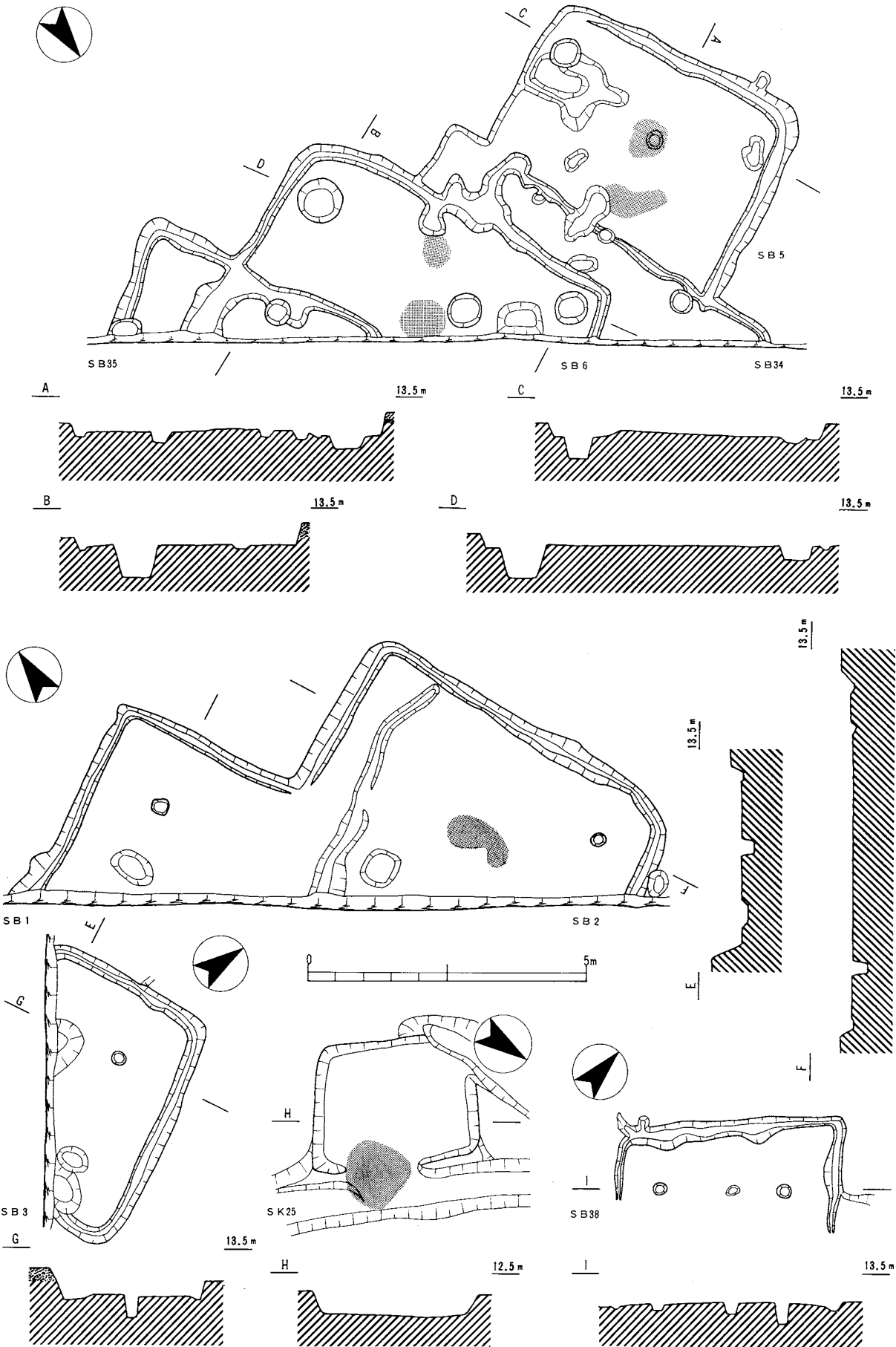
**S B 10** 5.8m×6.8mの規模を有する東西方向に長い住居址。東西側には周壁は残るが、南北側の周壁は消失し、周溝の残存により規模が判明した。床面に礫が多く顔を出し、さながら礫原の観がある。四隅の径25～30cm、深さ15cm（南西隅のもののみ深さ35cm）ほどの小ピットは支柱穴であろう。

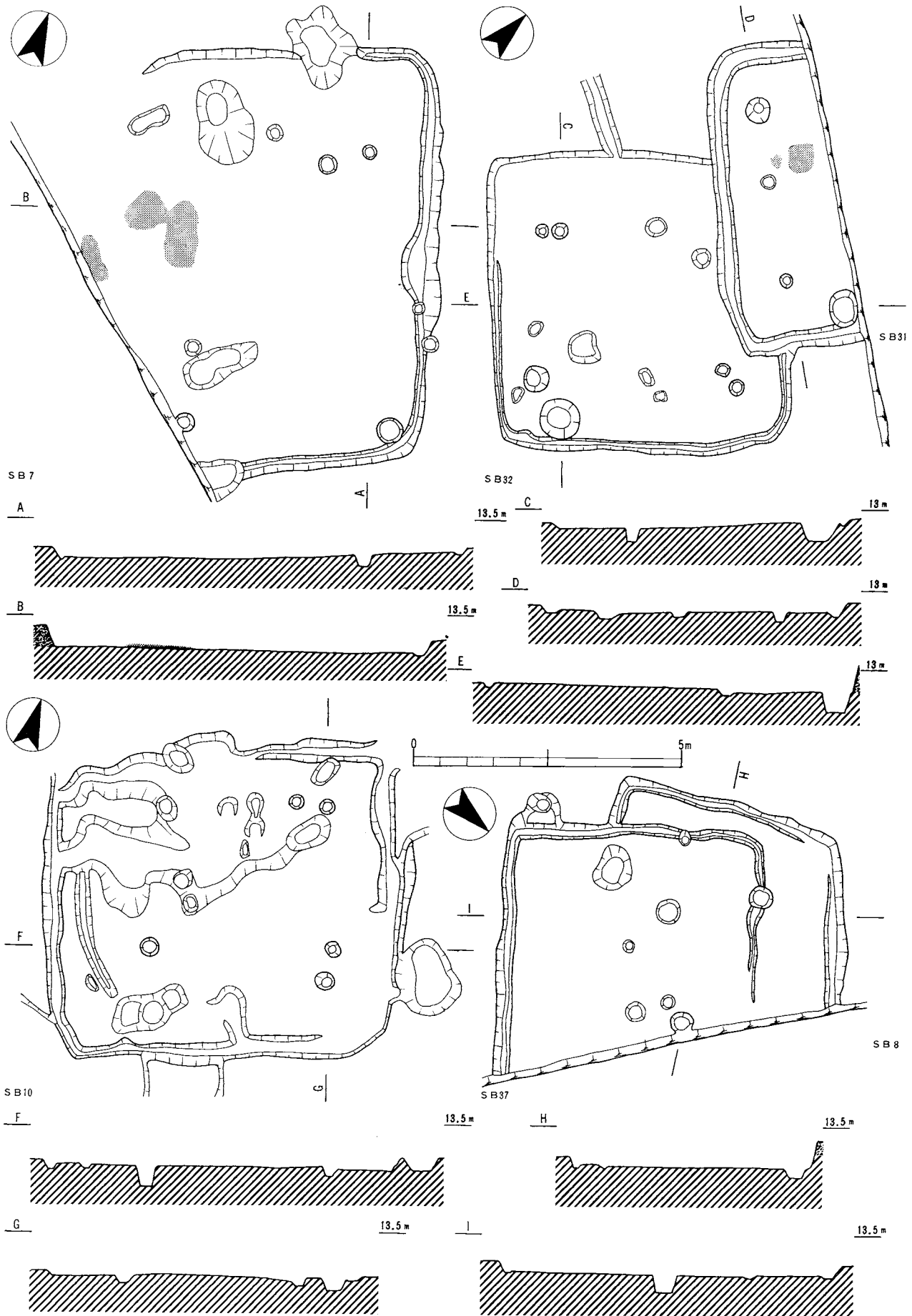
**S B 11** 西周壁は不明であり、北周壁も一部が東隅に残るのみであるが、南及び東周壁の残存によって規模が5.2m四方のものと判明する。南壁際、南隅寄りに炭化材らしいものが残存し、その周囲で土器は検出された。また、東壁際、南隅寄りに検出された0.9m×1.0m、深さ20cmの方形土壇は貯蔵穴であろう。

**S B 31** S B 32の北隅部分と重複するが周壁もしっかり残り、重複部分にも幅30cmの周溝が検出されて、東西方向の長さ5.7mの規模を有するものである。南東隅と南西隅に対応する形でピットがあくが支柱穴であろう。床面には焼土が2ヶ所に認められた。東壁際、南東隅寄りに0.5m×0.7m、深さ40cmの楕円形をしたピットを有し、貯蔵穴と考えられる。

**S B 32** 北隅がS B 31との重複により不明確なものの、本遺跡においてほぼ平面形の全容が把握された数少ない弥生時代の竪穴住居址。平面規模は5.6m×5.7mを有し、正方形プランとなる。周壁は北壁の大半を除いて四周の大部分に残存するが、それも壁面といえる確固としたものではなく、削平されてしまってわずかな高さを有するにすぎない。周壁際には幅20～30cm、深さ約10cmの周溝がめぐると、南壁中央辺りより西壁際には検出されなかった。北隅を除いて他の住居址隅にはそれぞれ径30～50cm、深さ25cmほどのピットがあくが支柱穴と考えられる。なお、東壁際、南隅寄りの径1.3m、深さ40cmの円形ピットは貯蔵穴であろう。

**S B 33** S B 4の北に南隅部分のみが検出されたもので、方形竪穴住居址の一部と推定され





る以外は規模等不明である。

**S B 34** S B 5、S B 6、S B 35と重複し、S B 5の西周壁に平行する浅い周溝の残存により、南北方向の一辺の長さが6mの規模を有する方形竪穴住居址と判明した。

**S B 35** 周溝をもつ南と西の周壁の一部を検出したのみで、大部分は発掘区外に埋没して規模等は不明。西壁に接して径60cm、深さ30cmの貯蔵穴をもつ。

**S B 37** S B 8・S B 39と重複して西壁は消失してはいるが、周溝の残存により南北方向4.9mの規模を有する方形竪穴住居址と判明した。なお、東西方向の計測は不能であるが、平面規模において南北方向よりも大きくなる。

**S B 38** 「コ」の字形に周溝が残存するもので、東西方向4.1mの規模を有するが、南北規模は不明。東と西の隅に径25cmの主柱穴を有し、柱穴間2.5mを計る。

**S B 41** 地山面が15～20cmほど鉤形に落ち込んでいたところより方形竪穴住居址と推定したものであり、S B 3、S B 10と重複する。なお、西隣りにも方形状の地山面の落ち込みがあって住居址かも知れない。

**S B 43** 中央を後世のS D 12により切られるが、東及び西隅の残存により、東西方向4.2mを計る方形竪穴住居址と推定したものである。周溝はなく、No.72・73・75の土器が一括東隅部分で検出された。

**S B 44** 鉤形に曲がる深さ10cm前後の周溝が残存し、しかも周溝の方向がS B 45の周壁方向と同方向であるところから壁穴住居址の東隅部分と推定した。なお、南側周溝中よりNo.77土器が出土した。

**S B 45** 東、西、北の三方の周壁を検出。東周壁は地山の落ち込みが10cm以下と浅く、明確さを欠くが、西、北壁は確固としており、北壁際には周溝の一部が残る。東西方向の規模5mを有し、隅丸の形状をなす。

## (2)方形周溝址

**S X 14** 西側周溝と南側周溝の一部を検出したのみで、方形周溝址全体の $\frac{1}{4}$ 程度を発掘したに過ぎない。残り $\frac{3}{4}$ は発掘区外のぶどう畑下に埋没している。規模については西側周溝の長さ7.4m、周溝肩幅80～90cm、同底幅40～60cmを測り、周溝断面は西側中央部で逆梯形を呈する。地山全体が西から東へ低くなり、しかも周溝底は東から西へと深くなって南西隅部分で浅くなるため、西側周溝中央部分が30cm前後と深く、南側周溝は10cm前後と浅い。南側は地山を掘り切って周溝が発掘外にそのまま延びず、掘り切らない陸橋部分を見せている。土器は西側周溝中央から南西隅部分にかけて、溝底より遊離して周溝の肩の高さほどのところから一括して出土した。

**S X 19** 全体の $\frac{2}{3}$ ほどを発掘したが、残る部分は発掘区外へ及んでいる。北側周溝に当る部分が発掘区全体の中でも最も地山面が下がる場所であり、それから発掘区東端部へいくに従い地山面は高くなる。ために北側周溝の地山の肩は南側のそれよりも30cm前後低い。また、北側周

溝は礫をほとんど含まない赤褐色を呈した粘質の地山に切り込んでいるのに対し、南隅部分から南側周溝の部分は多量の砂礫を含む赤褐色土が地山をなす。従って、西及び南側周溝の肩及び底を明確に検出できない上に、周溝は浅い。南北間の長さ10.6m、周溝肩幅1.4m～1.8m、同底幅0.6～1.0m、深さは北側周溝より西側周溝にかけて50cmと深く、南側周溝は15～20cmと浅くなる。なお、14N区で南側周溝は消滅するがS X 14及びS X 23の例からして、陸橋部分をなすためによると考えられる。土器は17S区西隅部分の周溝内に集中し、いずれも溝底より遊離した状態はS X 14と同様であり、遺棄したものが堆積した状況であった。

**S X 23** 後代のS K 21、S K 25、S K 26により周溝の壁が崩されたりしているが、方形に溝がめぐる原状は良く残っていた。S X 14、S X 19と同様、西半部分を発掘したのみで全貌は不明。南北間の長さ9.2m、周溝肩幅0.9～1.1m、同底幅40～70cm、深さ—北側周溝より南側にいくに従い深くなる—20～40cmの規模を有する。陸橋部分は南側にある。土器は北側周溝内に溝底より離れて周溝の肩の高さほどのところよりほとんど出土した。うち、No.109・110、112～118は一括土器である。

**S X 29** 最も東端で、しかも発掘区中最も高い所にあるもので、発掘したのは東半部分のみである。地山が多量に砂礫を含んでいるため、周溝肩及び底を明確に検出することは不可能であった。そこをもって時期不明の深い方形土壇をはじめとした大小のピットで荒されて一見した限りでは方形周溝址と即断は出来ない。規模については南北間の長さ18m、周溝肩幅2.5～3.5m、同底幅1.0～1.7m、深さ20～30cmを測り、前三者と比較して大きく、周溝は浅い。11S区の周溝内壁際でNo.120・121の土器を検出した。

### (3)壺 棺

**S X 22** S X 19の西側周溝中央の外肩部分で検出。径80cm、深さ30～40cmの円形ピット状の墓壇を掘り、口縁部を欠いた壺形土器(107)を置き、蓋として上半を欠いた壺形土器(108)を逆さにしてかぶせていた。骨及び副葬品はなかったが土器の出土状態からいって小児用の壺棺と判断した。

## 2. 平安時代の遺構

出土土器より推定して平安時代に属すると考えられる遺構には方形竪穴住居址3棟、掘立柱建物址5棟、厨房址と思われる方形小竪穴址2基、土壇4基がある。この時期の遺構の大半は発掘区でも最も地山面が下がる17区から28区に集中し、弥生時代の方形周溝址S X 23と重複したものもある。

### (1)竪穴住居址

**S B 13** 西より東へ少し傾斜した地山を10～15cm掘り下げた住居址。3.8×4.5mと東西方向に長く、東側を除く三方に幅20cm、深さ10cmほどの浅い周溝がめぐる。北側周壁中央に焼土が壁内から壁外にかけて見られた。竈の痕跡であろう。支柱穴は不明。住居址内の埋土中から弥生式土器片も若干量検出されたが、土師器・鉢175が床面上で出土した。土師器175の比定される時期に使用された住居址と推定される。

**S B 16** 南東隅が時期不明の溝によって切られているが、比較的原形をよく残す住居址で、5.6×5.8mの規模を有し、ほぼ方形である。地山を20cm前後掘り込んで床面としており周溝は検出されなかった。四隅に瓢箪形をしたピットがあくが、建替えによる新旧の支柱穴の接続したものと考えられる。柱穴の深さは30～40cmほどであるが南西隅の柱穴の一方は50cmと他のどれよりも深い。北側周壁中央の内側には竈跡と考えられる焼土面が0.8×1.0mの範囲で方形に広がり、そこだけが住居址床面より10cmほど高い。住居址内の埋土中からは弥生土器片を数片採取したにとどまり、この住居址を平安時代に属すると比定するには少し躊躇を感じる。しかし、竈を有することと弥生時代を除いて方形竪穴住居址を形成した時代の遺物は平安時代しか本遺跡では検出されていないことにより、平安時代の竪穴住居址と推定した。

**S B 20** S B 28と重複し、北側周壁は時期不明の東西溝と重なり合い、しかも大小ピットが床面に掘られ、原状が著しく損われているものの、北側を除く三方の周溝の残存により判明した住居址である。5.6×5.8mと平面規模はS B 16と全く同様である。砂礫を含んだ赤褐色土の地山を10～15cm掘り下げ床面とし、周溝は幅20cmほど、床面より5cmと浅い。支柱穴は不明。北側周壁中央よりやや東寄りの周壁内に径50cmの円形の焼土面が見られ、土師器182・183が出土した。

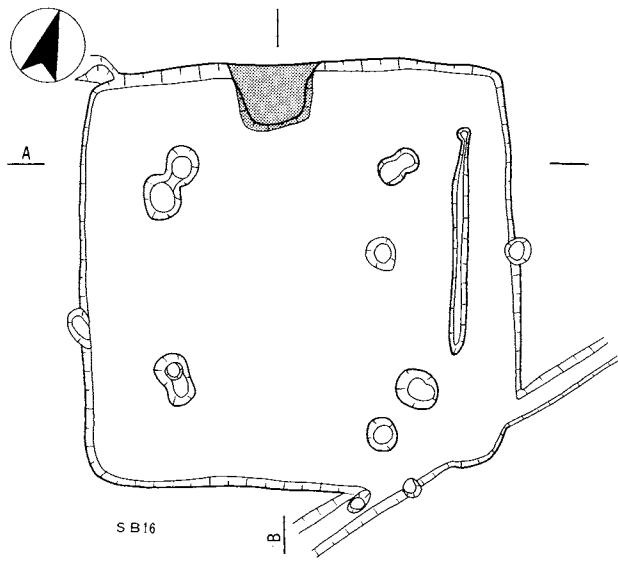
## (2)掘立柱建物址

**S B 15** 2間×3間の建物址。桁行柱間2.1m、梁行柱間2.1mと柱間はすべて等間隔。梁行中央柱穴のみ隅柱を結ぶ線より外へ張り出す。柱穴はほぼ同大で、径50cmほどの円形をなし、深さは35～40cmである。

**S B 17** 3間×4間の建物址。桁行柱間は不揃いで隅の柱間1.3m、中央の柱間1.8m。梁行はほぼ等間隔で柱間1.3mを測る。梁行北側の中央の柱穴のみ外へ張り出す。柱穴は小さいもので径40cm、大きいもので径60cmのものもあるが、ほとんどは径50cmの円形のものであり、50～60cmと深く、確固とした柱穴である。

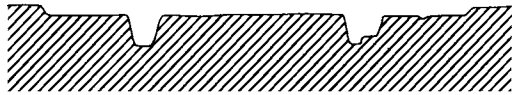
**S B 36** 2間×4間の建物址。南東隅の隅柱が不明であり、梁行南側中央の柱穴もやや西に寄っているが、桁行柱間は1.1mと等間である。梁行柱間は1.5mであるが柱穴は不揃い。柱穴は径30cmの円形のものがほとんどであり、深さ20cmと浅く、S B 15、S B 17の柱穴と比較して小さい。

**S B 39** 南側の一部を検出したのみで、梁行2間、桁行は不明。S B 8、S B 37の竪穴住居址と重複している。梁行柱間1.8m、一部の桁行の柱間2.1mと柱間は概して長い。柱穴は径40cm

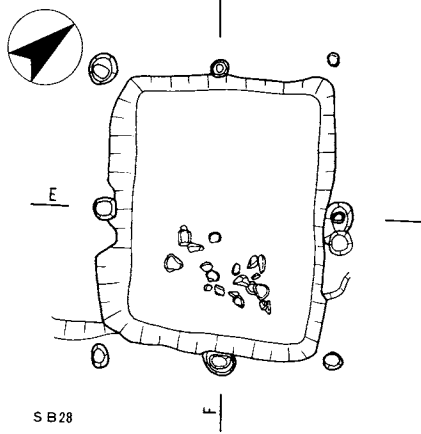


SB16

A 12.5 m



B 12.5 m

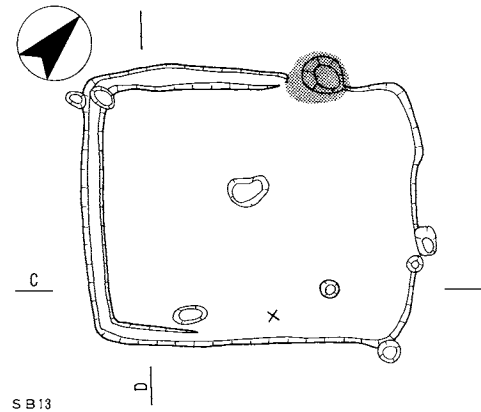


SB28

E 13.5 m

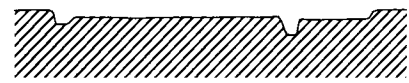


F 13.5 m

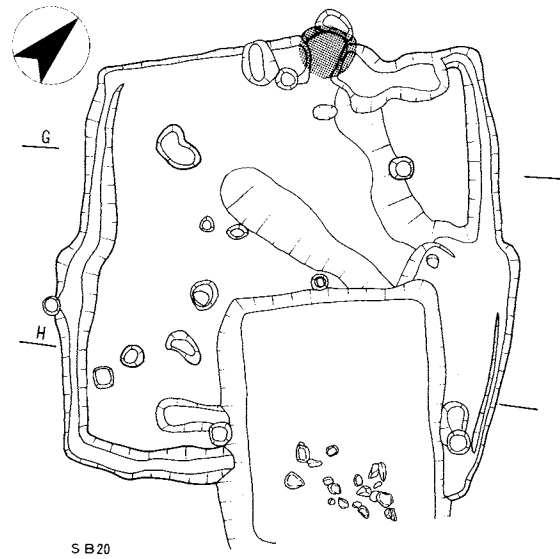
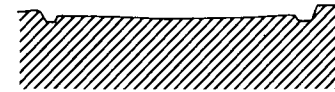


SB13

C 13 m

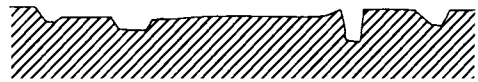


D 13 m

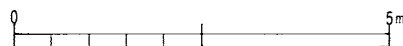


SB20

G 13.5 m



H 13.5 m



前後の円形をなし、深さは20～30cm。

**S B 47** 建物址の北東部が検出されたもので全体規模は不明。梁行2間で、その柱間2.2m、桁行の柱間の一部は1.6m。柱穴は径50～60cmの円形、深さ30cm前後と径の割には浅い。なお、北隅柱穴の底に土師器甕173の完器が埋没していたし、その隣の桁行柱穴の上部からも土師器甕174が検出された。

### (3) 方形竪穴址

**S K 25** 平面規模が2.2×2.9mと南北に長い長方形の竪穴址で、S X 23の西側周溝の外壁を一部切り込んでつくっている。床面は平坦で地山の肩より40cmほど下がる。西隅は溝状土壇で切られる。東側の壁が消滅する部分に竪穴内から竪穴外—S X 23の溝底—に径1.2mの円形の焼土面の広がり認められ、焼土とともに土師器甕及び皿類が検出された。

**S K 26** S X 23の南側周溝を切って南北方向に長くつくられたもので、中央東西方向にS X 23の南側周溝の溝底部分が痕跡として残る。また北西隅の一部も他の土壇と重なり不明確となるし、南壁もS X 19の北側周溝の壁と重複する。規模は1.4×3.0m、深さ30～40cmで床面は南から北へと少し傾斜する。南壁中央よりやや、東寄りの壁内外に焼土面が見られ、焼土中及びその周囲の黒色土中に木炭片とともに土師器、須恵器片を検出した。

### (4) 土壇

**S K 18** 発掘外に広がるため、規模は不明であるが幅1.7m、深さ約10cmの浅い土壇。埋土中より火打鎌、刀子、釘などの鉄製品が出土した。

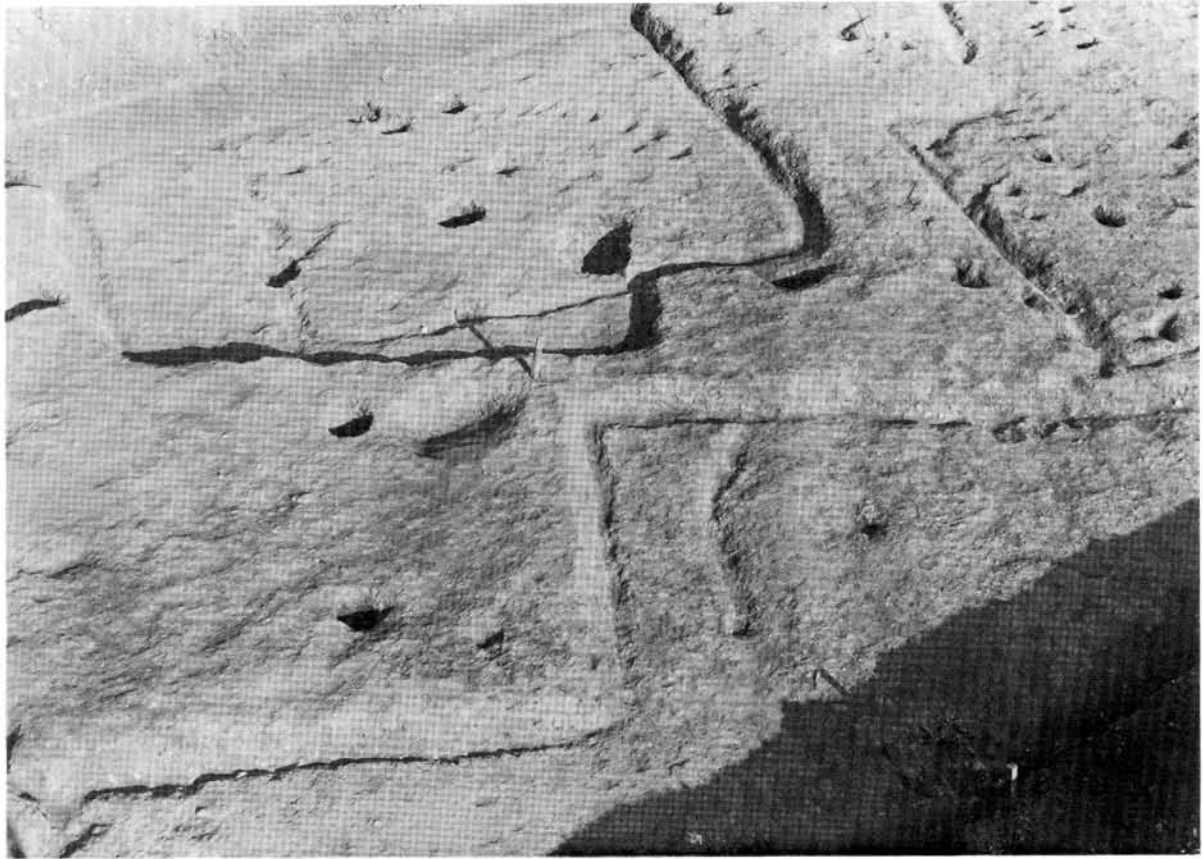
**S K 21** 1.5×1.7mと少し東西に長い、隅丸方形のもので、S X 23の西側周溝の外壁を切っている。2段の階段状に掘られており、先ず30cm掘り下げて平坦面をつくり、さらにそこより35cmほど舟底状に下げて壇底としている。黒色土が底近くまで埋まり、底には黄褐色粘質土が薄く積っていた。いずれの埋土層中からも同時期の土師器甕及び杯類が多数出土したし、須恵器類も若干量あった。また、黒色土中からは緑釉陶器片も1片検出された。

**S K 24** 1.5×2.5mの楕円状の平面形を呈し、東壁はS K 26の東壁の延長上にあり、南壁は土壇が複雑に重複するためか、一部は壊されて消失している。地山を30cmほど掘り下げて床面としており、床面は平坦である。埋土中に若干の土師器片を検出した。

**S K 30** 1.1×2.2mと東西に細長い、深さ15～20cmの方形の土壇。S B 15の柱通り内にあって、大小の不整形な土壇状のものと重なり、南と北壁は不明瞭であるが北壁面の2ヶ所が焼け、木炭片も出土した。

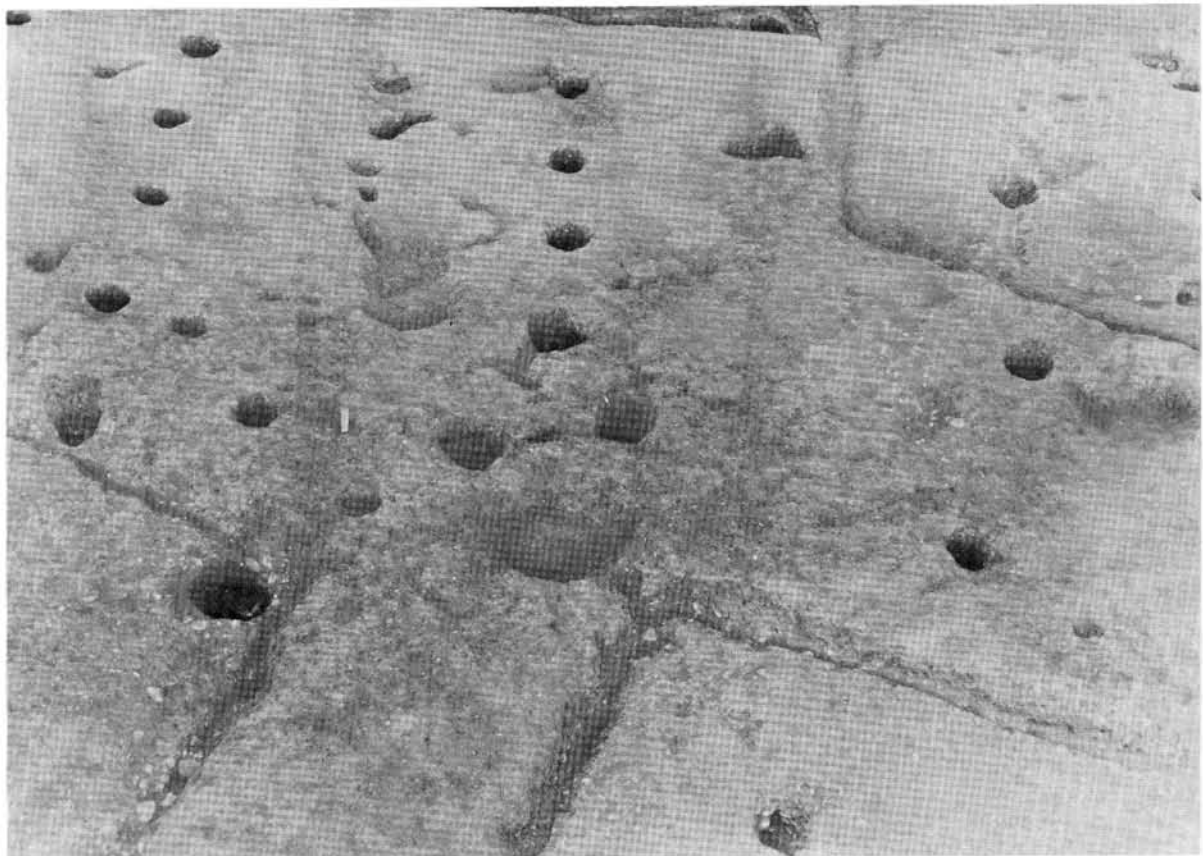
## 3. 鎌倉時代の遺構





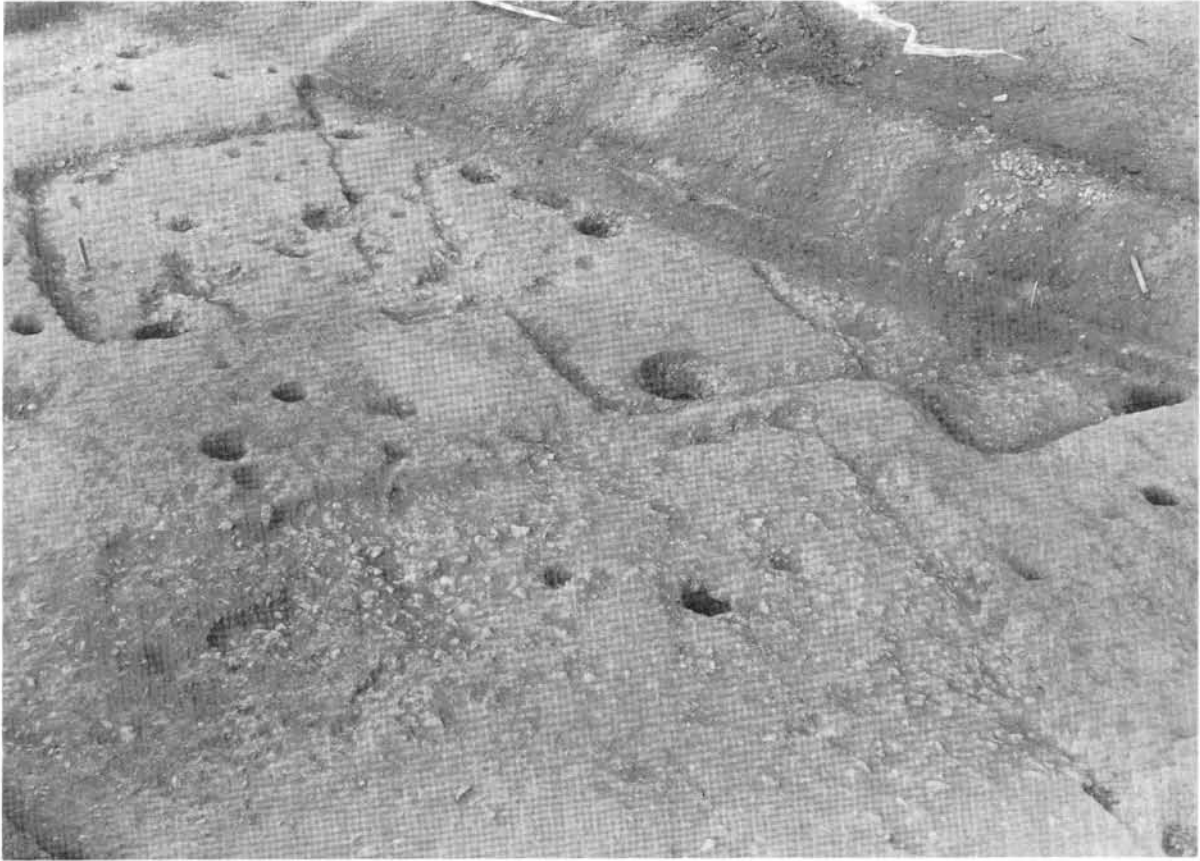
63

SB1・2・8・37~39 (北から)



64

SB1・7・8・36・39 (東から)



65

S B 5 ~ 7 ・ 34 ・ 35 (西から)



66

S B 31 ・ 32 (西から)



67

S X 19 (南から)



68

S X 23、S K 21・24・26 (北東から)





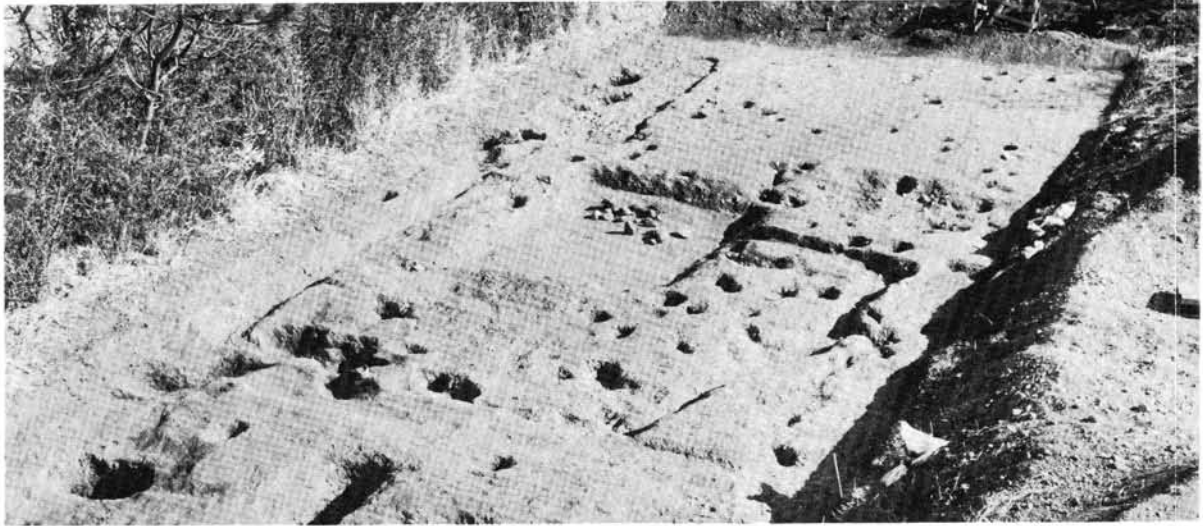
69

S B16・17 (南から)



70

S B15・16 (西から)



71

発掘区東端部（西から）



72

S B20・28（南東から）



73

S B28（南東から）

発掘区東端部分と西半部分に遺構は点在し、発掘区内に限っては遺構が集中することはない。竪穴住居址1棟、溝址1条、土壇5ヶ所を数える。

#### (1) 竪穴住居址

**S B 28** 3.0×3.7mと南北方向に長い長方形を呈する竪穴住居址。地山面を20～30cm掘り下げて平坦な床面としており、住居址南半の床面上には10～20cm大の角礫が散乱し、その間に土師器鍋片及び山茶碗が出土した。主柱穴は竪穴内床面にはなく、周壁に沿った外周に相対する形で8ヶ所検出した。それぞれの柱穴は径20～30cmの円形のもので、20cm以下と浅く、柱穴の底に礫を入れて柱の土台石としていた。南北方向の柱間は1.9m、東西は1.6mとそれぞれの柱間は等間である。

#### (2) 溝 址

**S D 12** 発掘区を横断する形で、N37°Eの方向に延びる幅1.6～1.8mの溝址で、弥生時代の竪穴住居址S B 43の周壁を崩している。溝址は20～30cmと浅く、断面は短形を呈す。溝内から山茶碗片口及び土師器鍋などが出土した。

#### (3) 土 壇

**S K 27** S B 20の北隅を切る、細長くて不整形な溝状を呈するもので幅60～80cm、深さ30～40cmを測る。

**S K 42** SB11の北東隅に接する、2.0×2.5mの方形土壇で、東西方向に長く、深さ10cmと浅い。

**S K 46** 方形土壇のようであるが、一部を検出したのみで規模は不明。10～15cmと浅い。

**S K 49** S D 12に続く幅1.0m、長さ2.8m、深さ10cmの細長い土壇である。

**S K 50** 幅1.6mの方形の土壇であるが、発掘外に広がるため規模は不明。深さは25cmほど。南側に径1mの円形ピットがあき、土壇を不明瞭なものにしている。

## III 遺 物

### 1. 弥生時代の遺物

#### (1) 土器の形態区分

方形周溝址及び竪穴住居址の遺構埋土中より出土したものが大半を占め、遺構に伴わずに地山を被覆する土層中より出土した土器もかなりの量になり、合せて整理箱にして100箱になる。遺構

のうちでも、SB2・SB9・SB10・SB11・SB31・SB43・SB45・SX14・SX19・SX23からの土器量は他の遺構内から出た土器量よりもはるかに多く、しかも器種にも富み、一括して出土することが多かった。器種としては、壺・甕・高杯が圧倒的に多く、他に鉢類が少しある。これらの土器は伊勢湾西岸から東岸地域、さらには三河地方に分布する、弥生時代末の欠山式土器の範疇に属するものである。これから出土土器を遺構別に概観するが、記述の便宜上、器形の特徴により広口壺を6類、長頸壺を2類、甕を4類、高杯を5類に、それぞれつぎのように分類した。

**広口壺A** 「く」の字形に強く外反する口頸部をもち、体部は球形状に張る。この類には頸部に凸帯がめぐるA<sub>1</sub>、同様に凸帯を有し、A<sub>1</sub>より器形が一段と大きくなり、器壁も厚くなるA<sub>2</sub>、凸帯を有さず口端部が無文化したA<sub>3</sub>に細分できる。

**広口壺B** Aと同様に口縁部が「く」の字形に外反するものであるが、外反の程度が弱くなり、口頸部が長くなる。通常、口端部に篋圧痕文ないしは列点文が施されるが、無文のものもある。

**広口壺C** 口端部の特徴はAと同様であるが、Aよりも器形が小形化し、口径が10cm前後のもので、口端に烈点文が施される場合が多い。

**広口壺D** 口縁部が二重になるもの。2例のみで、文様は施されない。

**広口壺E** 口縁部が単純に、逆「ハ」の字形に開き、文様は施されない。

**広口壺F** 内彎気味に立つ、無文の口縁部を有するもの。

**長頸壺A** 口頸部の長さと同様の高さがほぼ同じ数値を示し、口頸部は径が体部最大径を上まわるほど大きく開く。体部肩から頸部にかけて櫛描横線文が施されることが多い。

**長頸壺B** 器形が瓢形をなすもので、Aと比較して口頸部が袋状を呈し、著しく小さい。口頸部から体部上半に孤状列点文を施すものがある。

**高杯A** もっとも大形の高杯で、脚部の高さと同様の深さがほぼ同じあり、杯部は底に稜線が入る。脚部が中ほどから裾にかけて内彎気味に開く典型的な欠山式の高杯。

**高杯B** 杯部はAと同様な深さをもつが、底部の稜線は不明瞭になる。脚部はAと比較して小形化し、しかも直線的に開く。

**高杯C** A・Bよりも杯部が一段と浅く、口縁部の外反の程度も大きい。脚部はBと同様のC<sub>1</sub>と、脚裾が反り、脚高の割には大きく開くC<sub>2</sub>とがある。

**高杯D** もっとも小形のもので、杯部はA～Cに存した底の稜線が消滅し、丸味をもった椀形になる。脚部は、口径に匹敵もしくは凌駕するほどに裾が大きく開く。その開き方も、滑らかに開くD<sub>1</sub>と、透孔のあたりで屈曲するように開くD<sub>2</sub>とがある。

**高杯E** 完形なものはなく、いずれも脚部ばかりであるが、A～Dよりも脚部が長いのが特徴であり、2～3段の櫛描横線文が脚筒部に施されるのが普通である。寄道式土器の系譜をひくものであろう。

- 甕A** 単純に「く」の字形に開く短い口頸部をもつ。
- 甕B** 二重口縁ではあるが、口端が直立もしくは内傾する。
- 甕C** 口縁部が二重口縁となり、S字状を呈する。
- 甕D** 二重口縁で、口端が断面三角形を呈し直立する。

## (2)遺構別出土土器

**S B 2 出土土器** 1・2・7・8は39S区、S B 2の東南隅の床面上に一括出土したものであり、3・5は40S区、4・6は41S区埋土中より検出した。なお、後者4点についてはS B 1に伴う土器としての可能性もある。器種としては広口壺、高杯、甕があり、広口壺2点はA<sub>3</sub>(2)とB(1)に属するものであり、ともに刷毛目を施し、1の口端には篋による刻目文が配されている。高杯は全形の知れる3点があり、B(6)、C<sub>1</sub>(7)、D<sub>2</sub>(8)とそれぞれ器形を異にしている。6→7→8と器形が小形化し、脚裾が広がる傾向を示し、8の脚裾は透孔の部位で外へ大きく開き、口径と同じほどになっている。3点とも全体を篋で研磨して仕上げている。なお、7の脚部内面には刷毛目が施されているし、8の器面には媒が付着していた。甕はA(3)、D(4)とがあり、3には媒が器面に付着し、内面は篋削りしている。5は小形甕の類であろうか、器面には胎土の巻き上げ痕が残り、整形は雑である。

**S B 3 出土土器** 埋土中より検出したもので、広口壺B(9・10)、甕A(11・12)があり、9・10の口端は下へ肥厚し、篋先端による刻目文が施されている。13・14は高杯の脚部であり、全形は不明。

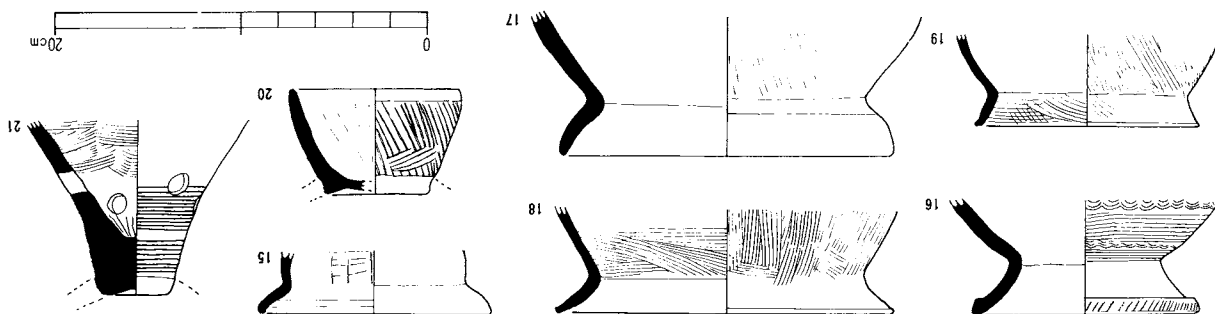
**S B 4 出土土器** 土器はすべて埋土中より出土、広口壺C(16)、甕A(17~19)及び甕の脚台(20)、高杯(21)、鉢(15)がある。16は口端に櫛描列点文、肩部分に横線文と波状文が交互に配された小形の広口壺である。甕は口縁部の破片で見るとかぎり二重口縁を有するものがなく、単純に開くAばかりでいずれも器面には刷毛目が施されている。ただ、脚台20は甕Aにつく脚台ではなく、甕B・Cにつくものであろうか。15は最大径が口縁部にあって、体部の張らない器形で鉢と考えられる。21のような高杯の出土は今回の調査では1点のみである。直線的に開く脚部は、高杯の大半を占めるA~Dよりも器壁も厚く、二段三方に透孔をもつことも特徴的である。

**S B 5 出土土器** S B 5は東壁部分がS B 6、S B 34と重複しているが、その部分で土器の出土量は比較的少なく、重複しない西壁寄りの部分での出土が多い。26・27・28~30は45S区、S B 5西南隅部分よりのものである。壺には広口壺と長頸壺があって、前者にはB(22~24)とC(25)があり、後者はB(26)に属するもの。23、24の口端にはそれぞれ、篋刻みによる斜格子文と、するどい篋状工具による羽状の刻目文が施される。22・23は刷毛目を口頸部に施し、24のみが丁寧に篋研磨している。26は恐らくS X 19出土の102のような器形になると思われ、口頸部と肩に孤状の列点文が2段に配されている。この種の瓢形の器形にはこの文様があるのが通例である。27は甕Dに属し、体部下半の一部を欠く。口端には篋刻目文が施され、体部から脚台に

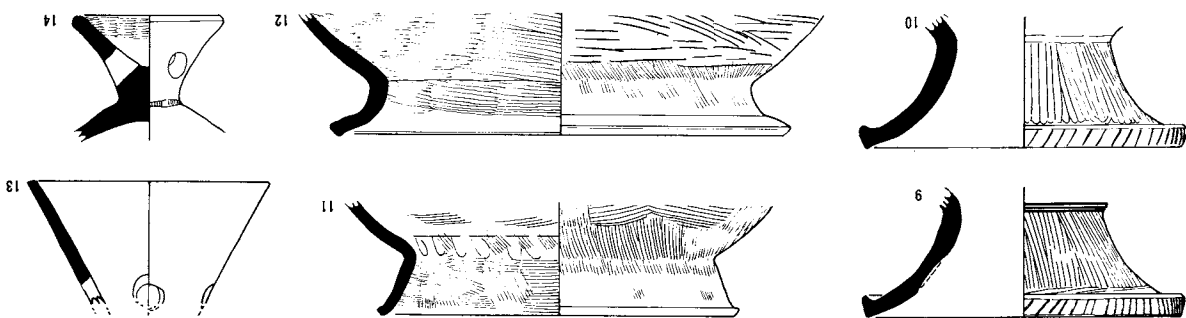


弥生土器実測図 (1 : 4)

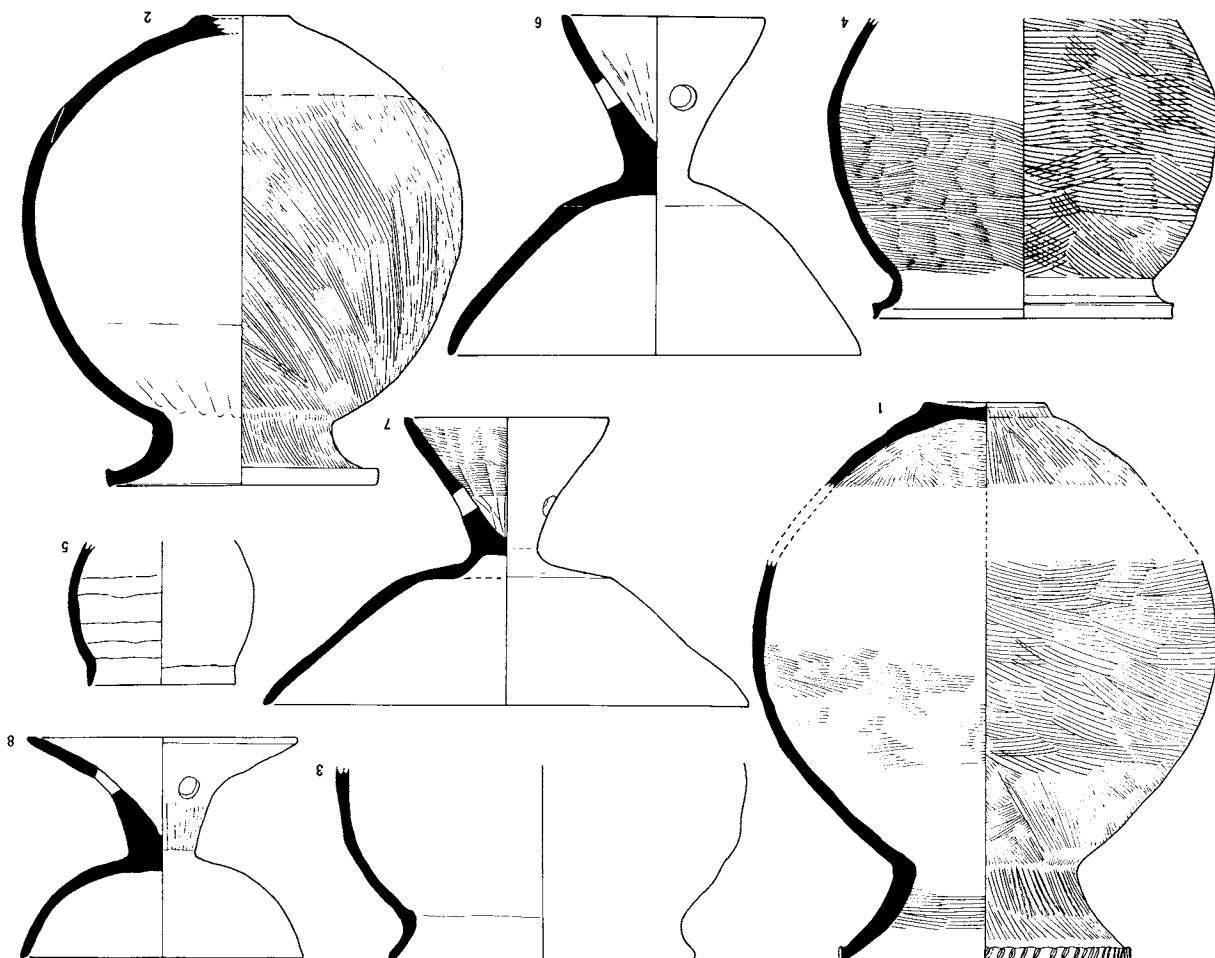
74



SB 4 (15-21)

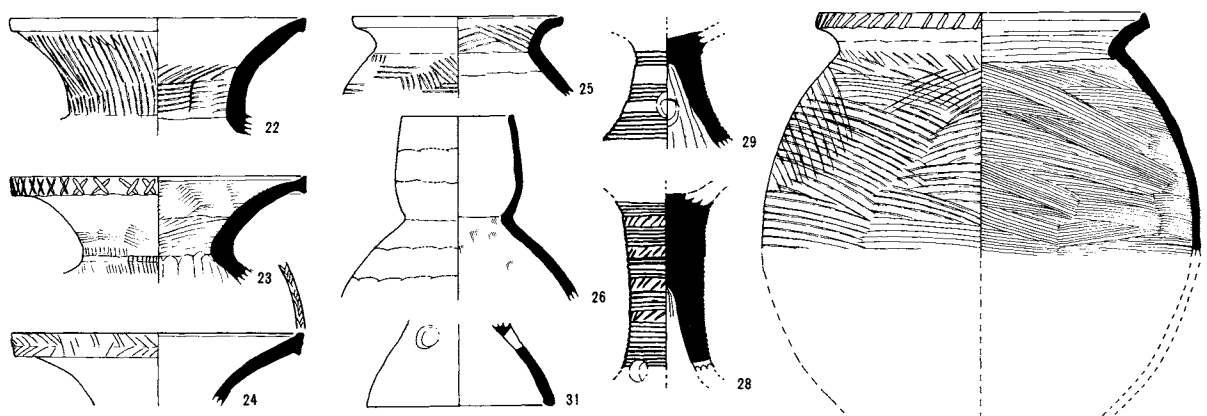


SB 3 (9-14)

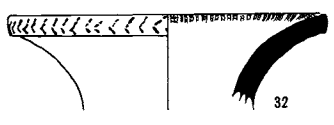


SB 2 (1-8)

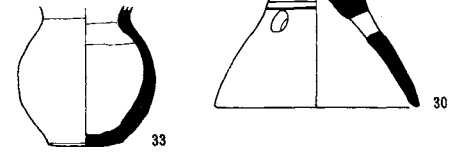
SB 5 (22~31)



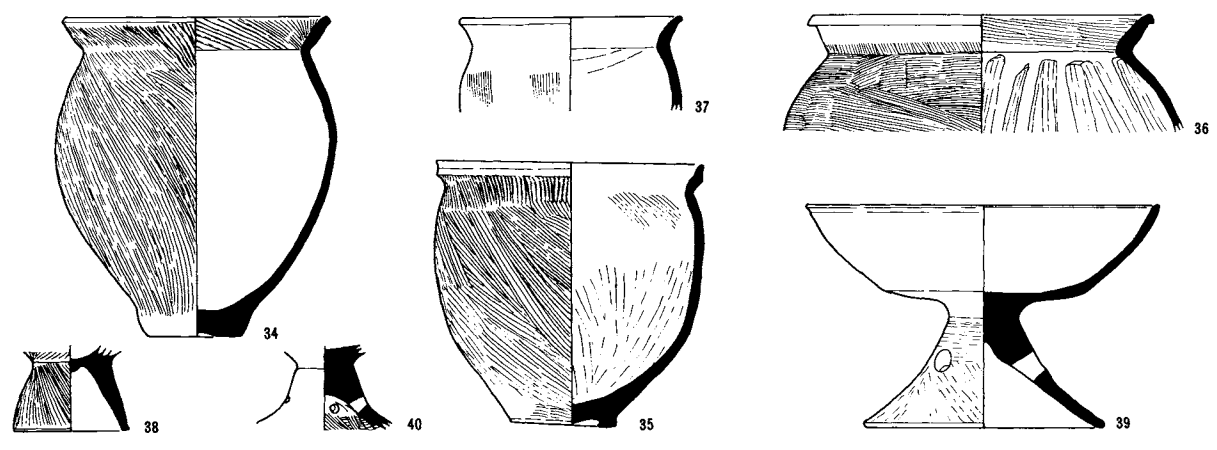
SB 7 (32)



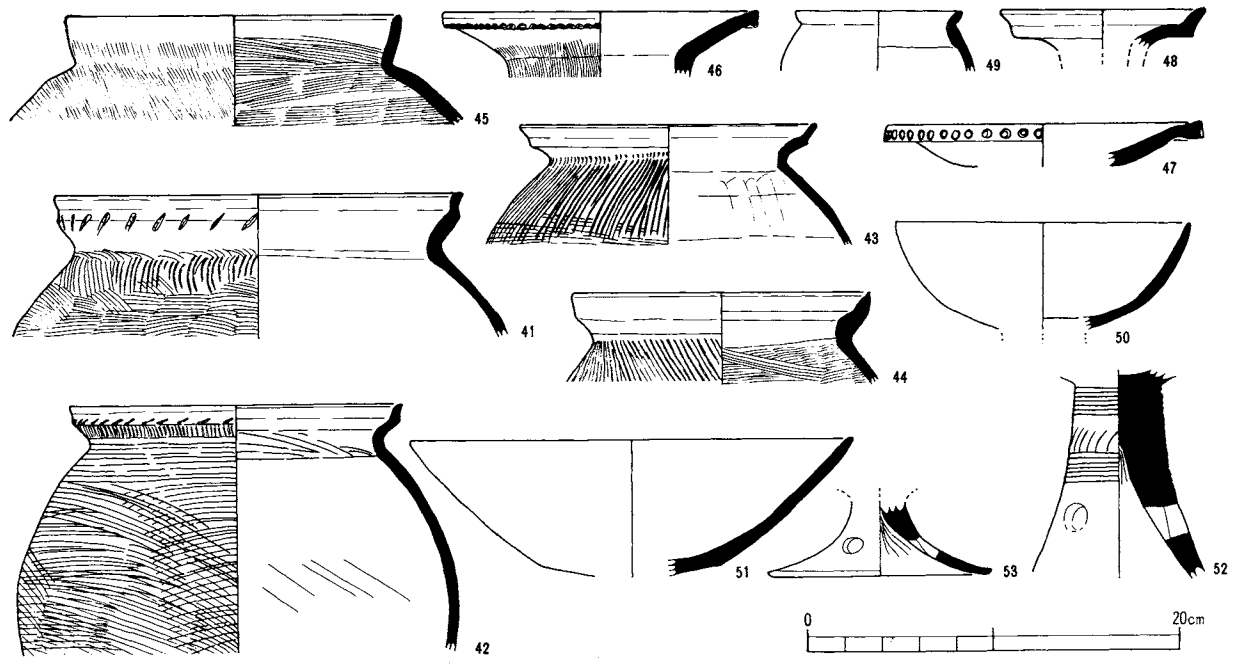
SB 8 (33)



SB 9 (34~40)



SB10 (41~53)



かけては刷毛目で仕上げている。高杯は杯部がなく、脚部のみで全形を知ることは出来ないが、28は脚筒部が長い高杯Eで、櫛による横線文と列点文とが交互に施されている。

**S B 7 出土土器** S B 7 埋土中の遺物量は少く、わずかに壺・甕があるにすぎない。壺は広口壺B (32) で、32の口端内外面には櫛描列点文が施されている。

**S B 8 出土土器** 遺物量は少い。33は口縁部を欠く平底の壺のミニチュアで、調整は全体に雑で、器形は均正がとれていない。

**S B 9 出土土器** S B 9 は南側部分でS B 10と重なり、その部分からも土器の出土量が多い。北側部分は壁も残り、竪穴住居の原形を伝えるが、その壁際から34・35が出土した。36～40の土器は前者の地点から出土したもので、S B 10に属するものも含まれるかも知れない。図示するように壺類はなく、甕・高杯のみである。高杯39はC<sub>2</sub>に属するもので、杯部が高杯A・Bに比較すると極端に浅くなり、全体に篋研磨を施している。40は脚筒部のみで、4孔の透孔をもち、高杯A～Eよりも一段と小形になったもので、この種の器形は高杯A～Eに伴って出土しているが量は少い。甕はA (34・36・37) とB (35) とがあり、34・35はともに完形品で脚台は有さず、上げ底の底部をもつ。器面には刷毛目を施し、35の体部下半の内面には篋削りによって整形した痕跡がうかがわれる。

**S B 10 出土土器** ほとんどは37N区埋土中より出土したものであるが、42・52は36N区出土のものでS B 11に属するものかも知れない。壺は広口壺B (46) 、同D(48) 以外に、口縁に竹管文を配した47のような特殊なものもある。高杯はC (51) 、D (50) 、E (52) があり、53は高杯Dの脚裾部と推定される。甕にはA (45・49) 、B (44) 、C (41～43) があり、同じ甕Cでも口端に篋による刻目文のあるもの(41・42) と横撫でのみのもの(43) との違いがある。

**S B 11 出土土器** 図示した土器はすべて西壁際周溝内より一括して出土したものである。器種には高杯と壺・鉢のミニチュアがある。高杯は杯部のみで脚部は欠失しているが、56は高杯Bに属し、底にかすかに稜線が入る。57は椀形をなす高杯Dである。篋による研磨の痕跡がよく残り、しかも施し方は繊細であって、2段の篋研磨を内面に施している。鉢55は深鉢のミニチュアで、内外面に粘土紐巻き上げの痕が残り、器面を撫でて仕上げているものの全体に粗雑な作りである。54は口縁部を欠くが、体部の張った壺のミニチュアである。整形は55同様、雑である。

**S B 31 出土土器** 貯蔵穴の周囲の埋土中より一括して出土したもので、壺・高杯・甕がある。壺は広口壺A (58・59) に属するものでともに凸帯を有する。58は今回の調査で出土した壺類の中でも最大で、口径33cm、器壁も1～2cmと厚手の作りのA<sub>2</sub>であり、口端内外面には鋭い篋状工具による羽状の刻目文が施され、肩にも櫛描文が配されている。59は頸部のみの小破片であるが、凸帯に篋による刻目文を施している。高杯(65・66)は杯部はなく脚部のみで、高杯Aに属するものであろう。65は脚筒部に横線文を施し、脚下半は刷毛目の上を荒く篋で研磨している。甕にはA (60・61) とC (62) がある。

**S B 35 出土土器** 南壁際の埋土中より出土したもので、壺・甕がある。69は広口壺Bの特長

を具えたものであるが、口端に棒状凸帯を3個1組として貼りつけ、その間に竹管文を配している。内面にも羽状に3段の篋刻目文と竹管文を施す。67は小形の長頸壺でAとBの中間器形で、口縁部は体部と比較してやゝ小さい。器面を篋で研磨して仕上げている点は73と同様である。たゞ、口縁部内面には、篋状工具で器壁を削ったのち、横撫でしたものであろうか、篋先端の圧痕が器面に放斜状に残る。

**S B 41出土土器** 出土遺物は少く、図示できるようなものは高杯70のみである。70は高杯Bの類で口径26cmと大きい、底部の稜線は不明確である。

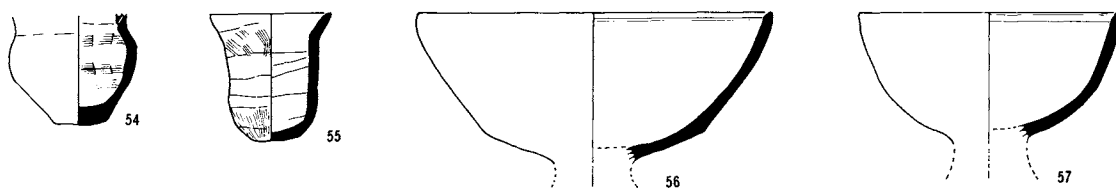
**S B 43出土土器** 床面上に一括して広口壺B(71・72)、長頸壺A(73)、高杯A(75)、それに甕脚台部(74)が出土した。72は壺類の中で最も装飾の変化に富むもので、まず口端内外面に橢描列点文を施し、頸部から肩にかけて同様な列点文、くずれた簾状文、列点文と交互に配し、最下段に竹管文を4個1組で間隔を置いてめぐらしている。この竹管文は口端内面の列点文の下にも同様に配している。多様な文様を施しているものの、施文自体は雑である。長頸壺A73は、口径と体部最大径とが同じで、体部が算盤玉形をなし、底部は上げ底となっている。このように長頸壺Aは長頸壺Bに比較して口縁部と体部が同じ大きさをもつことが特長的であり、通常、肩に橢描横線文が施され、器面全体を篋で研磨して丁寧に仕上げている。75は高杯Aに属するもので、杯部のみであるが、39W区出土の高杯125のような器形をなすものであろう。

**S B 44出土土器** 周溝中より出土した、口縁部を欠く台付壺77のみである。脚台部は高杯Bのものと同様、直線的に開く。

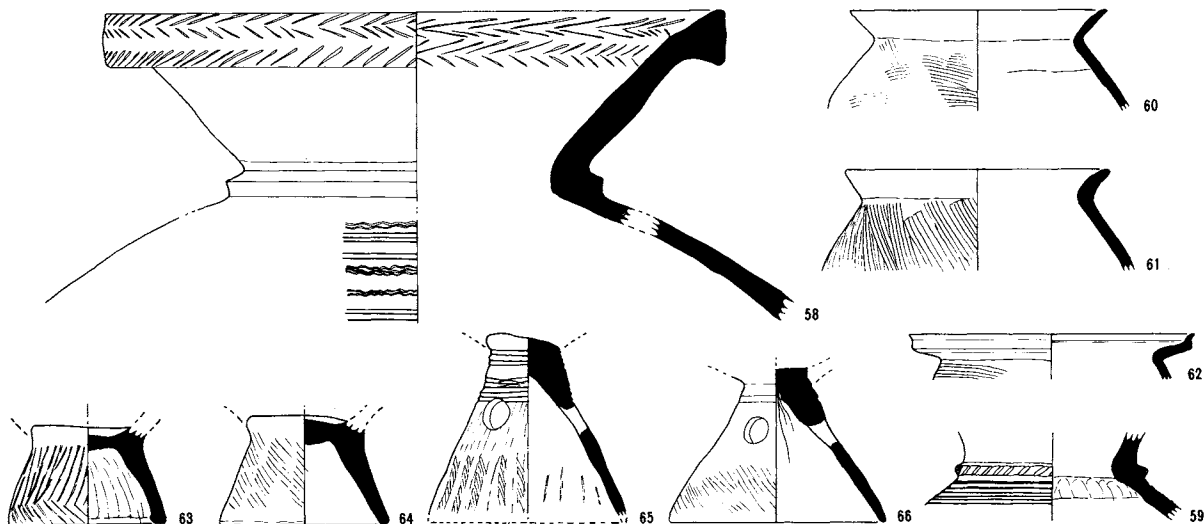
**S B 45出土土器** 床面より少し遊離して出土したものの一括品で、壺・高杯・鉢・甕がある。壺には広口壺B(78)とC(79)があり、79は口端に篋刻目文が施され、肩部分にも橢描横線文が施されていたようである。80は底部のみであるが、上げ底になっている。高杯にはA(88)、B(87)、D<sub>2</sub>(86)とがあり、脚部89はAタイプ、90はBタイプといえようか。86は口径と脚裾径とが同様の大きさで、脚部の開きが大きくなり、それに対して杯部は小さくなる傾向をもつ。S B 2高杯8と同様な器形であり、つぎの段階である古墳時代前期の古式土師器への傾斜を一段と強めた器形といえよう。甕はA(82)、C(81・83)があって、81の口端には橢描列点文が配されている。84は口縁に最大径がある鉢で、口縁の特長は甕Cと同様である。この種の鉢はこれ1点のみしか今回出土していない。

**S X 14出土土器** 溝底より遊離して西側周溝内で一括して出土したもの。広口壺と甕のみで、S X 19・S X 23と比較して出土量は少なく、高杯は含まれない。91は広口壺Eで強く体部中央が張り、撫でと刷毛目を併用して仕上げている。体部中央の器面に幅1cmの赤褐色の帯が水平に走り、仕上げ調整前に、器胎を鉢巻状に補填したことが断面で観察できる。97は体部のみで壺としての全形は不明。体部が横に張った扁球形のもので器壁も厚く、外面は刷毛目を施し、内面は篋削りを主体とした調整手法である。甕は口縁部片と脚台部のみでB(93・94)とC(92・95)とがあり、94・95には篋による刻目文が施されている。

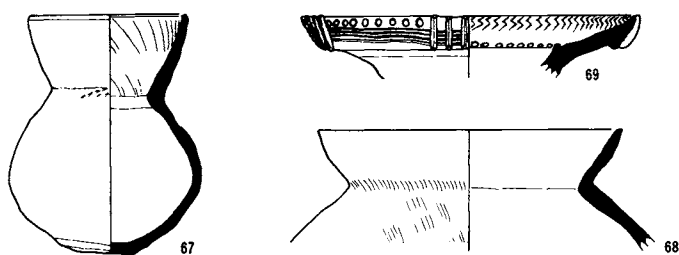
SB11 (54-57)



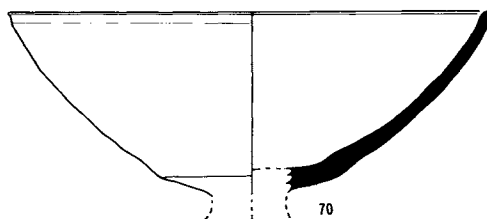
SB31 (58-66)



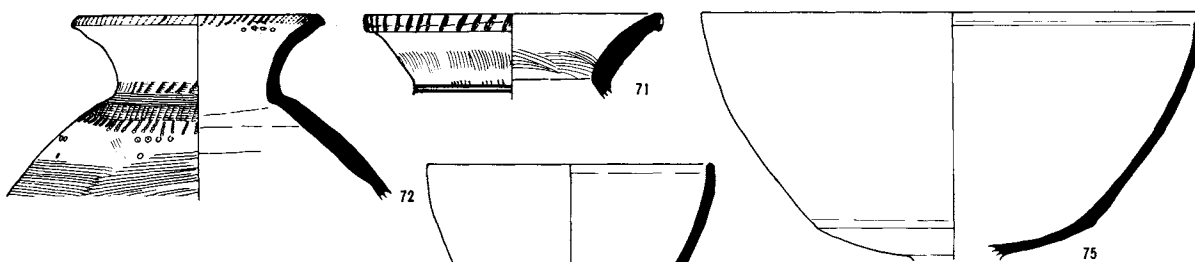
SB35 (67-70)



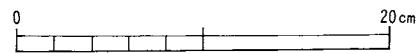
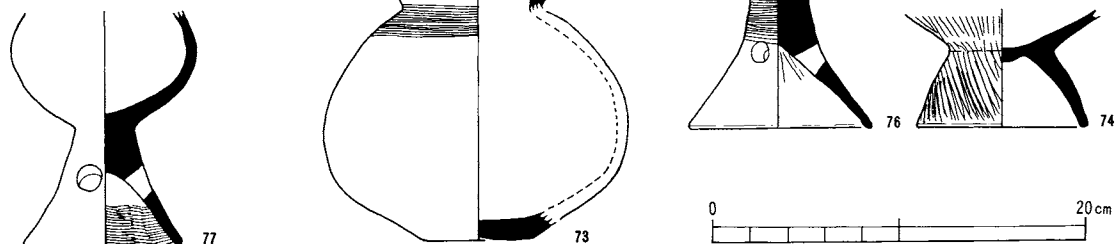
SB41 (70)



SB43 (71-76)



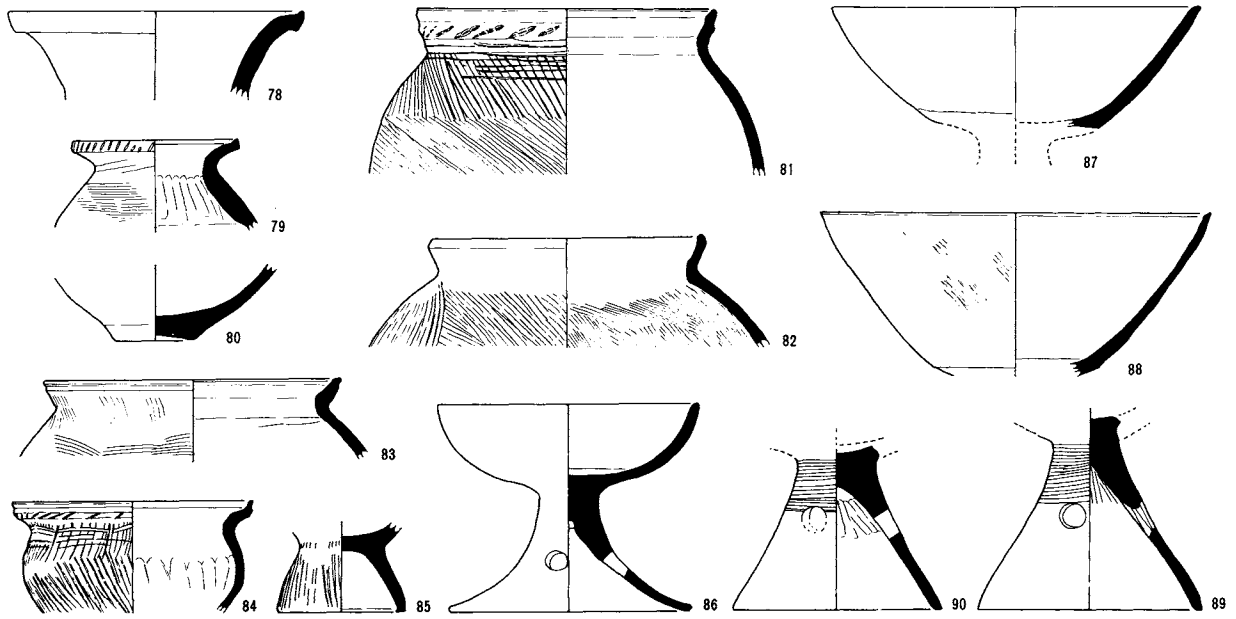
SB44 (77)



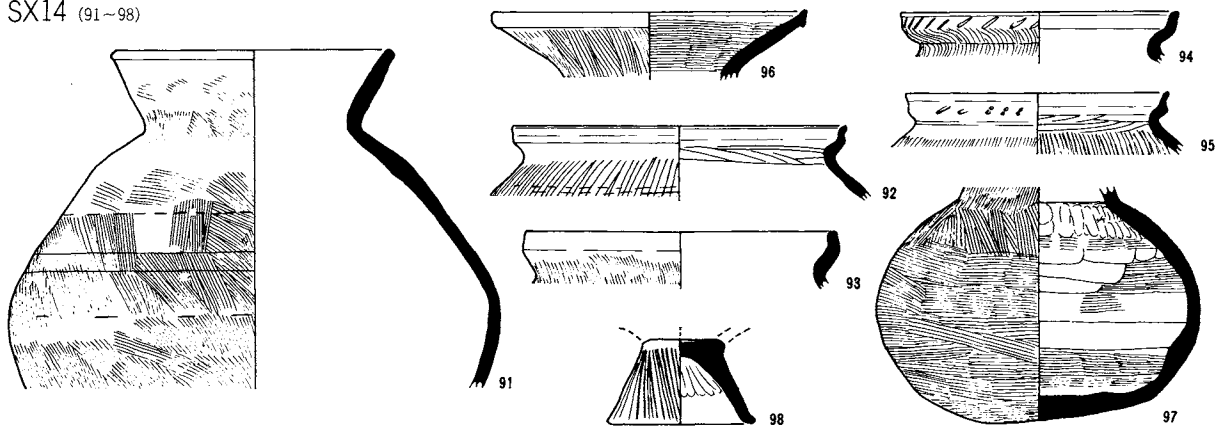
76

弥生土器実測図 (1 : 4)

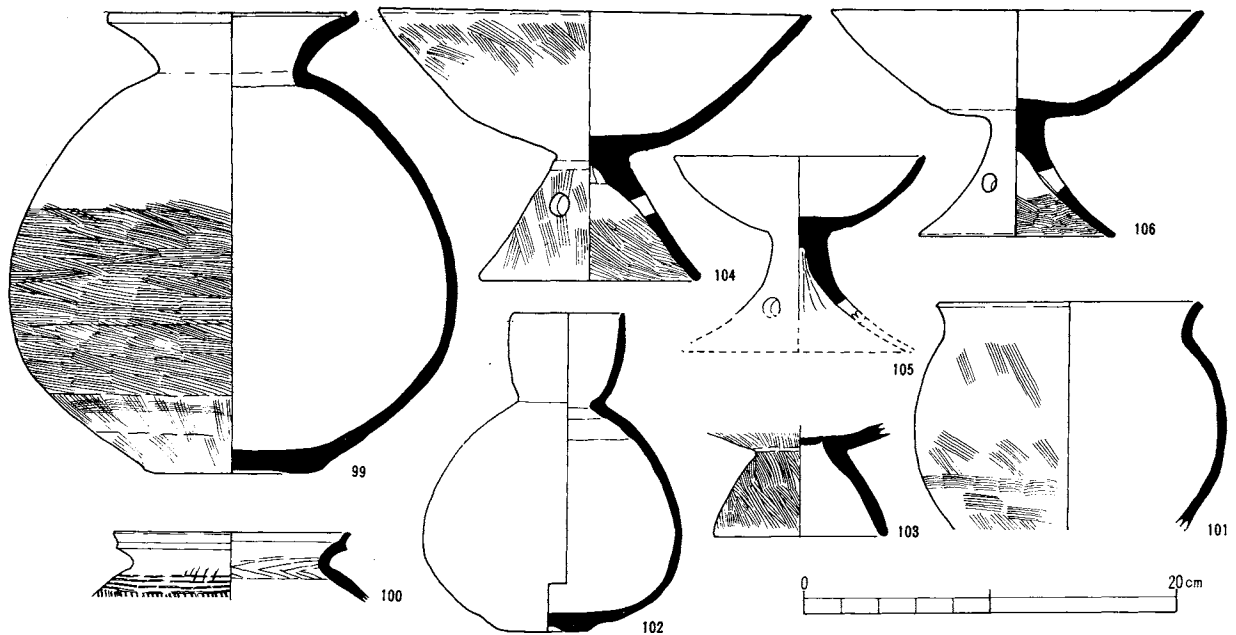
SB45 (78-90)



SX14 (91-98)



SX19 (99-106)



**S X 19出土土器** 西側周溝でも16 S 区・17 S 区に出土量が多く、北側周溝、南側周溝からの出土はない。103を除く土器すべて17 S 区西側周溝中より一括出土したものである。壺には広口壺A<sub>3</sub>(99)長形壺B(102)がある。99は重心がやや低い球形の体部を有するもので、体部下半には刷毛目が残るものの、器面がザラつき確かな調整手法は不明。102は長頸壺Aに比し、口縁部が著しく小形化し、しかも内彎しているのが特徴的である。通常この種の長頸壺には下弦孤状の刻目文が口縁部もしくは体部の肩に施されているのであるが、102は器面がザラついて磨耗しているためか、そのような文様は見られない。高杯にはC<sub>1</sub>(104)、C<sub>2</sub>(106)、D<sub>2</sub>(105)の三つのタイプのものがある。105は脚裾を欠くが、口経と脚裾の開きとが同じ大きさになる器形であり、細かな篋研磨を施している。100・101はそれぞれ甕C・Aの口縁部破片であり、101の器面には煤が付着し、内面には横方向の篋削りの痕跡が見られる。103は、円板状の胎土を上から充填して体部底とした成形技法がわかる甕脚台部である。

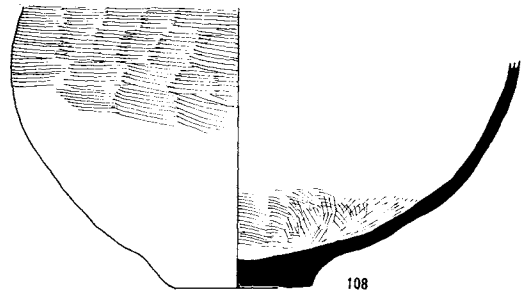
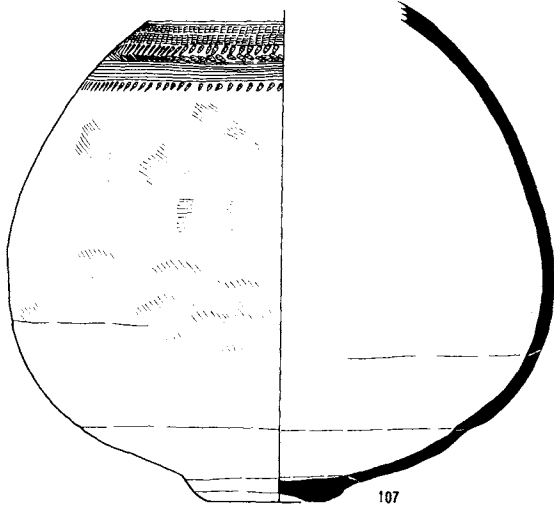
**S X 22出土土器** 107は口縁部を欠き棺身に、108は体部上半を欠き下半のみで蓋に転用し、合わせて壺棺として利用していたものである。107は現存高26.5cm、体部最大径29.5cm。体部は重心が低い無花果形をなし、上げ底の底部をもつ。肩部分にくずれた櫛描横線文と簾状文を施し、その間と下段に篋による刻目文を3段に施し、体部は篋研磨して仕上げ、全体に均整のとれた器形である。108も107と同様の器形であろうが、一部に煤が付き、刷毛目が施されたりして仕上げは雑である。

**S B 23出土土器** 北側周溝及び西側周溝内より出土。109・110・113～115・118は一括して北側周溝より検出されたものである、他は西側周溝内のものである。壺・鉢・甕・高杯があり、壺には広口壺A<sub>1</sub>(109・110)、同A<sub>3</sub>(114)、同D(111)、同F(113)がある。113は口端部の一部を除いて内外面とも刷毛目で仕上げしており、体部内面には輪積み成形の痕と思われる胎土の繋ぎ痕がほぼ水平に5段つく。この種の器形は今回の調査ではこれ1点のみである。なお、上半部を欠いた下半のみの小形壺(116)があるが、底が円板状になって張り出し、器体の一部に叩き痕がある。鉢115・117は完形品。115は体部上半と下半部に平行叩き目が残り、器体内面は上から横撫で、削り、刷毛目の順で調整を加えている。高杯にはA(119)とB(118)があり、119は脚裾径が脚高より大きく、高杯125より裾が広がる傾向を示す。甕C(112)には深く鋭い刷毛目が肩部分につき、口縁部には列点文が施されている。

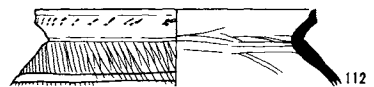
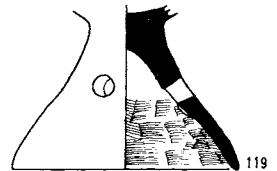
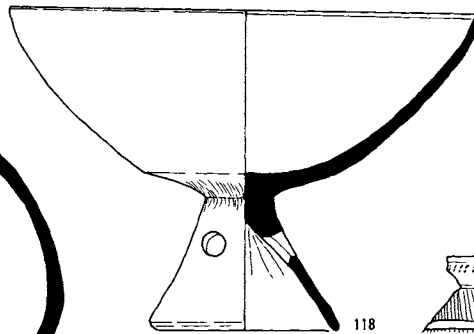
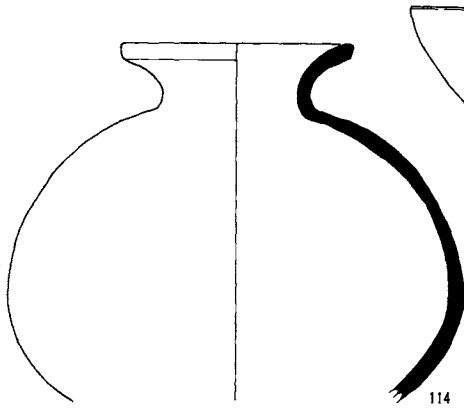
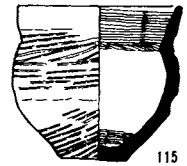
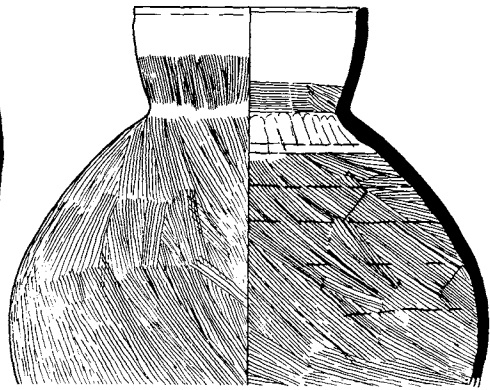
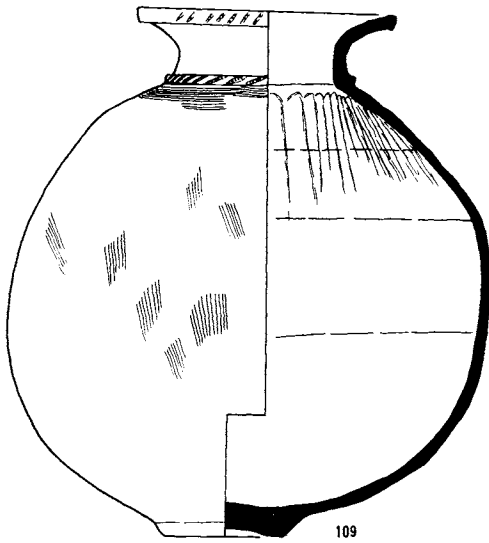
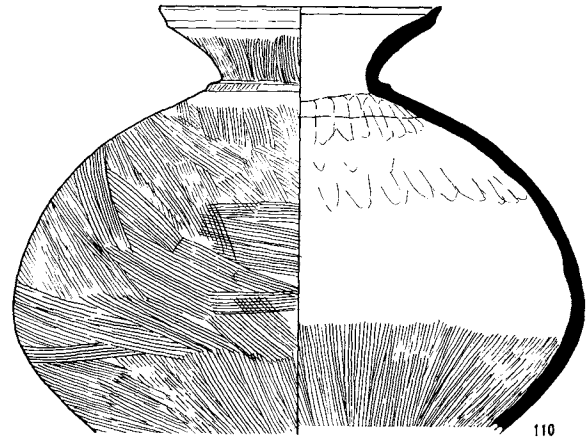
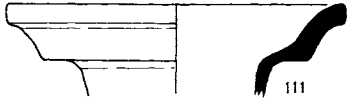
**S X 29出土土器** 広口壺A<sub>3</sub>(121)と同B(120)がある。121は脚台がつくもので、推定器高30cm前後、脚裾を欠く。体部下半に2.5×4.0cmの長円形の孔を1孔あける。焼成前か後かは不明。孔の上の部分に黒斑が大きくつき、その反対面にも黒斑が薄く残る。口縁部を横撫でし、体部上半は肩の部分に刷毛目が残る以外は篋削りした上を雑に研磨しており、下半から脚台にかけては刷毛目のみである。120は口端と頸部に刻目文がつき、体部は算盤形をなし、底部は上げ底となる。横撫でした口縁部を除いては丁寧に篋研磨している。

**遺物包含層出土土器** 遺構内出土のものと区別し、遺構上面及び遺構の存しない地山上の遺

SX22 (107~108)



SX23 (109~119)

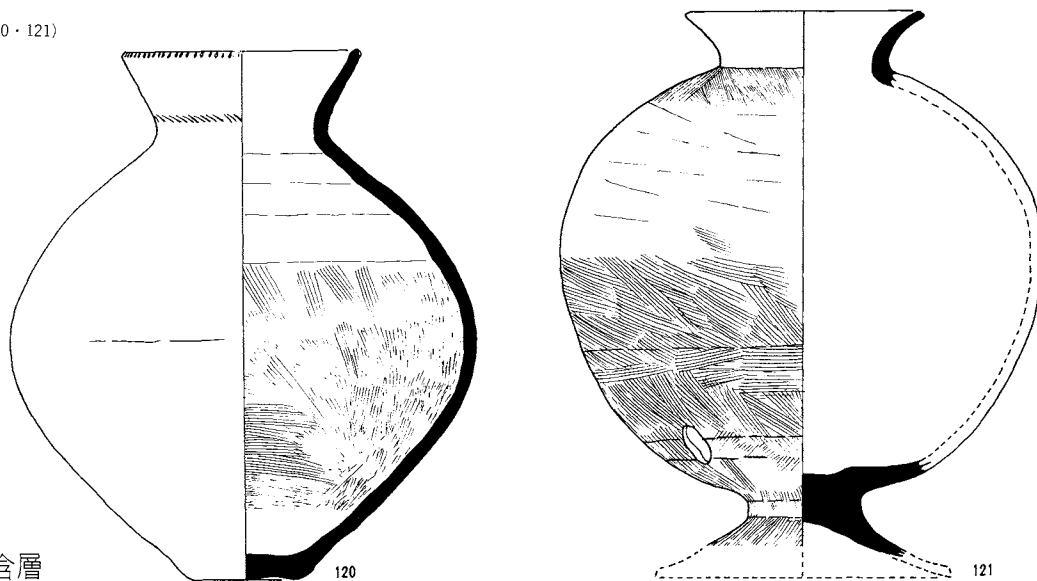


78

弥生土器実測図 (1:4)

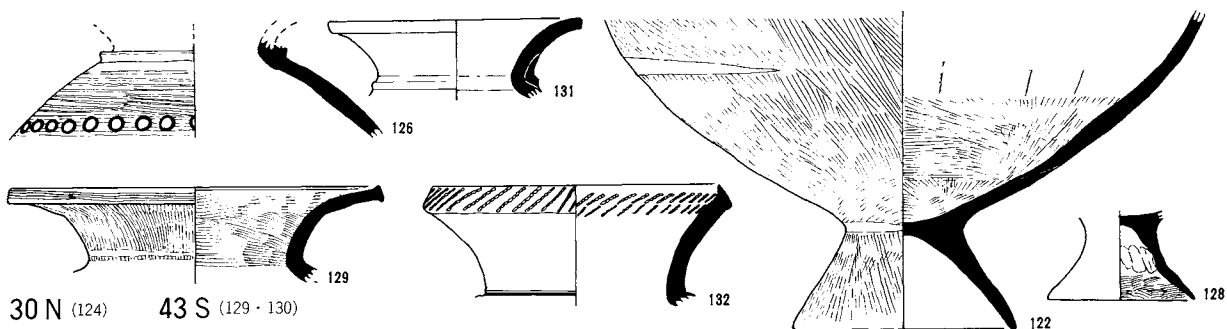


SX29 (120 · 121)

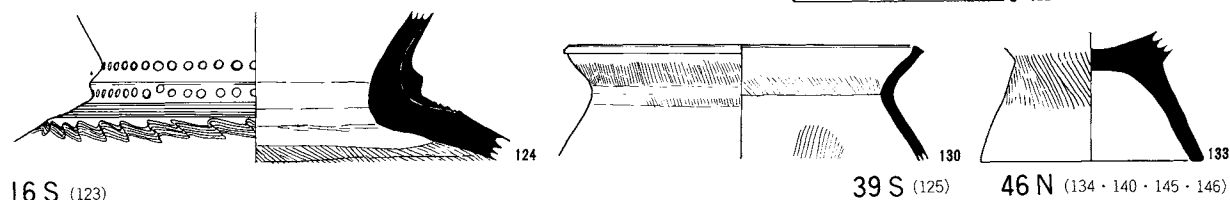


遺物包含層

40 I (126~128) 41 N (131) 14 S (122)

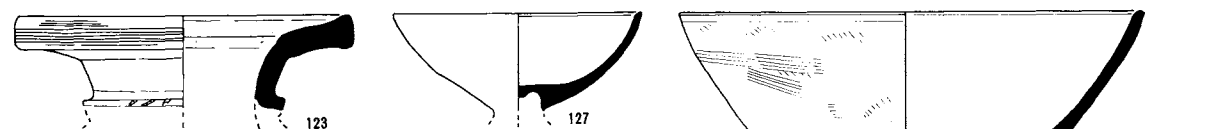


30 N (124) 43 S (129 · 130)

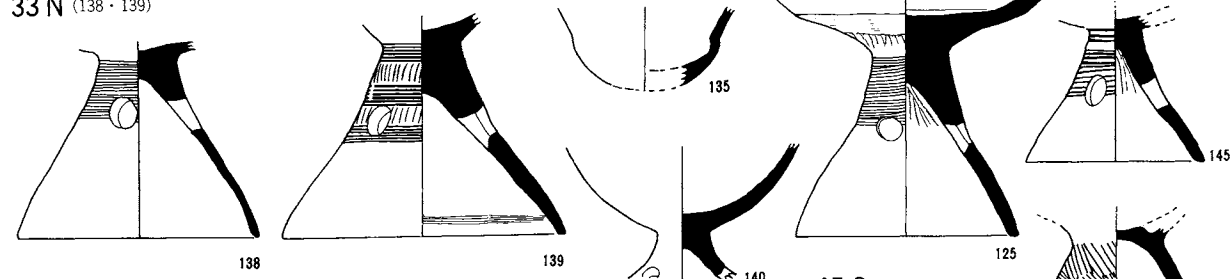


16 S (123)

39 S (125) 46 N (134 · 140 · 145 · 146)



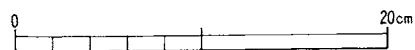
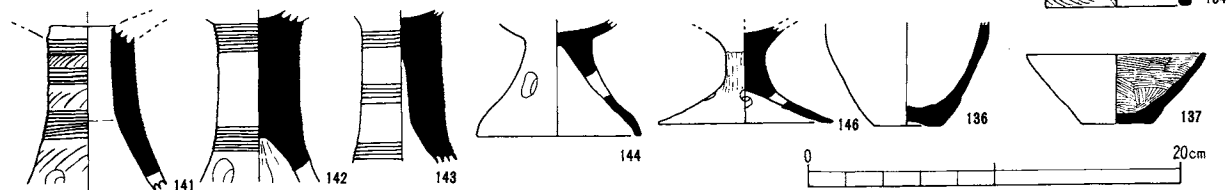
33 N (138 · 139)



41 S (132 · 133 · 135 · 141 · 144)

44 N (142 · 143)

45 S (136 · 137)



物包含層より出土したものを遺物包含層土器として代表的なものを一括して図示した。壺には広口壺Aのものが含まれており、123・124・126・131は頸部に凸帯をもつ。124は58と同様、数少ないA<sub>2</sub>タイプの大形、厚手の広口壺である。凸帯に二段の竹管文を配しており、同様の竹管文は126の肩にも見られる。132は口端に楯描列点文をもつBタイプの広口壺であるが凸帯の痕跡が頸部に残る。122は下半部のみであり、全形は不明であるが、球形を程する大きな体部に、小さな脚台部がつく壺の類と思われる。高杯はA（125・138・139・145）・D（127）・E（141～143）のタイプのものがある。中でも125は典型的な欠山式の高杯であり、口径25cm、器高20.5cmを測る。144・146の脚部は小形のもので、高杯Dタイプの杯部をもつものであろうか。他に小形丸底壺のような135、小形台付壺140、小形鉢137がある。

### (3)石 器

石器として認められるのは、38 S 区の黒色土中より出土した1点(PL87・94・255)のみである。石器255は高さ、底辺とも16cmの三角形を呈し、厚さ2cmの板状のもので縁泥片岩製。2辺を荒ぼく打ち欠き、底辺に当る部分の断面は鋭角となるが磨耗は見られない。むしろ扁平な面に磨耗痕が条痕として見られるところから、底辺を利用した切削具ないしは敲打器とするより砥石のような用途が考えられる石器である。

## 2. 平安時代の遺物

S K 21・S K 25・S K 26の遺構中及び17 S 区S X 19上の褐色土中より比較的まとまって土師器須恵器の出土をみた。その中には若干量の施釉陶器片があった。全体量は整理箱にして10箱ほどである。大半は土師器であり、須恵器は器種に富むものの土師器量との比は $\frac{1}{10}$ であり、施釉陶器にいたっては10片にも満たない。また、S K 18からは鉄製品が、発掘区各所から土錘が検出された。

### (1)土 師 器

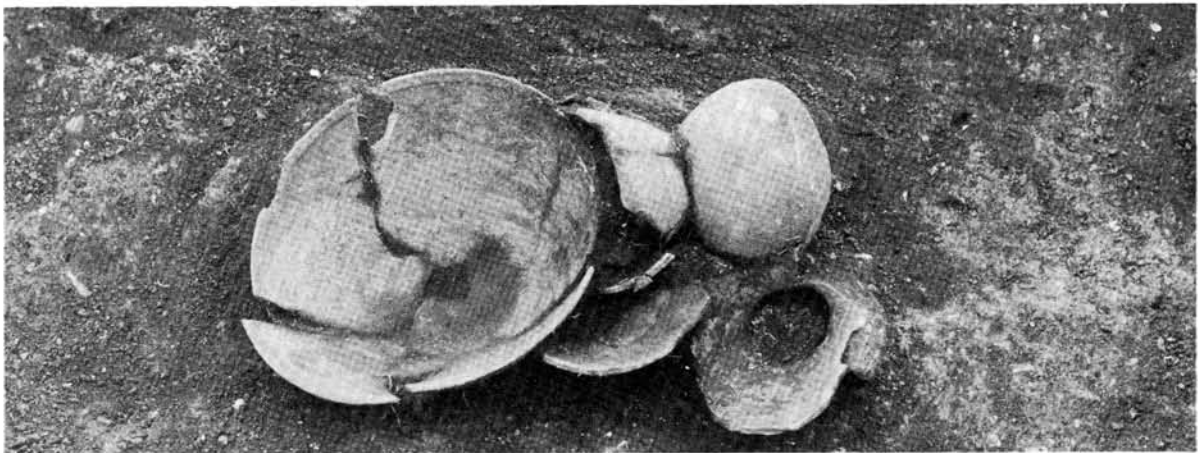
器種として杯・同蓋、皿、鉢、甕、鍋、甑があるが、杯蓋、鍋、鉢は少ない。各器種とも粘土紐を順次巻き上げて成形しており、杯及び甕などにその継ぎ目を残すものがある。成形ののちの整形技法には撫で、篋削り、刷毛目がある。その内、撫で、刷毛目技法を多用し、篋削り技法を施したものは少く、甕・鍋の内面に少数見られただけである。篋磨きの技法は全く姿を消している。たゞ篋磨きを応用した文様である暗文が杯159の1点に認められる。皿・杯類は内面から口縁部外面にかけて回転を利用した撫で―ロクロ撫で―を施し、底部外面は多方向の雑な撫でのみで篋削りによる調整を行なわないため、指頭などの圧痕が凹凸となって残っている。このように杯・皿類の整形技法は撫でのみである。

杯は器形の特長により杯Aと杯Bに分類できる。杯A：撫でによって、口縁部が内に反り、口縁部から底部に移行する部分が稜をなして、口縁部と底部との境が明瞭である。杯B：底部から



80

S B 2 土器出土状況



81

S B 43 土器出土状況



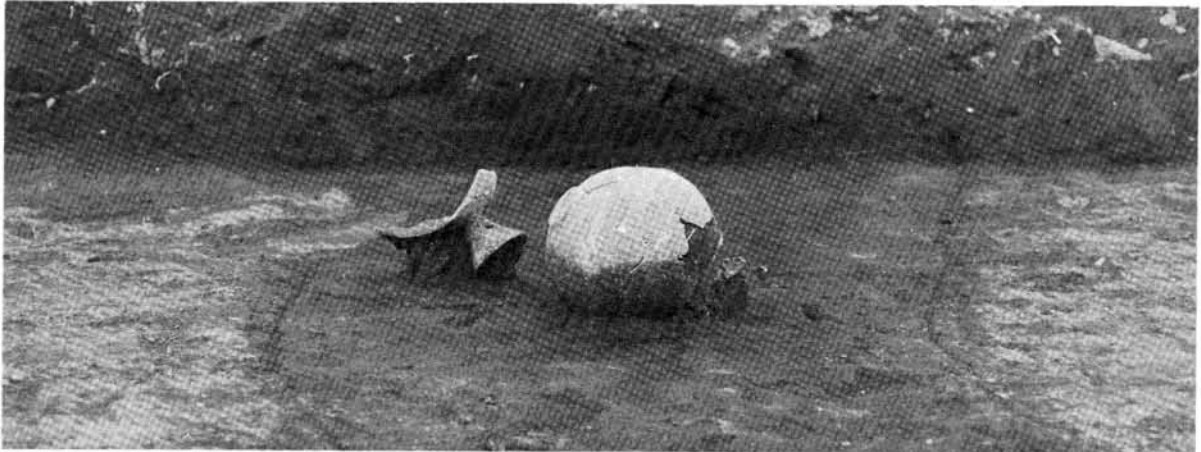
82

S X 19 土器出土状況



83

S X 22土器出土状況



84

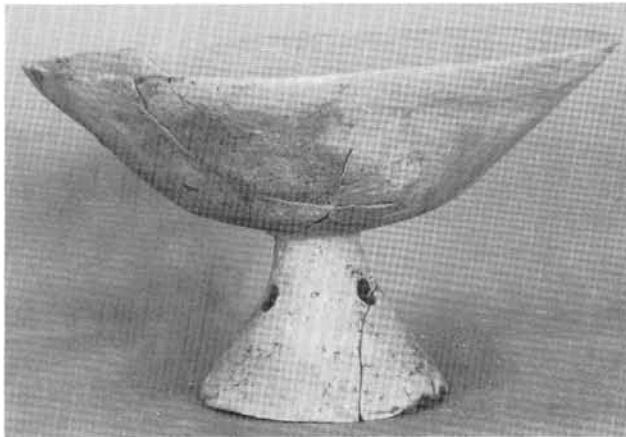
S K 23土器出土状況

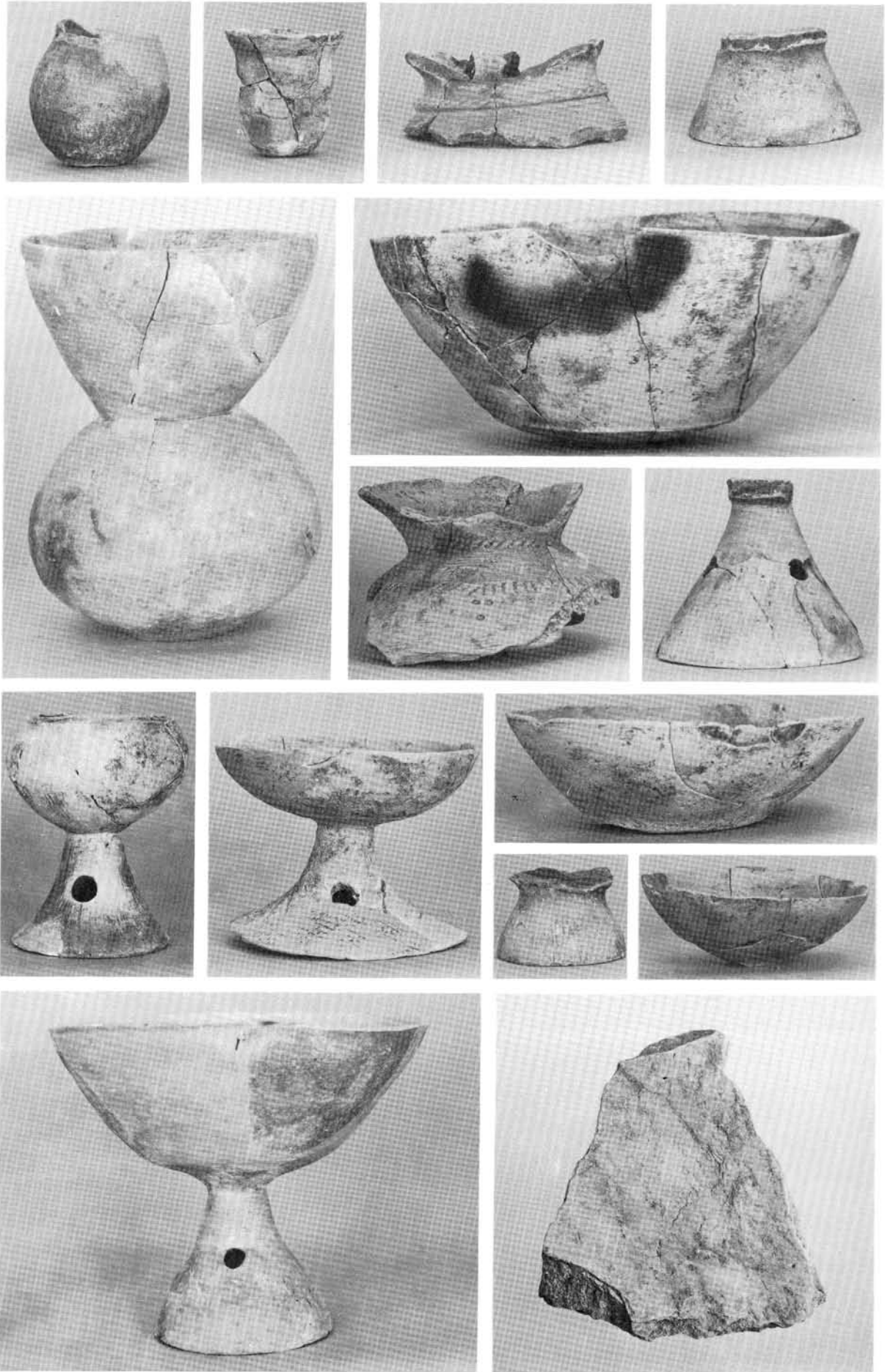


85

S X 19同溝断面

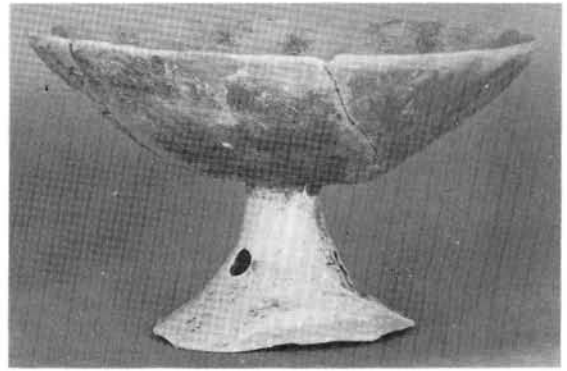
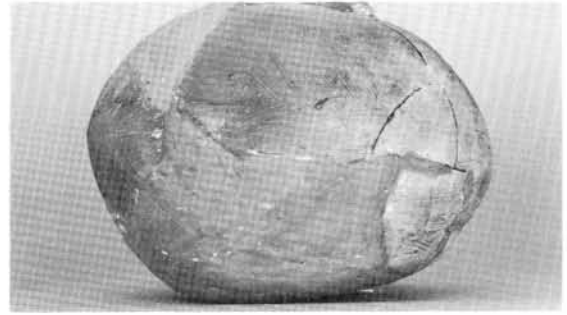




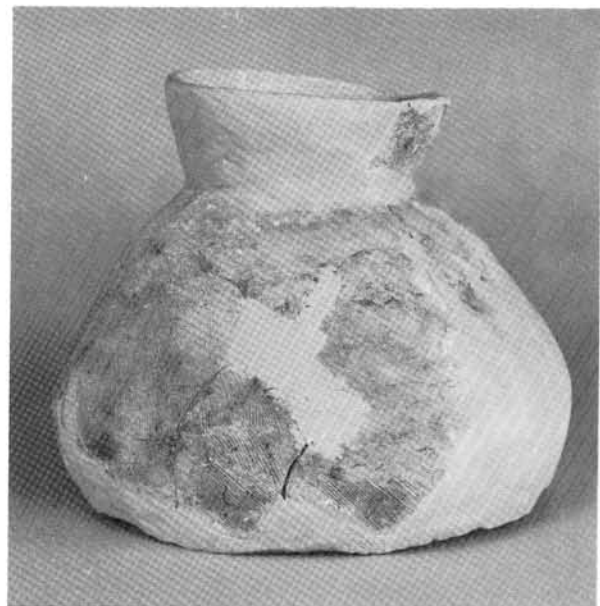
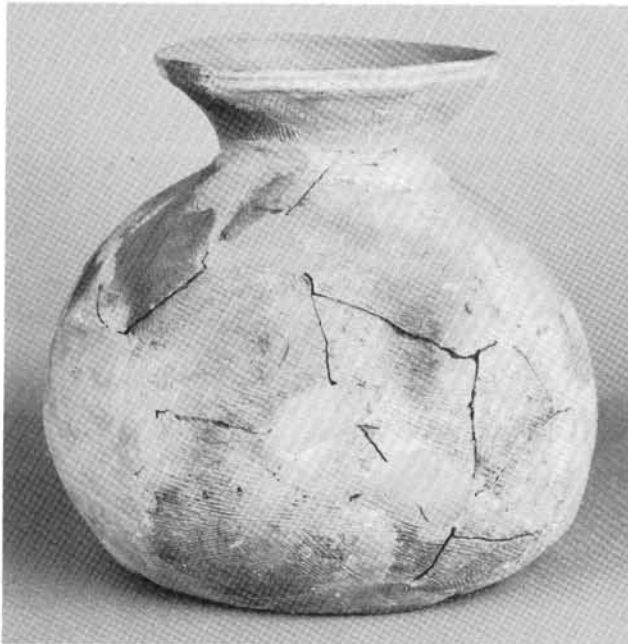


87

弥生土器 (1 : 3) 石器 (1 : 2)



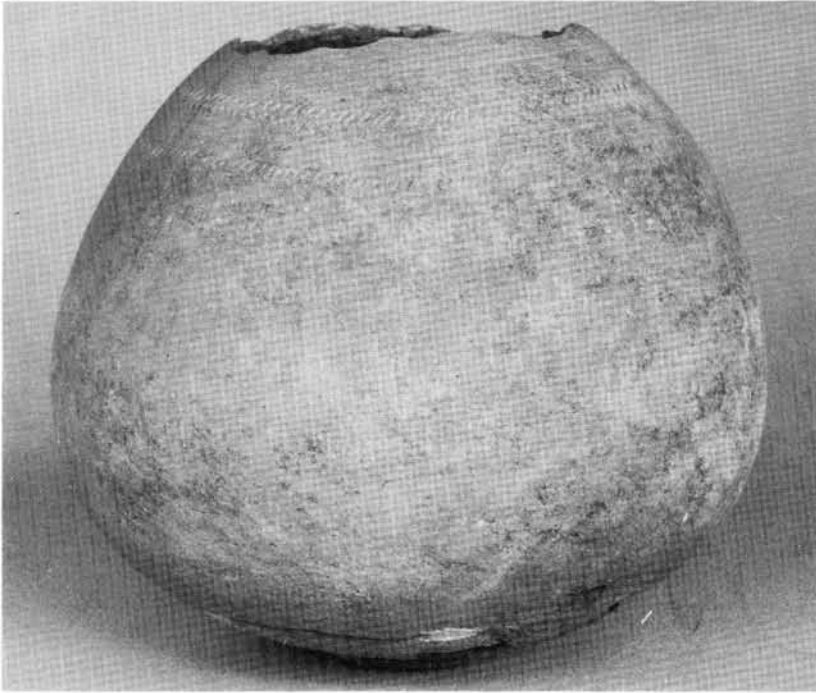
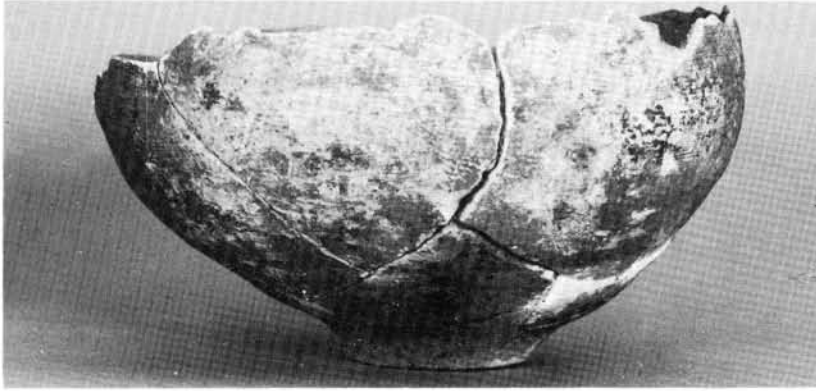




89

弥生土器 (1 : 3)





口縁部になめらかに移行して底部と口縁部との区別が明瞭でない。同様のことは皿類にも適用でき、皿A、皿Bに分つことができる。杯ではA類が多く、皿ではB類が多い。

甕・鍋・鉢・甑は、口縁部内外面を撫でて、他の部分は刷毛目で調整する技法を多用している。たゞ、体部内面については刷毛目調整するものと、撫でと篋削りとを併用するものとが数量的には相半ばする。杯類と同様、甕・鍋についても器形の特徴から2分類できる。甕A：体部が球形をなすもの。甕B：口縁部は甕Aと同様であるが、体部が長胴のもの。鍋A：大形のもので把手が二方につくもの。鍋B：鍋Aと器形は同様であるが、小形で把手がつかない。

## (2)須恵器・施釉陶器

土器量からすれば、整理箱1箱にも満たない。須恵器の器種には、杯・同蓋・盤・長頸壺・平瓶・薬壺蓋・甕と豊富であるが、完形品はなく、すべて破片である。杯は高台を有するものはなく、すべて平底で口縁部が直線的に開くものである。杯蓋は須恵器類の中で量的に最も多いが、口径17cm前後で扁平な器形が多い。195の1点のみ、口径20cm足らずで腰の高い大形のものである。いずれも口端は折り返されて立ち、断面は三角形を呈している。他の器種はすべて1点ずつしかない。

施釉陶器はいずれも高台を有する杯で上記土器にまじって6点検出された。内訳は緑釉4点、灰釉陶器2点である。精良な粘土を用いており、砂粒を全く含まない。緑釉陶器は淡緑色を呈し釉薬は刷毛で全面に丁寧に塗布している。灰釉陶器の1点は釉が剥落しており、他の1点は淡黄緑色を呈するもの高台から内側及び見込み部分は生地を見せており、見込み部分には重ね焼きの痕跡が残る。緑釉・灰釉陶器とも口縁部を欠く杯であり、器形はよく類似するが、たゞ、高台の断面が緑釉陶器の杯では方形をなすに対して、灰釉陶器では外側を削って三角形を呈している。

## (3)遺構別出土土器

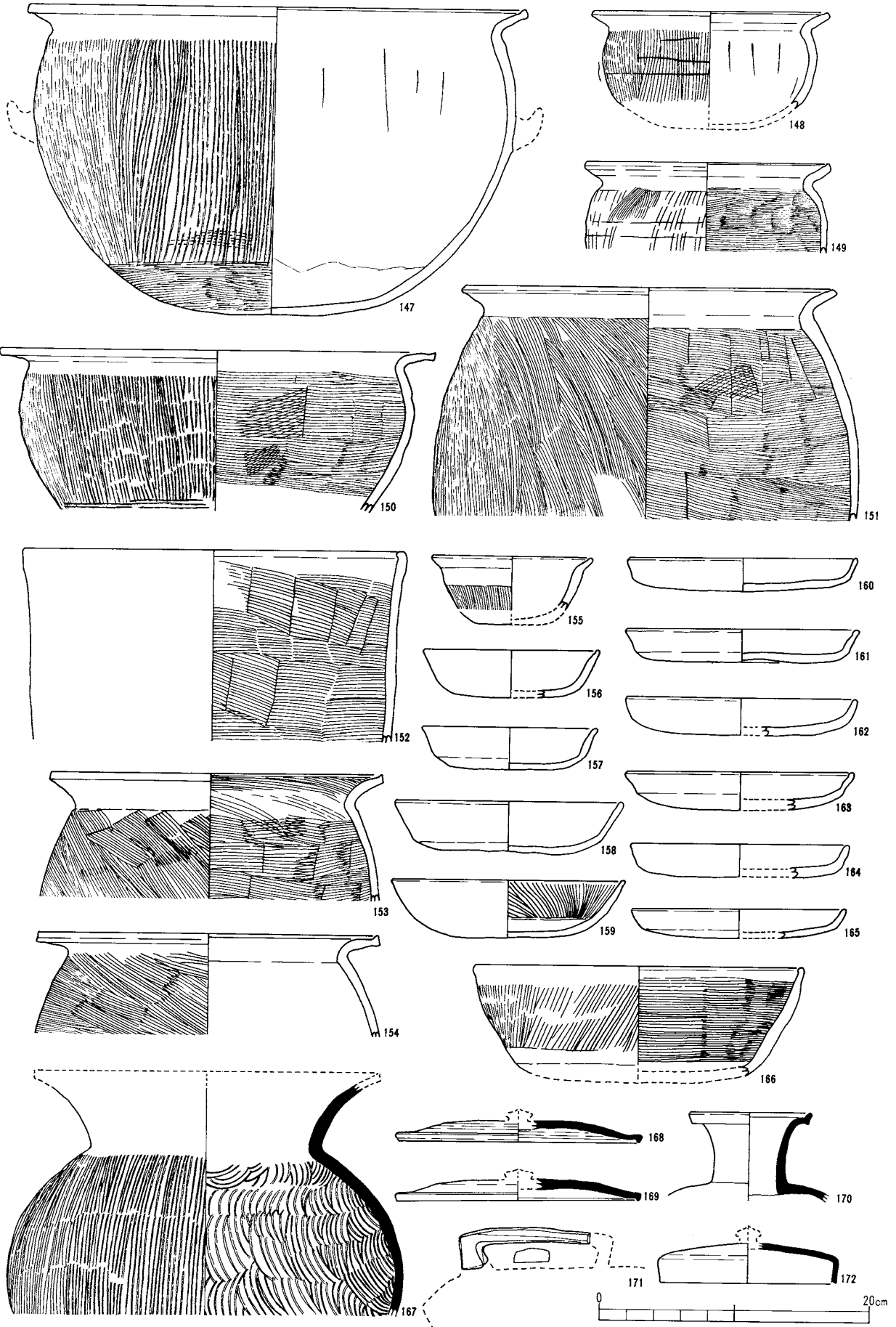
**S B 13出土土器** 口径22cm、高さ10cmの鉢175が唯一の出土品。粘土紐巻き上げの成形手法が継ぎ目の痕跡によりよくわかる鉢で、底は少し丸味をもち、口縁は立って、口端がわずかに外に反り、口端の1ヶ所を強く折り返して片口状の器形となる。口端内外面と底部内面のみ撫で、口縁部は刷毛目技法による調整であるが、外面は縦方向、内面は右回り横方向の刷毛目である。底部外面は多方向の刷毛目で前者よりも細かい。ただ、口縁部と底部の境にのみ、水平方向に篋削りを一周する形で部分的に施している。

**S B 20出土土器** 土師器の甕(184)と甑(182・183)がある。甕184は口縁部の外反の程度が弱く、整形技法からいっても内面を篋削りするなど甕Aでも他の甕Aと趣きを異にする。182は口径32cmと大形の甑、183は口径13cmと小形の甑であるが、器形は口端のまとめ方といい大同小異。183は内面に縦方向の篋削りの調整を加えている。

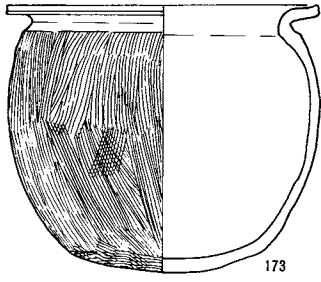
**S B 47出土土器** 柱穴の底から取り出された173と柱穴の掘り方の位置で検出された174は、ともに口径17cmの同大の甕Aである。173は口縁部が水平に折り返されているに対して、174は逆八字形に開き、しかも体部が横へ丸味をもって広がり鍋形に近い器形をなす。整形技法は刷毛目と撫でを主体にしたものであり、174には粘土紐巻き上げの痕が残る。器面には両者とも煤がつく。

**S K 21出土土器** 最も多量に出土。土師器には杯A（157・158）、杯B（156・159）、皿A（160・161・163・165）、皿B（162・164）、甕B（151・153・154）、鍋A（147）、鍋B（148・150）、甌（152）、鉢（166）がある。杯A・杯Bともに径13cm前後のもの（156・157）、口径17cmと少し大形のもの（158・159）がある。整形技法はともに同様であるが、中には口端を少し巻き込み、内に肥厚する杯（156）もある。159は唯一の暗文の残る杯で、出土杯類中大形で、内面に連弧暗文と放斜暗文を篋先で施している。甕は完形品はなく、すべて上半部の破片で、口径25cmと大形であり、器形の特徴から長胴形の甕Bと考えられる。口縁部内外面を横に撫で、体部の内外面は刷毛目で調整している。たゞ、154のみ内面を撫でている。鍋Aとした147は口径37cm、高さ22cmと大形品で、体部上半部に把手が剥離した痕跡があって二方に角状把手のつくものであろう。体部外面は荒い刷毛目で調整されているが、内面は刷毛目を用いず、上半を撫で、下半は篋で削っている。鍋Bには口径17cmの148と口径32cmと大形の150がある。150は口縁を水平に折り返す特徴的な形をなしている。152は体部上半が円筒状をなすところから甌と推定した。166は口縁部のみで底部を欠く鉢で、口径24cm、高さ9cmと175よりやや浅い。調整手法は、175と全く同様である。須恵器として杯蓋片2、長頸壺片1、平瓶片1、薬壺蓋片1、甕片1があり、甕片を除いていずれも胎土は堅微でよく焼きしまる。杯蓋（168・169）は紐を欠き、天井までの高さ1.5cmと扁平である。内面から口縁部にかけてはロクロを利用した撫でにより調整しているが、天井部のみは篋で削っている。168は器表外面に自然釉が流れて施釉陶器の感じがする。170は口頸部から肩にかけての部分が残る口径9cmの長頸壺片。器面にはロクロ撫での痕がよく残る。口端が上方に折り返されて内面に段を有する器形。口頸部と体部を別々に成形したのち接合している。171は把手部分が残る平瓶片、把手外面には厚く自然釉がかかり、篋で丁寧な削って調整している。断面は外面平ら、内面中央が張り出す五角形となる。172は紐を欠失しているが、口径13cmの薬壺の蓋で、口縁部がやや内に反り気味に立つ。その器表外面には自然釉が全面に流れ、黄緑色を呈している。甕167は胎土に砂粒を含み、整形自体も口縁部は撫で、体部は叩き手法の粗雑なもので、上記須恵器のもつシャープさはない。

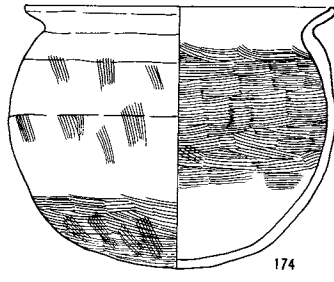
**S K 24出土土器** 土師器には甕（190）、杯（192・193）、杯蓋（194）がある。杯はBタイプで口径13cmと14cmのもの。193は口端を内に巻き込む。194は宝珠形のつまみを有する口径15cm、器高3.5cmの杯蓋で須恵器の器形を真似たものであろうが、口端は折り返さず、そのまゝ丸く単純におさめている。天井部のみ刷毛目調整、他は撫でている。191は口径18cmのB類の皿。190はA類の甕であるが、口径14cmと173等に比較して小さく、体部から鍋形に近くなる器形のものであろう。須恵器195は口径19cmと他の杯より一回り大形で、天井部も高くな



SB47 (173・174)

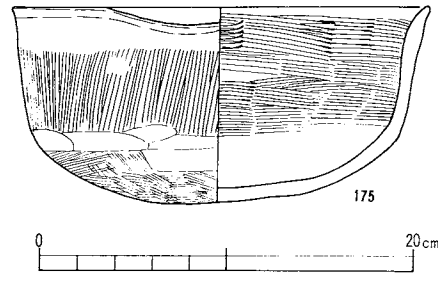


173



174

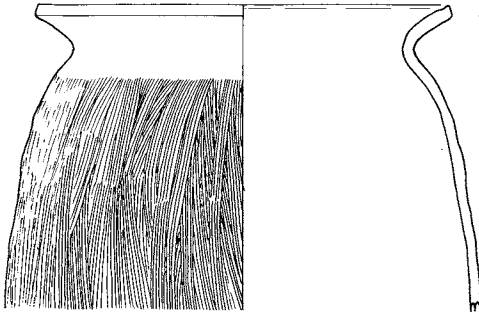
SB13 (175)



175

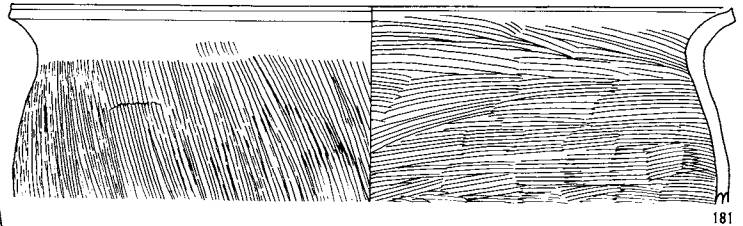


SK25 (176-180)

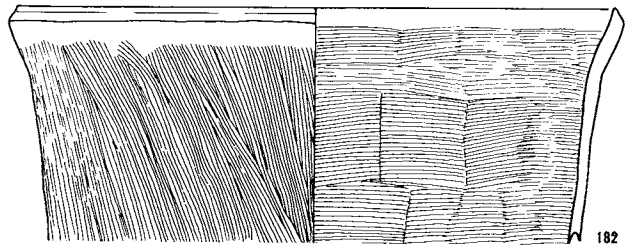


176

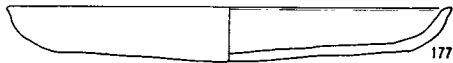
SK30 (181) SB20 (182-184)



181



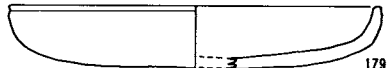
182



177



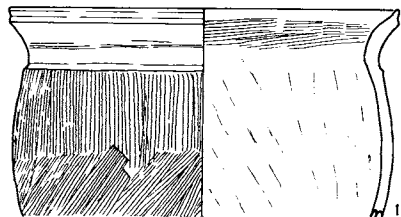
178



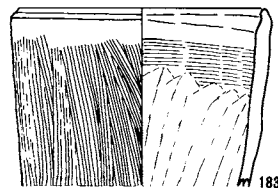
179



180



184



183

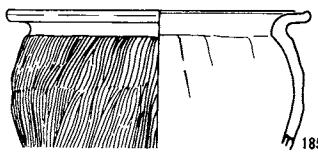
SK24 (190-196)

SK26 (185-189)

遺物包含層

18 N (197)

41 S (198)



185



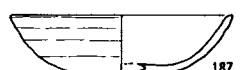
186



189



194



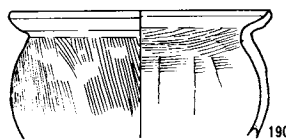
187



188



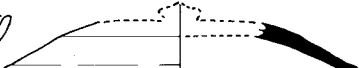
193



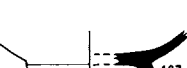
190



191



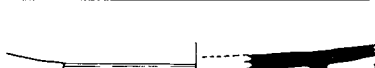
195



197



192

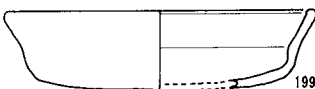


196



198

17 S (199-208)



199



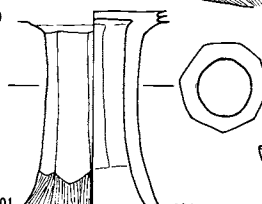
205



206



200



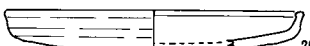
204



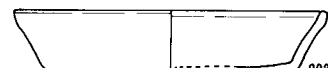
202



207



201



203



208

る。196は盤と思われる底部破片で八字形にふんばる付け高台をもつ。

**S K 25出土土器** 土師器皿(177~180)と甕(176)で、いずれも竈跡と考えられる焼土中より出土した。皿は口径20~24cm、177のみ皿Aで他は皿B。176は口径22cmの甕Bで下半部はない。

**S K 26出土土器** 土師器杯186・188は杯A、口径15cm、188がいく分深い。187は口径12cmと一回り小形の杯B。甕185は口径16cm、体部はS K 24の甕190と同様鍋形になるであろう。須恵器杯蓋189は口径13cm、S K 21のものと大差ない。

**S K 30出土土器** 焼土内より出土した口径39cmの大形の甕181のみで、B類のものであろう。

**17 S 区出土土器** 遺構内ではないが、17 S 区S X 19の周溝コーナー上の褐色土中には一括して多数の土師器と若干の須恵器が検出された。土師器には杯A(199・200・202・203)、皿A(201)、高杯(204・205)がある。杯Aは口径13cmのもの(200・202)と口径17cmのもの(199・203)と大小二種。ことに199は口縁部のロクロ撫でにより内へ器壁が反り、口縁部内面中ほどに稜を有す器形となる。高杯はともに脚筒部と杯部の破片であり、204は篋削りにより脚筒部断面が八角形を呈する。杯部205は口径22cmと浅く、外反するものであるが、204と同一個体ではない。須恵器杯207・208は篋削りで調整した平らな底をもつ、口径14cmほどのもの。206は口径17cmの杯蓋である。なお、198と同様の器形をした緑釉台付椀片が1点出土した。

**18 N 区出土土器** 灰釉の台付椀片(197)が2片出土。高台はいずれも付け高台である。

**41 S 区出土土器** 198は緑釉の台付椀で、胎土は須恵器、灰釉陶器よりやや軟陶で白っぽい。高台は灰釉のものと同様付け高台である。

#### (4)土 錘

11 S 区1(259)、17 S 区2(257・262)、17 N 区1(260)、18 N 区2(258・261)、S K 30内1(256)、S B 32内1(263)の計8点が各所より出土したが、263の1点を除いて、発掘区東半部分、平安時代の遺構が集中する部分で、平安時代土器とともに検出されたものである。長さ4cmと最小のものから長さ7cmと最大のものまで、様々であり、それぞれの計測値は別表のとおりである。両端がすばまり、中央が少しふくらむ形であるが、257のように強くふくらむ形もある。断面は円形をなすものと、258・261のように扁平になるものがある。

#### (5)鉄 製 品

S K 18の浅い土坑内で4点(265・266・270・274)、S K 24内2点(268・273)、17 S、18 N、22 S 区より5点の計11点出土、中に火打鎌、刀子、釘、紡錘車がある。

**火打鎌(265)** 平面形が笠形をなし、両端が少し上がる。長さ8.2cm、最大幅2.7cm、重さ25gを計る。

**刀子(273・274)** 273は茎を、274は身部先端をそれぞれ欠く。残存長は273が7.2cm、274が19.8cmである。

釘 (266～271) 266と268が完形、他は残欠。266・

土錘計測値

268はともに先端が曲るが、長さ10cmほどである。

なお、272は1cmと厚い、中央がえぐり入れられた方形板状のもので、何に使用されたものであるかは不明。

番号	長さ	最大径	重さ
	cm	cm	g
256	5.6	1.3	8
257	7.0	1.8	14
258	4.6	1.0×1.4	3
259	5.2	1.3	7
260	4.6	1.2	5
261	4.6	0.9×1.4	5
262	5.2	1.2	9
263	3.9	1.0	3

### 3. 鎌倉時代の遺物

土師器、山茶碗、磁器、宋銭がある。土師器、山茶碗についてはS D12、S B28より比較的まとまった出土を見た。磁器も土師器、山茶碗と共に少量であるが検出された。宋銭は7点あまりの出土であるが、大半が試掘の際に検出されたものである。遺物の量は平安時代遺物に比較して半分ほどである。

#### (1)土 師 器

炊飯用の鍋と供饌用の杯、小皿がある。鍋は完形品は1個体しかなく、口径42cmの大形品から口径17cmの小形品まで、器形は大小様々である。口端が内に折り重ねられたA類と、折り返されず、内に引き出されて水平になる口端を有するB類とがある。体部の器壁は薄くほとんどは0.5cm未満。粘土紐を巻き上げて成形し、口縁部のみ丁寧に横に撫で、肩の部分は撫でてはいても指頭圧痕がついて器面に凹凸がある。体部中ほどから底にかけては横方向に幅広く篋で削って調整している。254を除いて他のものには器体外面に煤がつく。付着の仕方は体部下半よりも肩部分に多い。なお、S B28より有脚鍋の脚部と推定されるものが1点出土している。杯には赤褐色を呈して器壁の厚いA類と、灰白色を呈してA類よりも更に器壁の薄くなるB類とがある。A類は全体の作りが粗雑になったものの前代の土師器杯の技術を受けついでいるのに対し、B類は粘土塊より手づくねでもって形を作り上げているのが特長。ために口端が波打ち、器形も正円形をなさずゆがむのが多い。中には、底に柁目がついて板の上で成形したと考えられるものが1点ある。このように杯には成形技法のことなる2種類がある。小皿は色調に違いはあっても杯のような技法上の相違は見られない。杯B類と同様、すべて手づくねの製品である。

#### (2)山 茶 碗

17点出土。口径15～16cm、器高5～6cmのもので、口端がシャープなもの、口端が肥厚するものの差異はあっても、器形は大同小異、高台は低く、取付けも雑であり、もみ痕のつくものとかないものがある。底には糸切り痕がほとんどのものにつくが、高台を取付けた際、撫でにより消されているものもある。ただ1点だけ、高台がなく底が平らな山茶碗片があった。自然釉の流れたものも2点あるが、意識的に塗釉したものはない。他に大形の片口1点がある。

### (3)磁 器

青磁碗と白磁碗がある。青磁碗はS D12、S K42、S K50、21S区よりそれぞれ1点ずつ、計4点出土したがいずれも破片。口縁部外面には花卉が陽刻されている。その上に青灰色の釉が厚くかかる。白磁碗は21S区出土のもの(251)と試掘の際、Y壇から出土したもの(250)とがあり、ともに完形品。251は口径11cm、器高3cmの小形碗。250は口径16cm、器高7cm、口端が外に肥厚し、下半部は生地を見せている。青磁、白磁とも中国宋代のものであろう。<sup>(1)</sup>

### (4)遺構別出土土器

**S D12出土土器** 土師器鍋は完形品はなく、口径23cm、25cm、27cm、42cmと4点(209～212)あり、211の体部の肩の部分には刷毛目が残る。小皿(213・214)は口径8cm未満。山茶碗(215・216)の高台にはもみ痕がつく。218は口径33cm、器高11cmと大形の片口。⅓ほどしか残らないが、内面に厚く煤がつく。片口として用をなさなくなった後、他に転用したものと思われる。217は口径16cmの青磁碗片。

**S B28出土土器** 土師器鍋(219)は口径27cmのもの、222は長さ15cm、径3cmの脚筒状のもので、篋で器面を下に削っている。中国地方で多用されたかなえ形の三足鍋の脚部のようなものと思われる。杯(220・221・223)は口径12～14cmでA類。山茶碗(224～227)は口径15～16cmのものであるが、225のみ口径に対して器高が浅い。高台にはすべてもみ痕がつく。

**S K27出土土器** 土師器杯(242)、小皿(241・243)、山茶碗片(244・245)がある。242は口径11cmのB類の杯。山茶碗は口縁部を欠くが、胎土に砂粒を含まず、高台も幅広くふんばって取付け方も丁寧で、この2点のみが他の山茶碗と趣きを異にする。

**S K42出土土器** 土師器鍋B(238)、同杯A(239)、青磁碗片(252)がある。

**S K46出土土器** 土師器鍋にはA類(228)とB類(229)のものがあり、228には刷毛目が部分的に残る。山茶碗(230)は口径15cm、器高5cm、高台は退化寸前で、もみ痕がある。231は常滑焼の平底壺である。

**S K49出土土器** 土師器杯B(240)と小皿(241)がある。

**S K50出土土器** 土師器杯B(232)、山茶碗(234～236)、同小皿(237)、青磁碗片(233)がある。234は高台がなくなった平底の山茶碗である。

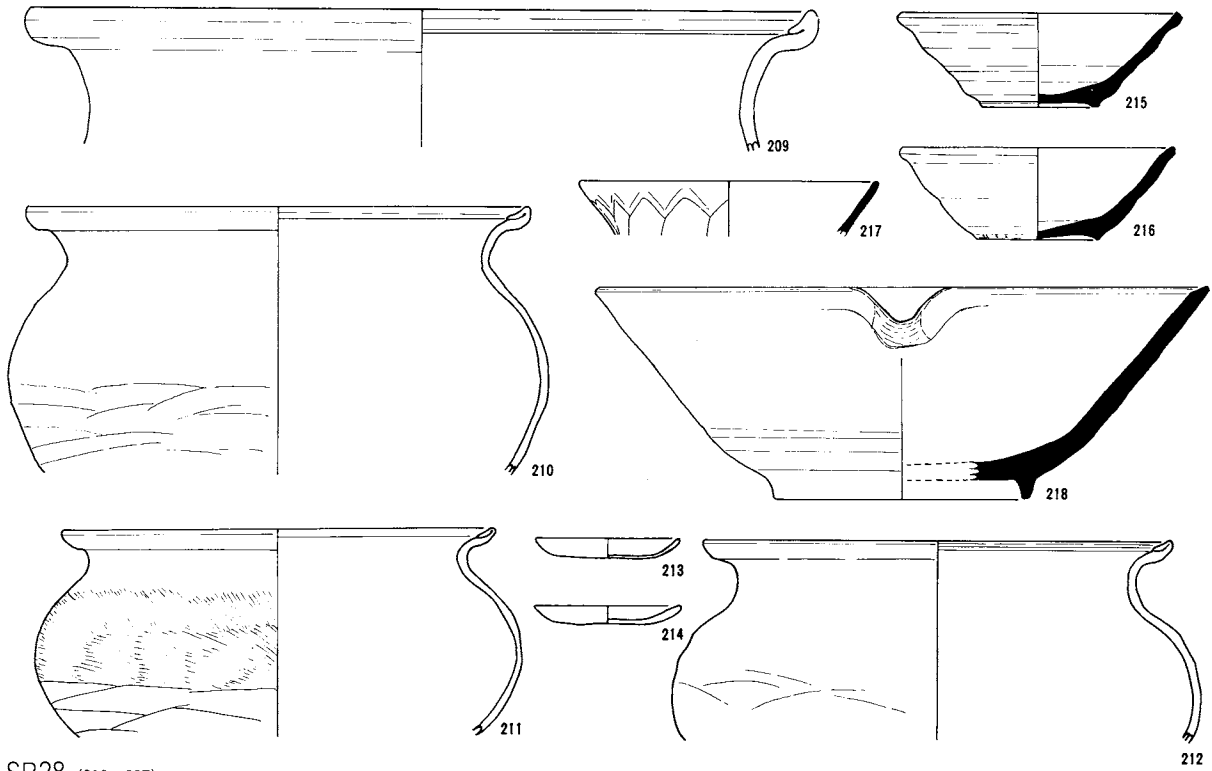
なお、遺構内ではないが、18S区で山茶碗(246・247)が出土したし、試掘の際にもG壇とY壇より248と249が検出された。とくに、249には口縁部と底に墨痕が残り、口縁部のは「上」と読めるが、底の字は平仮名の「よ」の字体が2字並んだ形のものである。254はこれも試掘の際X壇より出土した口径18cmの小形鍋Aであり、中世の土師器鍋の唯一の完形品である。

### (5)宋 銭

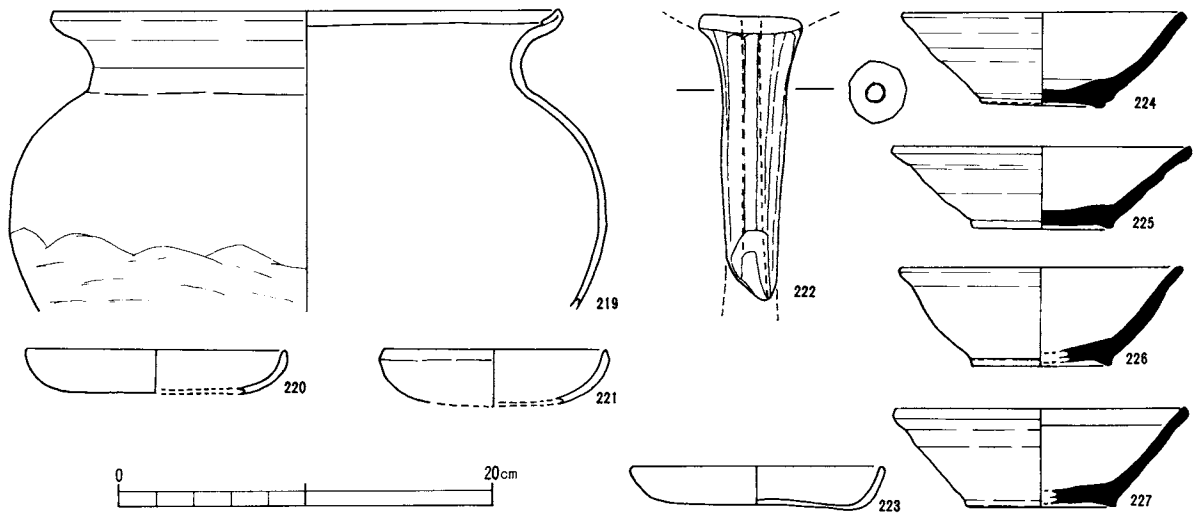
試掘の際、X壇より5枚(275～279)と16S区で2枚(280・281)を検出。すでに緑青をふく



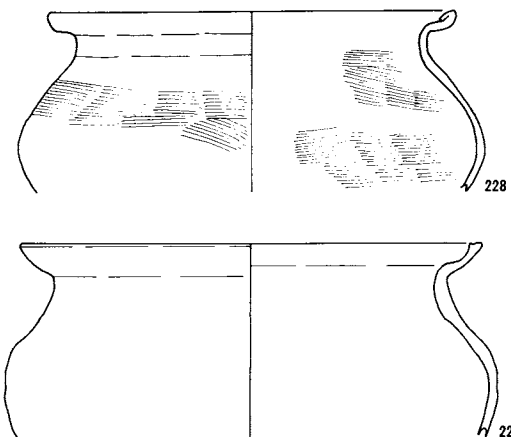
SD12 (209~218)



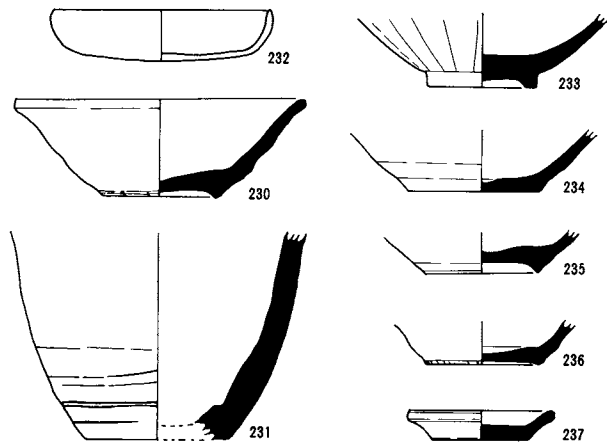
SB28 (219~227)



SK46 (228~231)

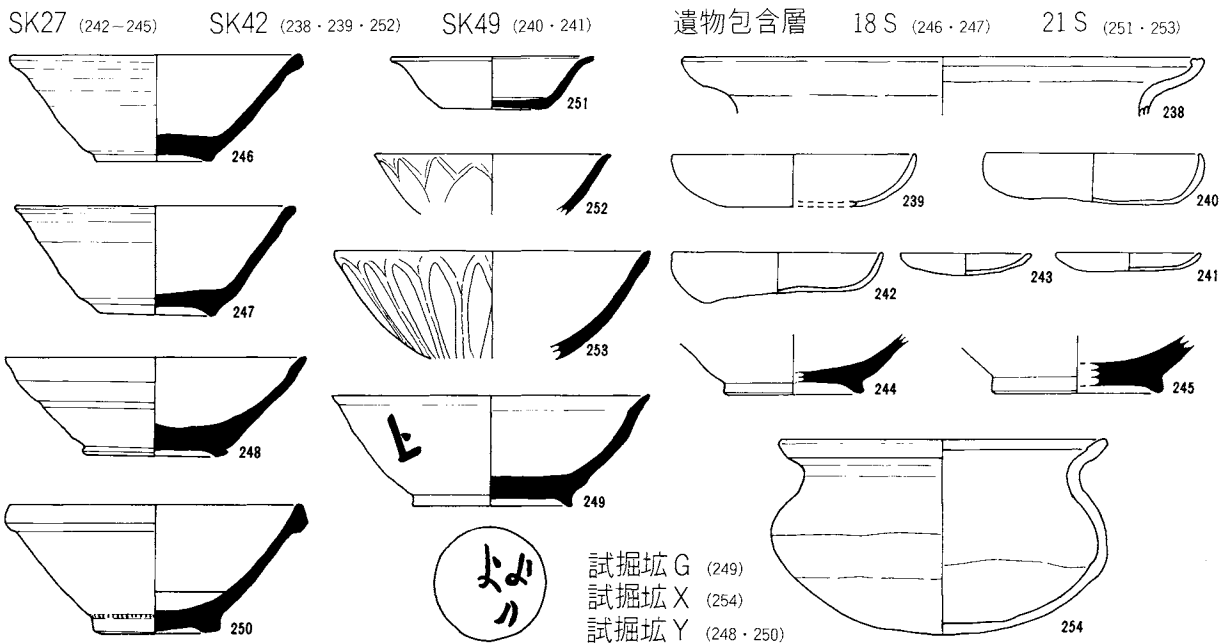


SK50 (232~237)

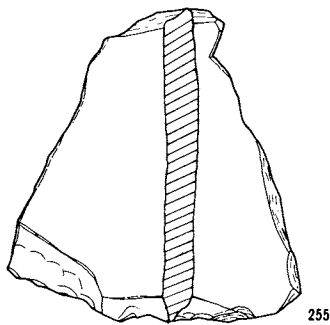


が、鋳出した文字は判読できる。それぞれの法量及び銭貨名は表の通りで、すべて北宋時代の銭貨である。

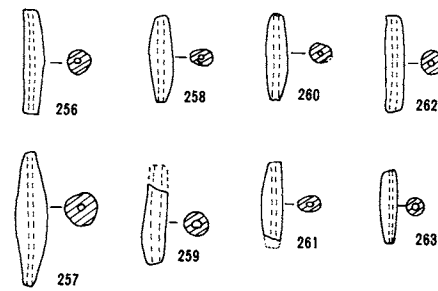
		出土		宋銭			
番号	銭貨名	初銭年代	径	番号	銭貨名	初銭年代	径
275	天聖元寶	1021	1.5	279	皇宋通寶	1039	1.5
276	淳化元寶	991	1.5	280	治平元寶	1064	1.4
277	元豐通寶	1078	1.5	281	熙寧元寶	1068	1.4
278	熙寧元寶	1068	1.4				



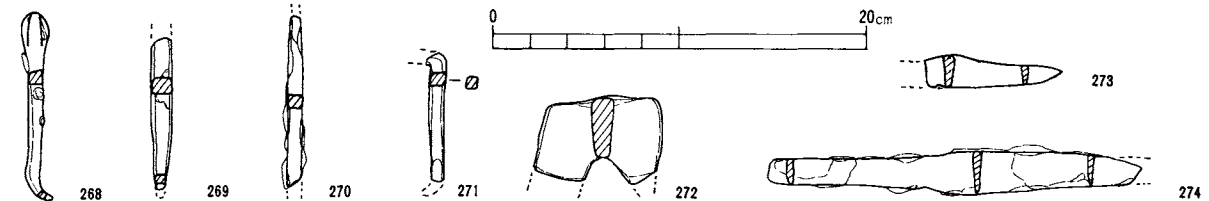
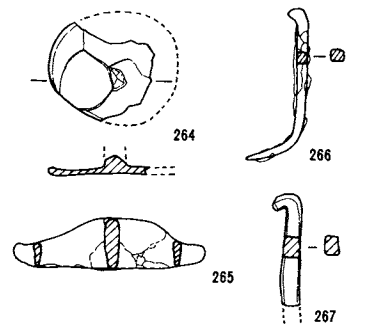
石器 (255)



土錘 (256~263)

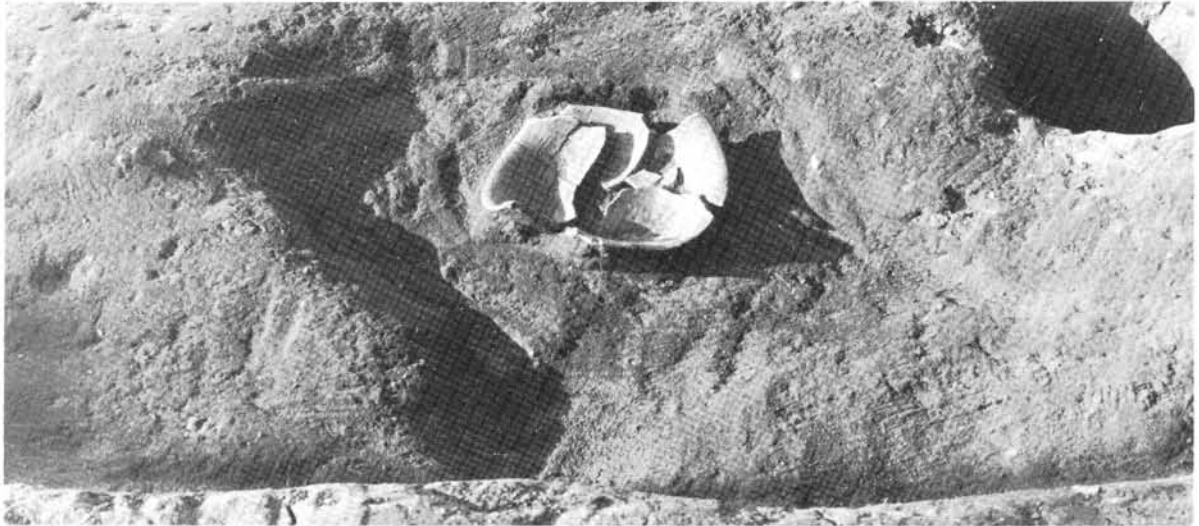


鉄製品 (264~274)



宋銭 (275~281)





95

S B 13土器出土状況



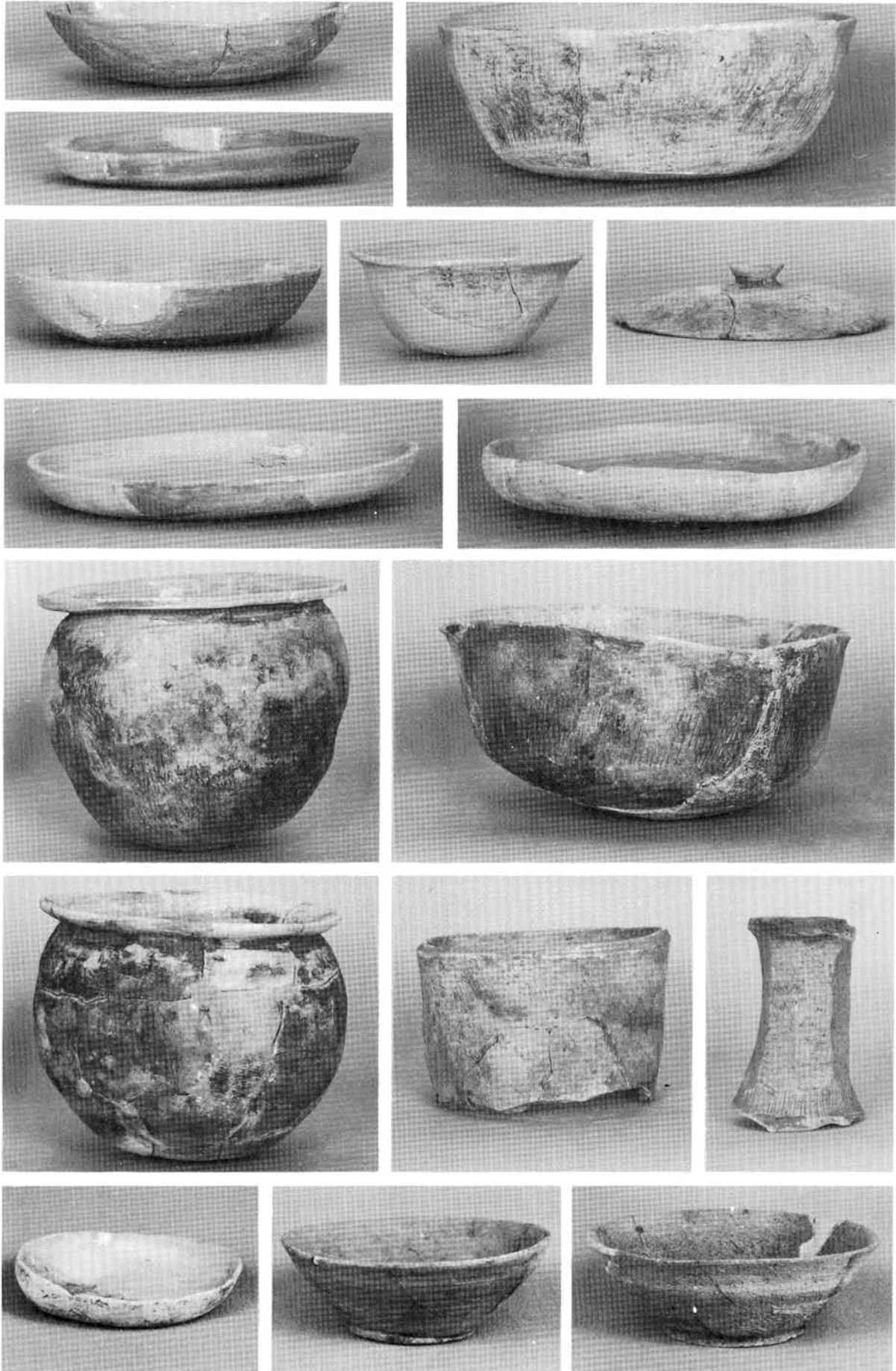
96

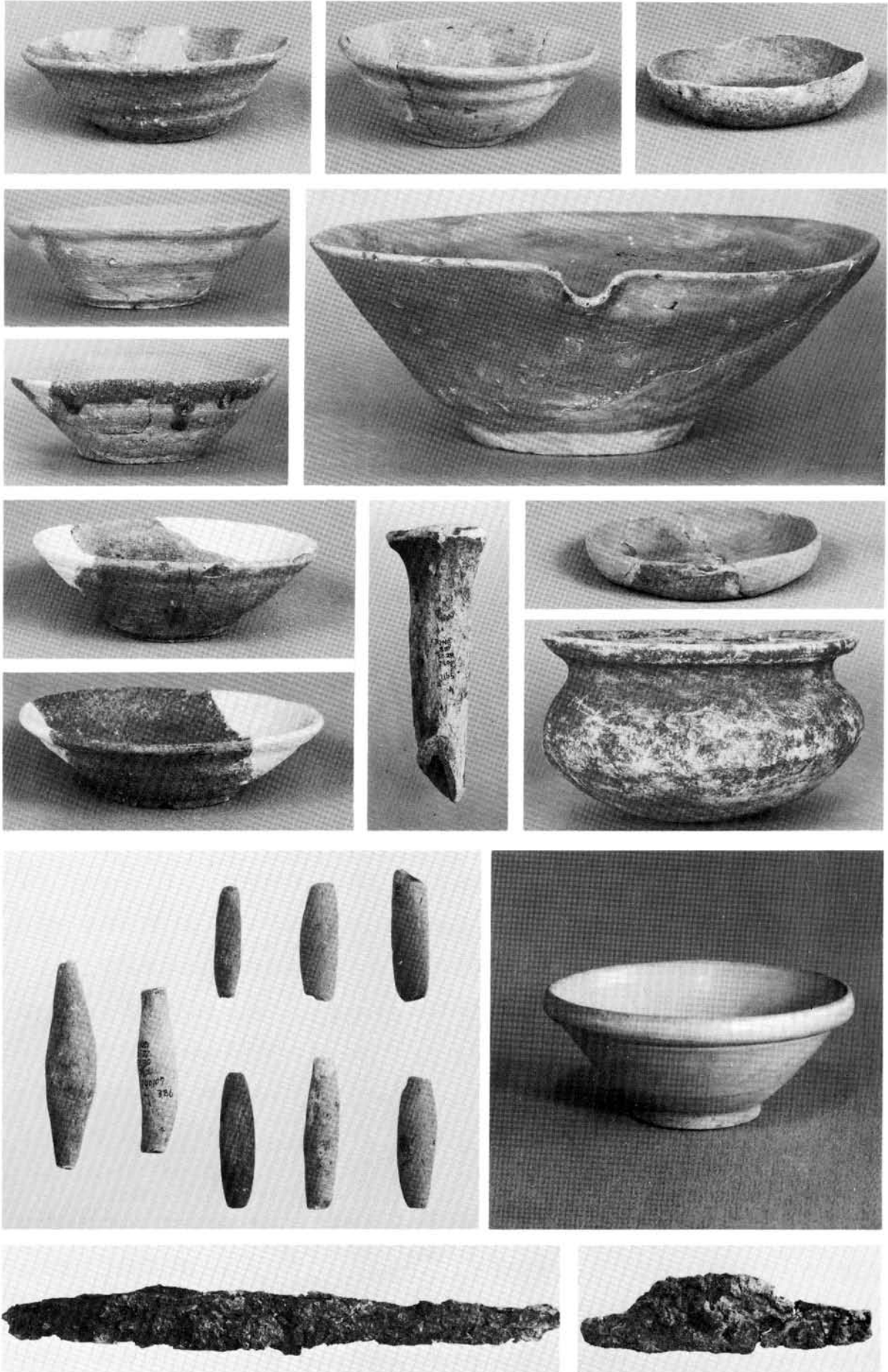
S D 12土器出土状況



97

S K 25埋土断面







## IV 結 語

本遺跡の発掘調査は全体面積約6万㎡のうち、約6分の1に当る10m×100mのわずかな部分を対象としたものであったが、今まで述べてきたような弥生時代後期・平安時代・鎌倉時代の建物及び土器などが多数検出され、それらの時代のムラ跡が複合する遺跡であることが判明した。今、調査結果を通していろいろな角度から遺跡を検討できようが、ここでは筆者が発掘調査及びその後の調査の整理作業に際して気付いた点を簡条的にまとめて結語としたい。

(1) 弥生時代後期以降の複合遺跡ではあるが、弥生時代後期を主としており、出土土器は弥生時代最終末の欠山期のものである。このころ、伊勢市上地町字野垣内の宮川左岸段丘上にムラを形成したといえよう。

宮川左岸段丘上の弥生時代遺跡は上流から<sup>オゴソ</sup>小社・中楽山・野垣内遺跡と続き、1km離れて大藪遺跡が所在し、段丘崖に沿って北東方向に並んでいる。そのうち、大藪遺跡と中楽山遺跡については調査は実施されており、大藪遺跡は弥生時代前期土器片が数片出土してはいるが、検出された方形周溝墓2基に伴う土器は弥生時代後期のものである。<sup>(2)</sup> また、中楽山遺跡の<sup>(3)</sup> 竪穴住居跡、方形周溝墓に伴出した土器も同様のものであり、小社遺跡の表採土器も欠山式の土器より<sup>(4)</sup> さかのぼるものはない。このような今までの調査結果と今回の発掘結果を照合してみると次の二点のことが力説できよう。第一点は宮川左岸段丘は弥生時代後期、欠山式土器が盛行する頃になって始めて大規模なムラが形成されたこと。第二点は弥生後期のムラ造りの勢力は左岸段丘で止まり、宮川右岸一帯には及ばなかったこと。つまり、宮川を渡って南下していないことが、現在の弥生時代遺跡の分布状態から推察される。弥生後期の遺跡は一般的傾向として、分布が拡大拡散しており、小谷に面した谷間の地でも立地が確められている状況からすれば、宮川右岸の伊勢市域で弥生時代後期の遺跡が確認されないのは普通ではない。弥生時代社会は水田耕作を主とする農耕社会であって生産基盤である水田としての可耕地の存在がムラ造りを左右するものであるが、当時において可耕地は全く右岸地域では皆無であったのであろうか。可耕地の存在とは別の要素が作用して上述のような遺跡の分布をもたらしたのではあるまいか。今、別の要素についての解答は見出せず、今後の検討課題と致したい。

(2) 弥生時代後期の方形竪穴住居は段丘崖よりも100mほど内に入った場所に営まれ、数棟による重複もあって、何回かの建て替えが推定されるものもある。また、住居址群に隣接して墓地と考えられる方形周溝址が4基あって、出土土器から推定して竪穴住居址群と方形周溝址群とはムラの中に併存しており、竪穴住居に住んだムラ人達が方形周溝址に葬られたことは容易に想像がつく。残念ながら主体部と思われる埋葬施設に当るものは方形周溝址では検出できず、単次埋葬

か複次埋葬かは不明であるが、周溝内の1ヶ所にのみ多量に検出された土器片は、埋葬時点で死者を手厚く葬った際に供献したものと考えている。本遺跡においては弥生時代末期でもムラの中に共同墓地としての性格の強い方形周溝墓群が営まれていることを確認しておきたい。

(3) 平安時代の建物址として竪穴住居址と掘立柱建物址を検出したが、併存したものか、先後関係にあったものかは不明である。掘立柱建物址に関連して注意を引くものに方形竪穴址がある。一辺2~3mほどの小規模なもので、一辺の中央に焼土及び焼けた壁面が残り、その部分を中心として土師器の出土が多かった。恐らくかまどの設けられた場所であり、竪穴自体が厨房をなしていたと推定され、竪穴と掘立柱建物址とはムラの日常生活において一体的な関係にあったものであろう。たゞ、恒常的な厨房であれば覆屋も必要であったであろうが、竪穴内及び掘り方周辺にそれらしい痕跡は見い出されなかった。

(4) 鎌倉時代に比定される山茶椀、土師器を出土した竪穴住居址が1棟検出され、鎌倉時代に至っても土間生活をしているムラ人の状況の一端がしのばれる。建物規模は3m×3.5mと小さく、床面には10~20cm大の礫が散乱していた。そして、竪穴内には柱穴は存在せず、竪穴の掘り方に沿った四周に8ヶ所の柱穴をもち、柱穴の底には礫を礎石として置いていた。柱間としては2間×2間を数え、竪穴住居址と掘立柱建物址とをミックスさせた建物構造となる。柱穴外に設けた場合、屋根は地面まで葺き降さず、壁面を四周にもつ家屋構造になるのではないかと素人推察している。そうした場合、屋根勾配は、地面まで葺き降ろす従来の竪穴住居址の場合と比較して緩やかなものとなるはずである。そこで、床面の大小様々な礫であるが、これらの礫はこの様な建物の出現と関連するもので、緩やかになった屋根上に置き、屋根を葺いた材を抑える働きをしていたものと推定したい。四日市々・智積廃寺のSB13住居址にも同例<sup>(5)</sup>—ただし、出土土器より時代は平安時代末頃と推定される—があり、主に鎌倉時代頃からこの様な構造をもった建物が民家として現われるようである。また、竪穴構造をもたなくても柱の下へ土台石を置いて礎石とするような民家建物の出現も管見した範囲内では鎌倉時代ごろに始まる。

#### 註

- (1) 矢部良明「中国陶磁出土遺跡一覧表」(『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 1978)
- (2) 吉水康夫ほか『南勢バイパス埋蔵文化調査報告』(三重県教育委員会 1973)
- (3) 下村登良男ほか『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1973)
- (4) 村山邦彦「小社遺跡」(『歩跡』2号 皇学館大学考古学研究会 1972)
- (5) 小玉道明ほか『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1970)



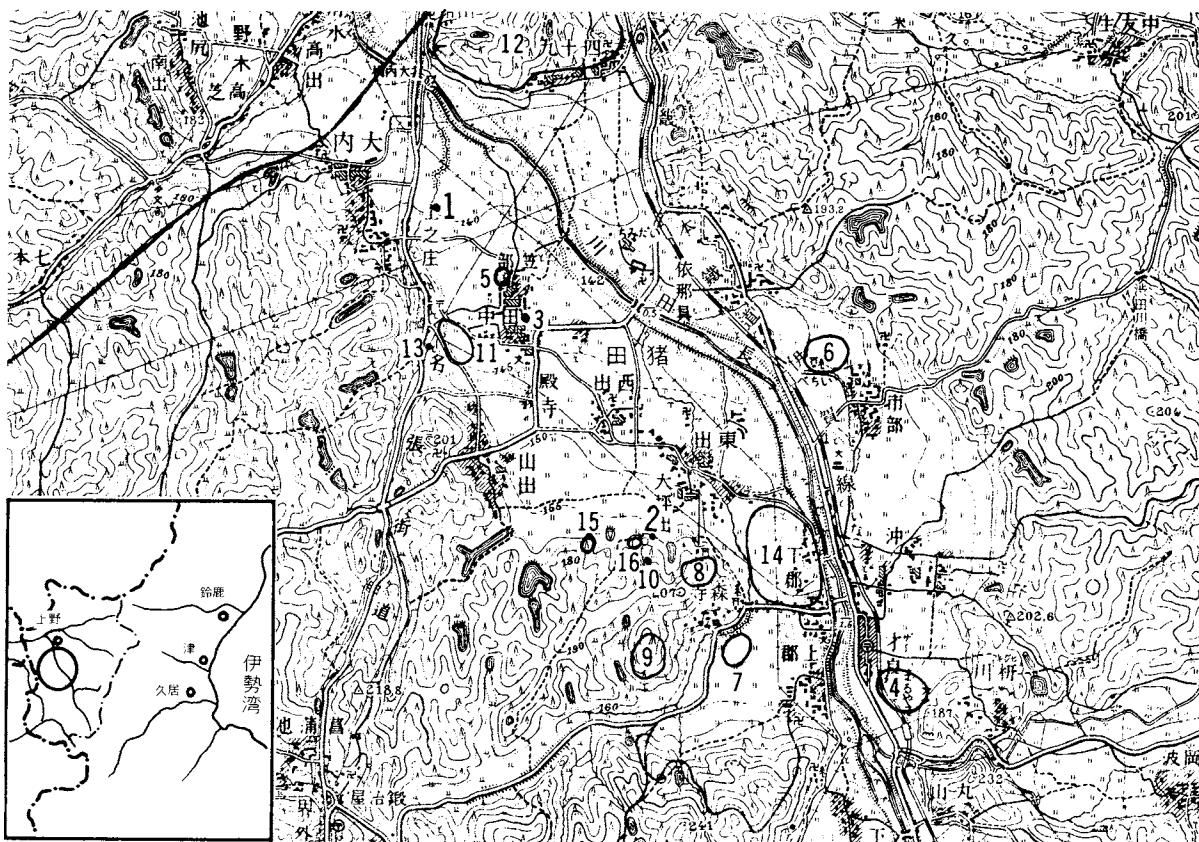


# 上野市上ノ庄山ノ川遺跡

## I 位 置

伊賀盆地の二大中心地である上野市と名張市を結ぶ「名張街道」は上野市の市街地のある丘陵より久米山の西側の長田川の沖積地に一旦おり、大内橋で長田川を越え、上ノ庄部落付近で再び丘陵地にのぼる。大内橋のすぐ上流には小さな支流「山の川」が注いでいる。山の川はこの名張街道に並行して南から北へ流れ、長田川の沖積地では小さなカーブで蛇行をくり返している。

遺跡は山の川が長田川に合流する地点より約900m程上流の右岸に位置している。標高140m前後である。名張街道に並行して北に向かって流れてきた山の川はこの部分で大きく東へ一旦まがり更に北々東へ向って流れている。この流れに並行して両側に一段低い水田があり、遺跡の中心はこの水田との比高1m程高い段丘上である。行政的には遺跡は上野市上ノ庄字黒田623～631番地に属する。



100

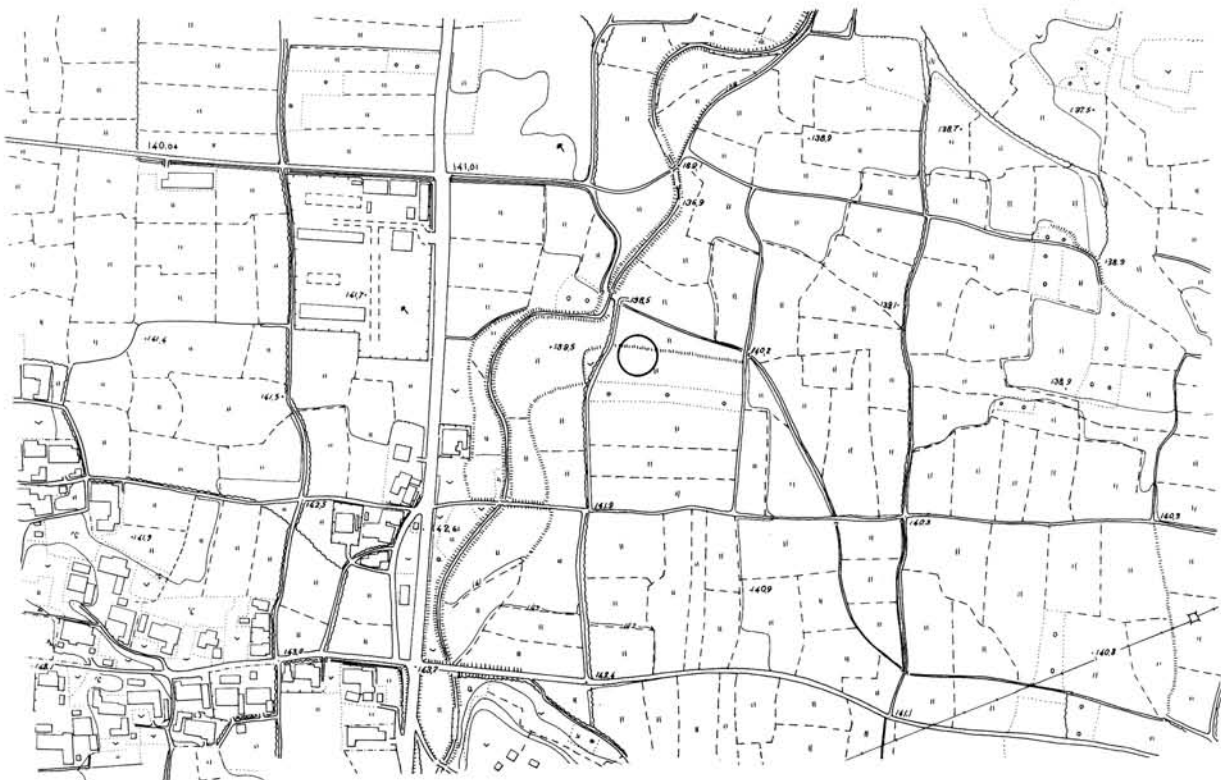
遺跡の位置（国土地理院「上野」1：5万）

1. 山ノ川遺跡
2. 波岸台遺跡
3. 田中遺跡
4. 才良遺跡
5. 西浦遺跡
6. 森脇遺跡
7. 森寺遺跡
8. 猪田神社古墳群
9. 森寺古墳群
10. 唐木谷古墳
11. 長野古墳群
12. 久米山古墳群
13. 神座山遺跡
14. 下郡遺跡
15. 寺山遺跡
16. 唐木谷遺跡



101

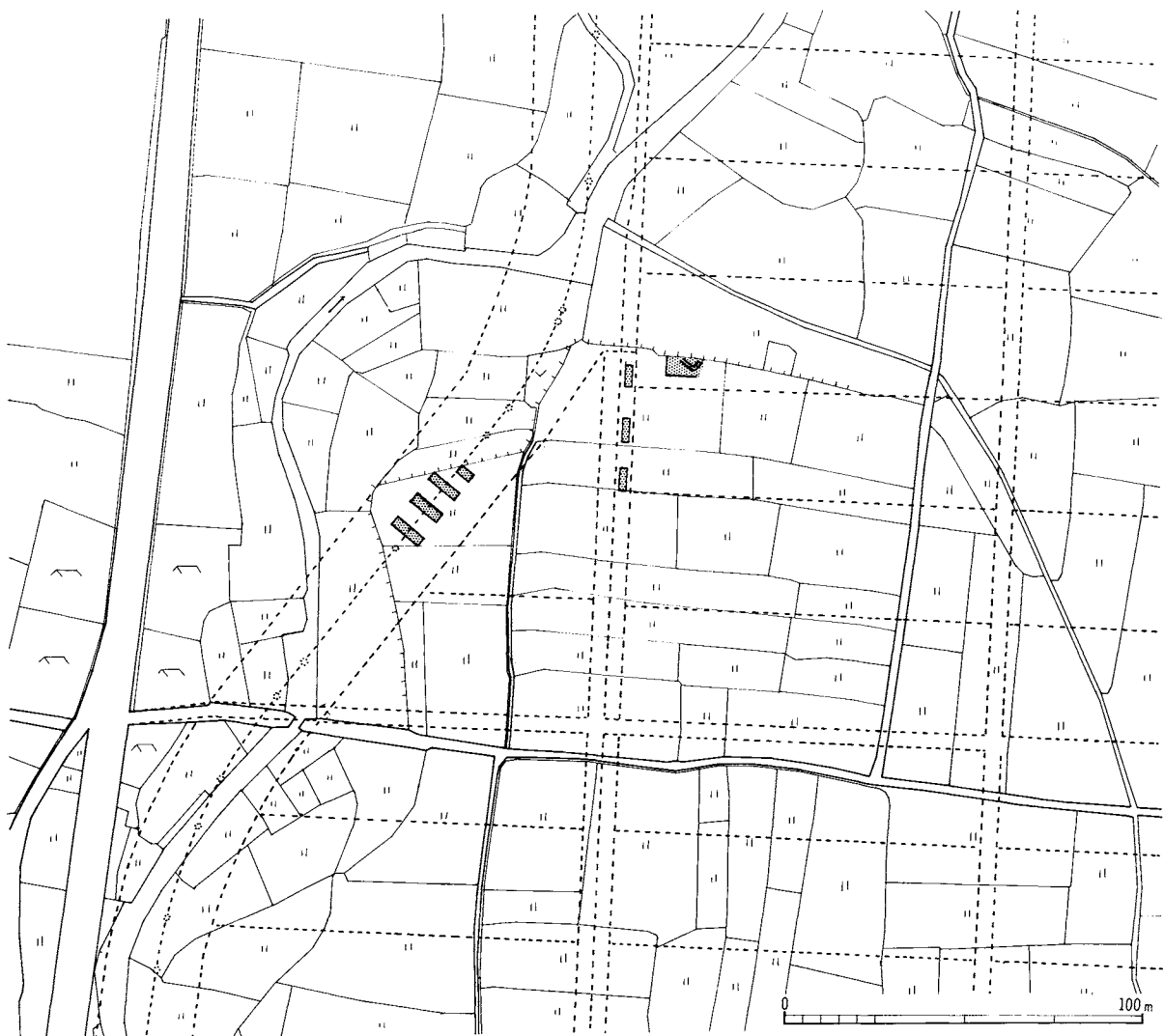
遺跡の遠景（南上空から）



102

遺跡地形図（1：5000）

山の川遺跡と波岸台遺跡のある田猪田村は古くは伊賀郡に属し、猪田、山出、田中、上ノ庄、笠部の五つの部落よりなり、すぐ上流および対岸は旧依那古村で、依那具、市部、沖、才良、上郡、下郡、森寺の七つの部落があり、古くより長田川の肥沃な沖積地を生活基盤として発展してきたものと思われる。このため、各時代の遺跡も数多く認められ、伊賀における中心地域であった。なかでも、弥生時代後期の遺物を出土する遺跡はこれらの各部落に必ずといってよいほど存在する。そのうち田中遺跡からは縄文土器片、<sup>(1)</sup>緑釉陶器片<sup>(2)</sup>も出土しているし、神座山遺跡は弥生時代から平安時代にかけての遺跡で、土師器の窯跡と思われる遺構が見つまっている。また山ノ川遺跡の南方約500mの丘陵地では、山出部落の北側の水田や墓にかけてすでに消滅したり、痕跡とはなっているが長野古墳群全25基も確認されている。長田川の対岸では、久米山にも計50基をこえる久米山古墳群がある。さらには昭和52年度以来発掘調査されている大内橋西側の北堀池遺跡<sup>(4)</sup>では、古墳時代前期を中心とした集落址と水田址が検出され、この地域の様相が次第に明らかにされつつある。



## II 遺 構

山の川の改修計画水路のセンター部分に幅2m、長さ10mのトレンチを4本、水田の排水路部分に2m×4mのトレンチを3本設定した。しかし、これらのトレンチは約20cmで地山の黄褐色粘質土となり、遺物は僅かに耕作土中に混ざって出土したにすぎなかった。そこで、仮排水路の掘削中に多数の土器が出土した個所で、地山の落ち込みが見られたため、この部分を拡張することにした。落ち込みの見つかった水田は標高140mで、すぐ北側の水田に比べ1m程度高く、東西に一段高い段状となっている。

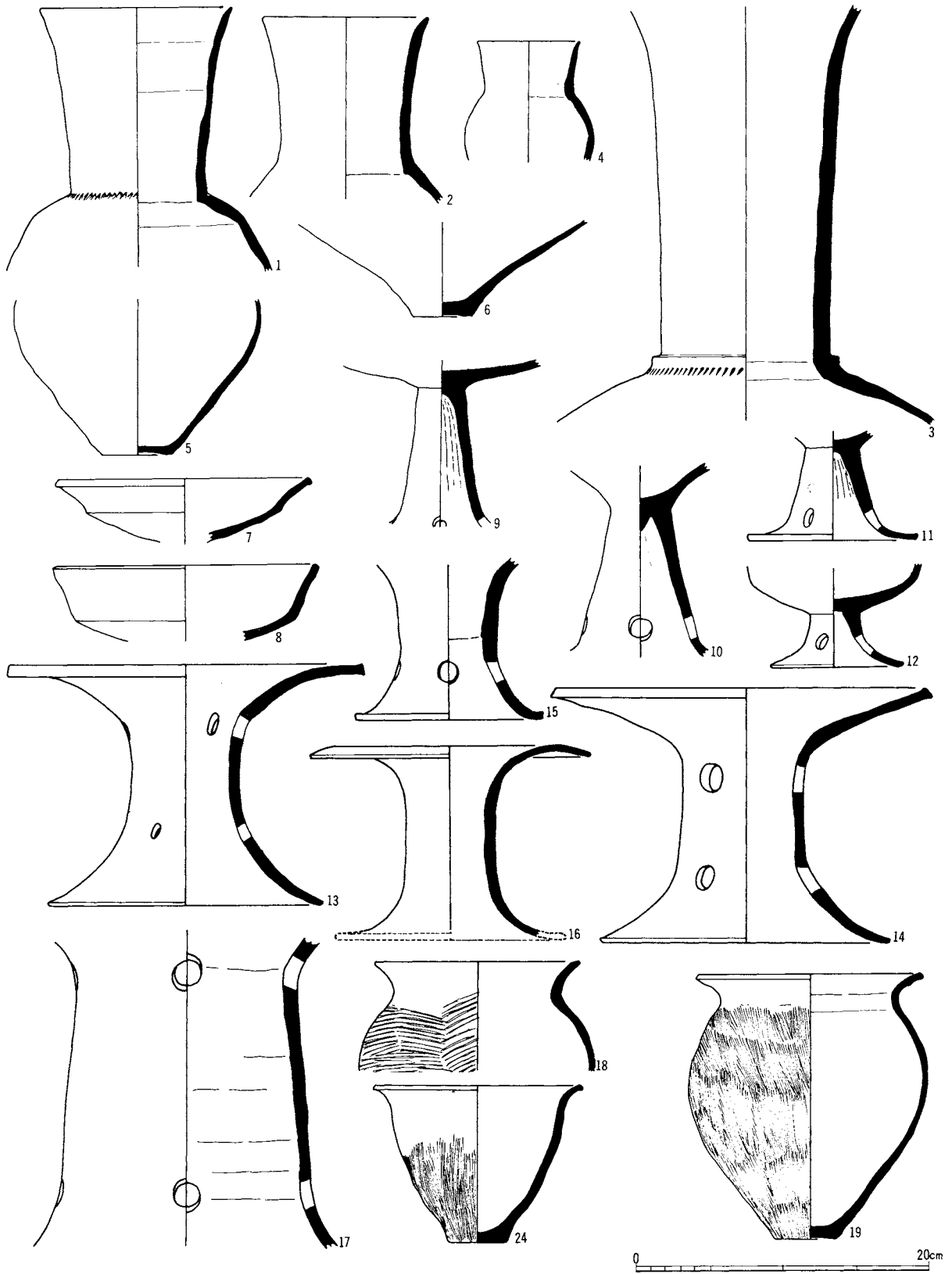
拡張した結果、L字状に曲がる溝址が見つかった。幅70cm、深さ地表より約1mで、南側3.5m、東側2.5mを確認した。耕作土および床土が約30cmで、溝内には暗褐色の砂質土が埋っており、多数の壺、器台、高杯、甕などが出土した。

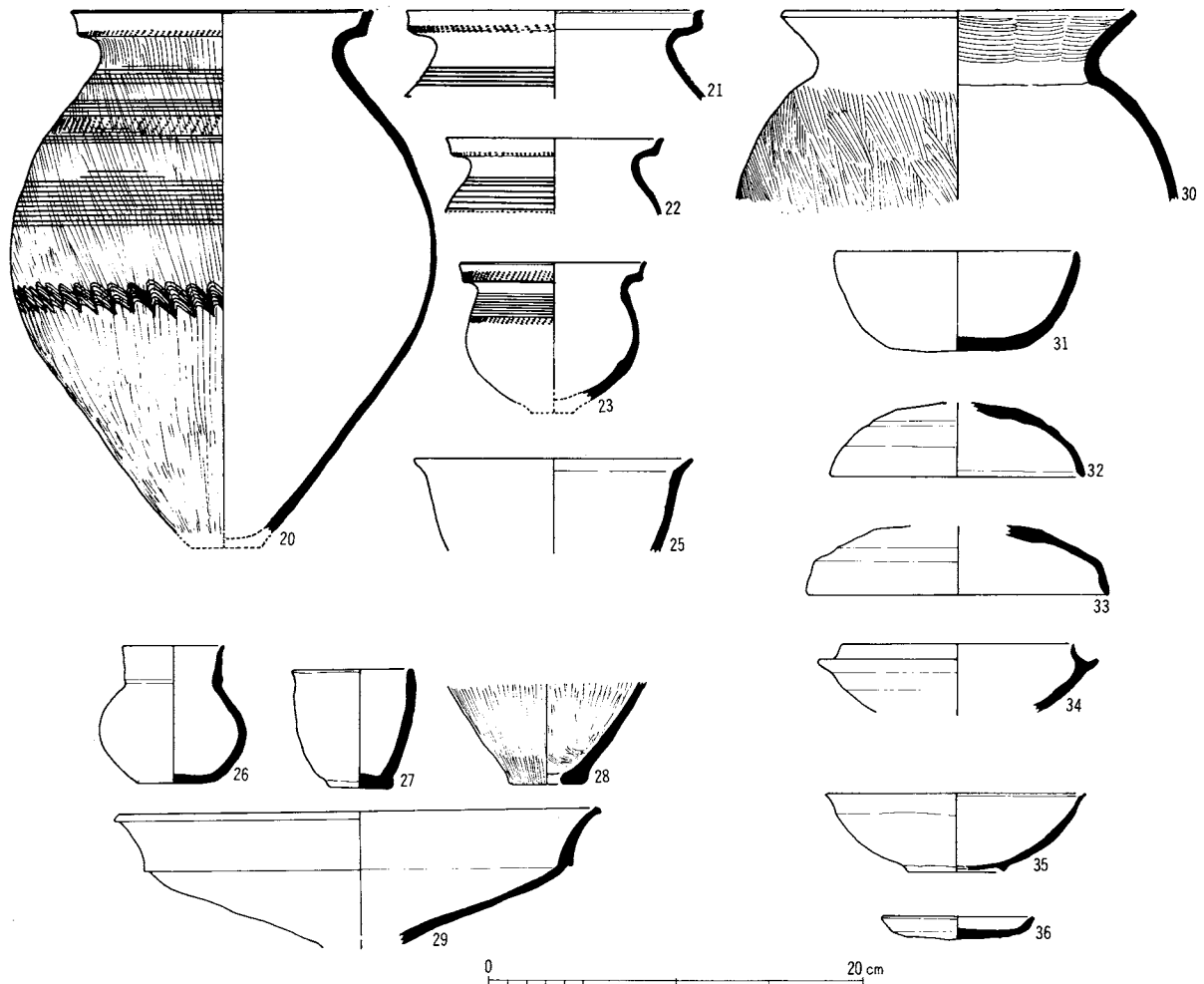
## III 出 土 遺 物

小規模な調査であったため、遺物は整理箱に7～8箱程度である。全て土器で他のものは含まない。その上、大部分がL字状の溝内より出土したもので、僅かに水路部分のトレンチより出土したもの、および表面採集したものがある。

### 1. 溝址出土の土器

壺（1～6） 1～3は直立気味に真すぐ立ちあがる口縁部をもち、なだらかな肩部より胴部につづく、いわゆる長頸壺と呼ばれるものである。1は赤褐色を呈し、全面縦方向に篋研磨され、頸部には篋の刺突が細かく施される。内面には粘土紐のつなぎ痕がのこり、指によるナデツケの痕も見られる。口縁部は5mm程の薄手である。2はやや黒味がかかった淡い茶褐色を呈する。肩部の張りは1ほど強くない。全面に細かい刷毛目が浅く施されており、口縁部はナデツケている。1に比べやや軟質のものである。3は前者のものに比べ大形品で、推定するに全器高50cmを越えると思われる。器厚も厚く1cm近くになる部分もある。砂粒を多く含み、淡い茶褐色を呈するが、胴部内面は青灰色で、剥落する部分もある。全面縦方向の篋研磨をしており、内面は粘土紐のつなぎによる凹凸が見られる。頸部には断面三角形に粘土紐を貼付けて、段状部分をつくり、その下に篋による刺突文を施している。4は口径7cm、器高10cm程度の小形品である。茶褐色を呈し、口縁部内側および口唇部をナデツケ、表面は全て縦方向に篋研磨されている。5は長頸壺の胴下半部と思われる。比較的薄手で、青味がかかった灰色を呈するが、表面は磨滅して調整法は不明である。6は胴部が球形になる壺の破片であろう。やや厚手で、底はくぼんでいる。灰色をおびた褐色を呈する堅緻な土器である。





105

土器実測図 (1 : 3)

**高杯 (7~12)** 杯部分 (7・8) および脚部分 (9~12) のみのものである。杯部分を見ると、7は大きく外反し、やや浅い杯中中央部に稜を有している。内外面とも縦方向の篋研磨され、茶褐色を呈している。8は口縁部の立ちあがり急で、杯部は深く、外面杯底部近くのみ篋研磨されるが、他の部分はナデツケのようである。淡い褐色を呈する。9・10は杯底部より脚部にかけての破片である。9は杯底部が平坦で、細く長い脚部を有する。脚裾部に四孔が穿たれている。表面は篋研磨され、脚内部にはしぼり目がのこっている。10は9に比べ深い杯と思われる。脚部の形状、調整は9とかわらない。いずれも赤褐色を呈している。11・12は小形の脚部分である。11は脚高6cmで大きく外反する裾部を有する。径1.2cmの孔が三個所に穿たれている全面篋研磨され、暗茶褐色土を呈する。12は脚部は僅か3.5cmと低いもので、やや深い鉢状の杯部がつくものであろう。前者同様縦方向の篋研磨が見られ、明るい褐色を呈する。

**器台 (13~17)** いずれも鼓形に上下とも外反する筒形のもので、上端は強い稜を有するが、下端は丸く仕上げられて、装飾は認められない。表面は全面縦方向の篋研磨が施されている。13・14は器高16~17cmで、ほぼ同大のもので、三つの孔が13は交互に、14は同じ個所に二段にあげられている。13は茶褐色を呈し、やや磨滅している。14の胴部は細かい刷毛目による調整のあと篋研磨している。受部は内面にも横方向の篋研磨が認められる。明るい褐色を呈する。15・16は

やや小形で、15は茶褐色を呈し、表面は縦方向の篋研磨であるが、内面には粘土紐のつなぎ痕がのこり、指によるナデツケが見られる、4孔が穿孔される。16は3～6mmの薄手で、少量の細砂を含んでいる。口縁部が大きく外反し、先端は折れ曲っている。穿孔は認められない。灰色をおびた褐色土を呈する。17は中央部分のみで、上・下端部は不明である。中央部径17cm近くで、器壁も8mm近くある大形品である。内面には粘土紐のつなぎ痕がのこるが、表面は全面篋研磨される。赤褐色を呈し、細砂を多く含んでいる。4孔が上・下二段に同じ個所に穿たれている。

**甕 (18～23)** 口縁部が頸部でくの字状に外反するもの(18・19)と、口縁部が直立する受口状となるもの(20～23)がある。18は口径14cmで、口縁部はヨコナデ、胴部は叩目が施されるもので、内面には部分的に篋削りが見られる。淡い茶褐色を呈し、胴土には砂礫を多く含む。19は18に比べ胴長のもので、表面の調整は細かい縦方向の刷毛目である。灰色がかった褐色を呈する。20～23は大小はあるが、いずれも受口状の口縁部はヨコナデをし、口縁下端部に楯状工具による刺突文を施しており、肩部より胴部にかけては横線文、刺突文、波状文などを描いている。20・21は口径26cmの大形品で、楯状工具による施文の前に刷毛目調整されている。20は口縁部がやや外方に開く受口状で、器厚5mm程の薄手である。灰色をおびた褐色を呈し、胎土には細砂を含んでいる。21は20に比べ口縁部が垂直に立ちあがる。頸部内面にも刷毛目が見られる。22は20をやや小形化した形である。黒っぽい黄褐色を呈し、やや軟質である。23は小形品で、鉢に近い形をしている。焼成は良く、薄手で細砂を含む胎土である。淡い褐色を呈している。

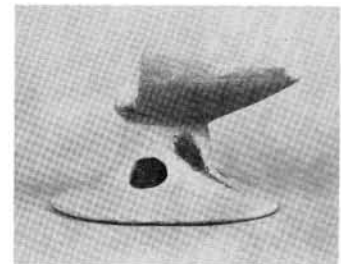
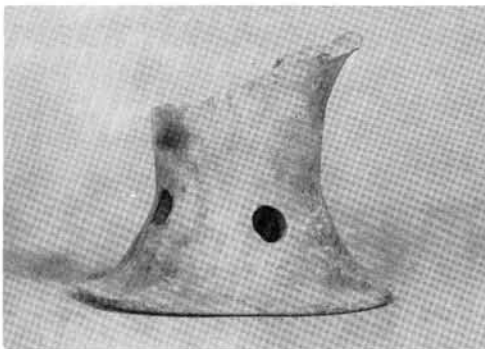
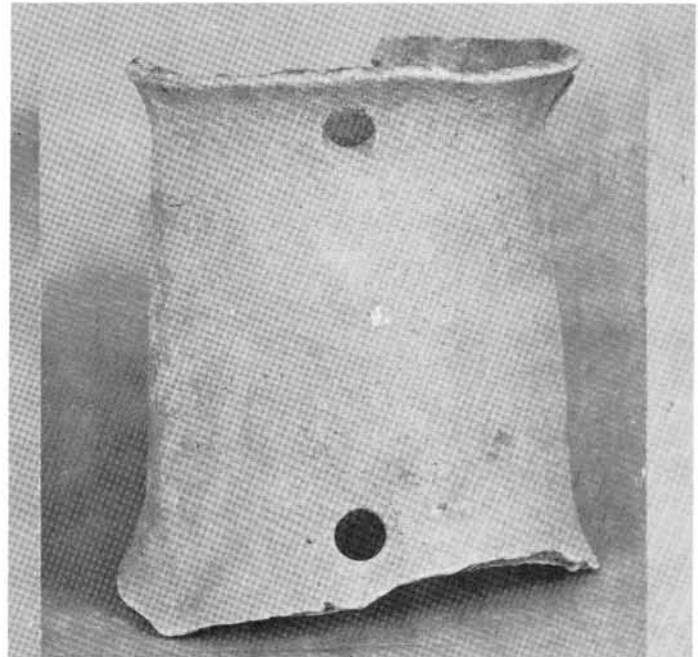
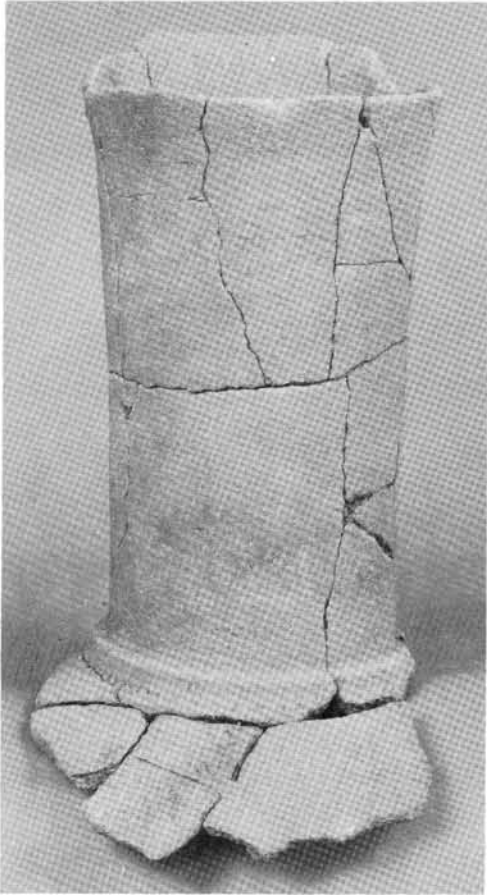
**鉢 (24・25)** いずれも口径14～15cmの小形品である。24は器厚7mmの厚手で、口縁部をヨコナデ、胴下半部は細かい刷毛目が見られる。茶褐色、黒褐色を呈する。細砂、雲母を多く含む。25は茶褐色を呈しやや薄手である。表面はナデツケ、内面はヘラケズリをしているようである。

## 2. 溝址周辺出土の土器

26は口径5.4cm、器高7.3cmの小形の壺である。口縁部が直立し、胴部中央が張り出す平底のもので、口縁部、肩部をヨコナデ、胴下半部を指によるおさえによって調整している。27はコップ形の小形の鉢である。口径6.5cm、器高6.3cmで、茶褐色を呈する。28は甑の底部破片である。細かい刷毛目が縦方向に全面に施されている。黄味をおびた灰色を呈する緻密な胎土である。29は口径26cmの大形の高杯である。杯上半部が外反し、稜を有する。灰褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。

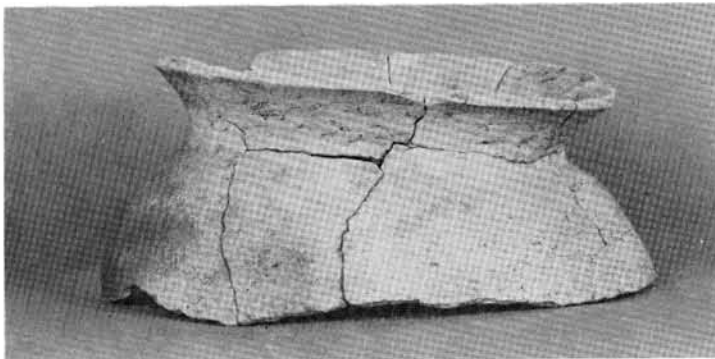
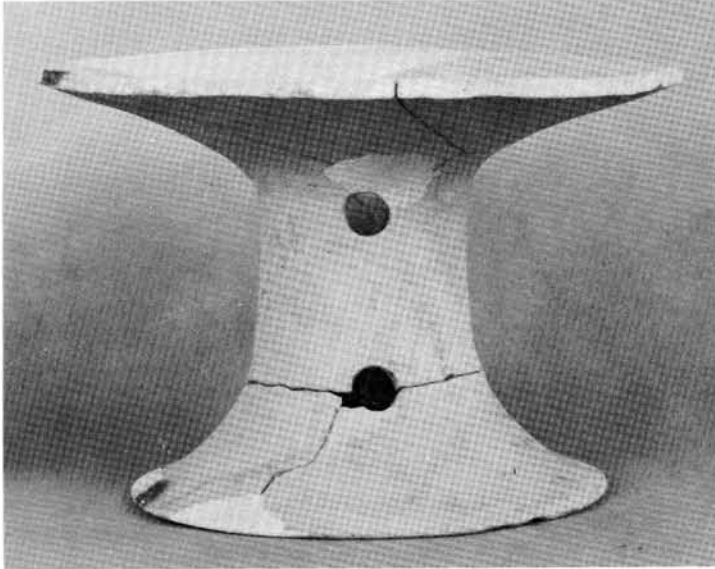
## 3. 改修河川部分出土の土器

土師器甕、杯、須恵器杯がある。土師器甕(30)は口縁部が外反し、胴部は球形を呈すると思われる。全面に粗い刷毛目を斜め方向に施し、口縁部内側にも同様の刷毛目が見られる。黄茶褐





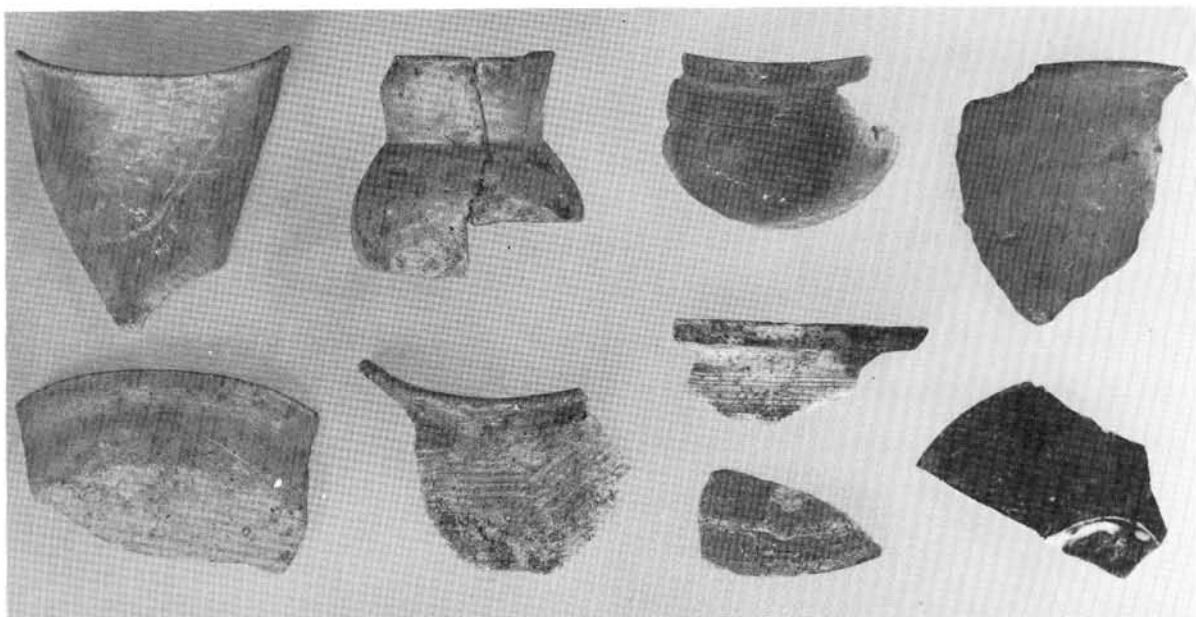
色を呈し、一部磨滅している。杯(31)は口径13cm、器高5.3cmで、半球状のものである。全面磨滅しているが、ナデツケと思われる。淡黄褐色を呈し、胎土には細砂を含む。須恵器杯蓋(32・33)はいずれも口唇部が僅かに肥厚し、立ちあがりかゆるやかで、天井部はへラケズリしている。32はやや焼成は悪く、軟質で黄灰色を呈する。杯身(34)は口縁部が内傾し、やや厚手である。底部はへラケズリされ、青灰色を呈する。



#### 4. 表面採集の土器

**瓦器碗(35)** 口径14cm、器高4.2cm、口縁部をヨコナデ、下半部は指による押えによって調整している。口唇部内面に浅い沈線が一条めぐる。内面にはへラによる暗文が見られる。高台は貼付高台である。

**土師器小皿(36)** 口径8cm、器高1.2cmの小形で、口縁部のみヨコナデ、底は指による調整である。淡い褐色を呈している。



## IV 結 語

山の川遺跡より出土した弥生土器は畿内第V様式の範疇に入るもので、これまで田中遺跡、才良遺跡から出土している土器と同じものである。木製鋤を出土した森寺遺跡の土器も畿内第V様式のものであり、この時期に現在の集落の始まりを求めることが出来る。土器の模様を見ると、既に古く伊賀地方の弥生土器を紹介された宇佐晋一、森川桜男両氏は伊賀の弥生後期の土器を次のように述べられている。<sup>(5)</sup>「-----まったくといってよいほど畿内的で、唐古第V様式や西ノ辻地点の土器と同様である。ただ甕は近江や東海に関連のある受口口縁のものが多く、畿内的なもの少ない」と。山の川遺跡においても長頸壺、高杯、器台などは畿内のもので殆んどかわらないが、甕は口縁部が単純に外反し、叩目あるいは刷毛目が施される畿内的なものに比べ、受口状の口縁部で、口縁部下、肩部、胴部などに櫛状工具による施文が施されているものが多い。これら受口状口縁の土器は四日市々西ヶ広遺跡、鈴鹿市上箕田遺跡に多く見られる。以前、西ヶ広遺跡の報文において、伊勢における弥生後期の編年を、上箕田→西ヶ広→高松であろうとした。<sup>(6)</sup>山の川遺跡の土器群はこの編年の西ヶ広期にあたり、東海地方の編年では欠山式土器の古い段階に相当するものであろう。伊賀においてはこの山の川遺跡のあとに上野市車坂遺跡や更に北堀池遺跡の土器がつづくものと思われる。

これら弥生後期の土器の殆んどが出土した溝址は、僅か延長6 m 足らずを確認したにすぎないが、L字状に曲がるコーナー部分であり、あるいは方形周溝の一部かもしれない。弥生後期の方形周溝の発見は県下においては明和町金剛坂遺跡<sup>(7)</sup>をはじめいくつかあるが、伊賀における発見例はまだ見られない。これは発掘調査例が少ないことにもよるとと思われる。

河川改修部分より出土した土器は古墳時代7世紀前半と考えられ、陶邑編年におけるTK 209に相当するようである。また、表面採集した瓦器碗、土師器小皿は鎌倉時代初頭に属するものと考えられる。

### 註

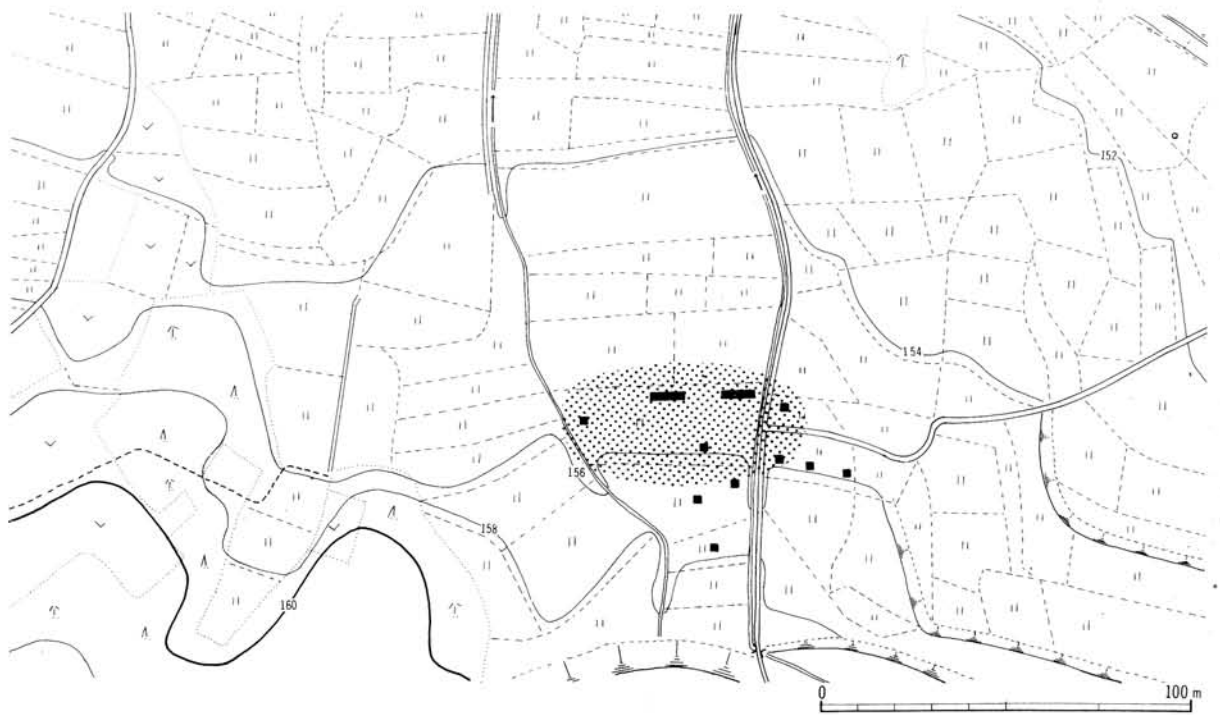
- (1) 沖島卯之・星野献二・宇佐晋一「三重県上野市田中遺跡の縄文土器」『古代学研究』18 1958
- (2) 沖島卯之「三重県田中遺跡出土の瓦器と緑釉土器片」『古代学研究』15・16 1956
- (3) 西嶋覚・他「三重県上野市上之庄神座山遺跡」『古代学研究』33 1963
- (4) 吉水康夫・駒田利治・山田猛『北堀池遺跡調査概要』I 『同』II 三重県教育委員会 1978・1979
- (5) 宇佐晋一・森川桜男「伊賀に於ける弥生式土器・土師器集成」『伊賀郷土史研究』4 1961
- (6) 三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 1970
- (7) 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』 明和町教育委員会 1971

# 上野市猪田 波岸台遺跡

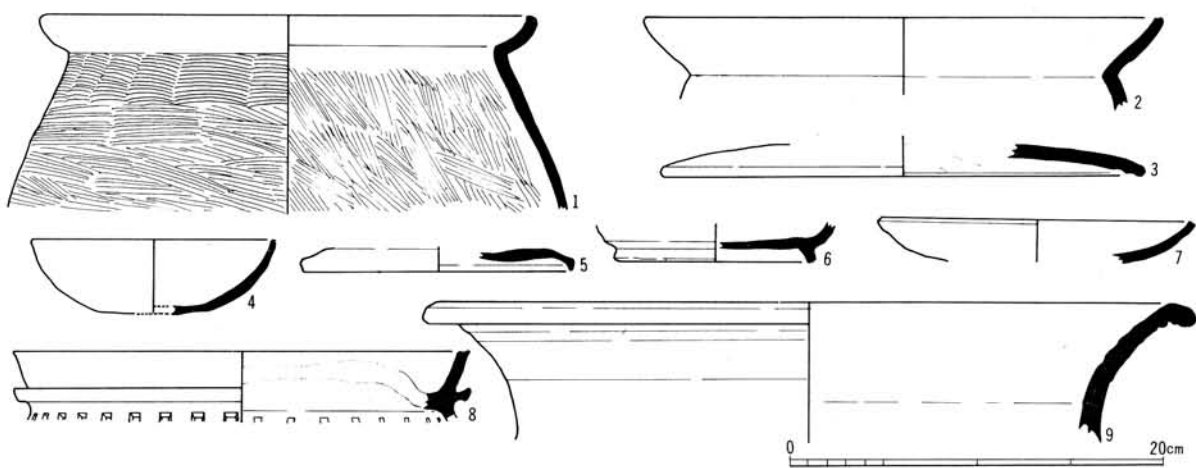
## I 位 置

波岸台遺跡は、上野市猪田地区でもその南東部にひろがる標高180m前後のなだらかな丘陵地の北麓にある。遺跡の標高は156m前後で、猪田神社の西方約100mにあたり、北側には長田川の沖積地が広くひらけ、猪田、田中の集落、さらには対岸の依那具の集落をも一望することができる。圃場整備前の地形図によれば、この遺跡の所在する水田一帯は、東側及び西側よりわずかにたかまりを見せて北側に張り出した格好の地形をなしている。遺跡の南側の丘陵地の各所には多くの遺跡や古墳が知られていて、長田川流域において遺跡の所在密度の高い地域となっている。<sup>(1)</sup>木製鋤を出土した森寺遺跡をはじめ、猪田神社古墳群、森寺古墳群、唐木谷古墳群などがそれぞれある。また東方には、下郡、下郡という地名から郡衙の存在の予想される所もあり、圃場整備さ<sup>(2)</sup>れる以前は、各所で条理地割の名残りがよく認められていた。さらに長田川の対岸には才良寺跡<sup>(3)</sup>もよく知られている。





109 発掘区の位置 (1 : 2000)



110 土器実測図 (1 : 4)



111 土器 (1 : 3 8円面硯)

## II 出土遺物

現況は標高160m前後の水田で、2m×2mのグリッドを合計11か所を各水田に設定した。そのうち、6か所より遺物の出土が見られた。一部についてはグリッドを拡張してみた。遺物は耕作土の暗茶褐色土から出土するが、小破片が多く、明らかな遺構は認められなかった。遺物の出土状況から、この遺跡の範囲は約3000㎡以上にひろがるものと考えられた。グリッド調査による試掘調査のみであったため、僅かに整理箱2箱にも満たない量で、その上いずれも破片で、図化出来るものも少ない。

### 1. 土師器

**甕 (1・2)** 口径27~28cmの大形品で、口縁部近くの破片であるが、あまり肩の張らない長胴の甕と思われる。口縁部が内弯気味に外方に開く。1は白っぽい肌色を呈し胎土には細砂を多く含む。口縁部はヨコナデ、胴部は粗い刷毛目が表面は横方向、内面は斜方向に施されている。2は1に比べ口縁部の内弯が弱い。磨滅が甚しく調整法は不明であるが、1と同様であろう。白っぽい茶褐色を呈している。

**蓋 (3)** 径26cmの大形品で、口唇部及び内面はヨコナデによって調整し、口唇部内側には浅い凹線状の沈線が2条めぐり。表面は全面横方向のヘラケズリをしている。黄灰色を呈し、胎土は緻密である。

**杯 (4)** 口径13cm、器高4cmのやや深い杯である。表面は磨滅しているが、口縁部はヨコナデ、下半部が指による押えと思われる。黄茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。

### 2. 須恵器

**杯蓋 (5)** 口径14.4cm、口唇部がつまみ出されたようにつき出る。天井部はヘラケズリ、青灰色を呈している。

**杯身 (6)** 高台部分の破片である。青灰色を呈する。

**盤 (7)** 小破片であるが、器種は高台の剥落部分があるため盤と思われる。口径17cm、高台の径9cm位である。白っぽい青灰色を呈する。

**円面硯 (8)** 前者同様小破片である。透し部分が2個程明らかであるため硯と判断した。径25cmのやや大形品である。海部分までで、陸部分は不明である。脚部の透しは幅7mmと狭く、縦長の長方形の透しが密にあげられていたものであろう。透しの上部に一条の凸帯がめぐり。青

灰色を呈し、胎土は緻密である。

甕(9) 口径40cmの大形品で、大きく外反する口縁部破片である。口唇部外側に深い沈線がめぐる。黒っぽい灰色を呈している。

### III 結 語

波岸台遺跡は試掘調査のみであった。出土した土器も少量であったが、円面碗の破片が一点出土している。碗の出土はこれまで三重県下で10遺跡が知られているが、伊賀地方においては初めてである。当遺跡のすぐ西側の唐木谷遺跡からは須恵器杯蓋を碗に転用している例が出土しており、墨書土器も見られる。唐木谷遺跡とともに長田川の沖積地を臨むこの地は一般集落とは考え<sup>(4)</sup>難く、官衙的性格が窺われる。出土した土器はいずれも奈良時代に属するものと考えられる。この期の土器については伊賀地方では出土例は少なく不明な点が多いが、土師器甕を見ると、伊勢地方のものやや趣を異にしている。

#### 註

- (1) 森川桜男「三重県上野市森寺発見の木鋤」『古代学研究』14 1956
- (2) 中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会他 1978
- (3) 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡概報」『古代学研究』12 1955
- (4) 山本雅靖『唐木谷遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 1979

昭和49（1974）年12月に刊行されたものをもとに  
平成16（2004）年10月にデジタル化しました

三重県埋蔵文化材調査報告 24

昭和48年度県営圃場整備事業地域

## 埋蔵文化財発掘調査報告

---

1979年12月

発行 三重県教育委員会